

Passerelle Report

パスレル レポート



厚生労働省
令和7年度障害者芸術文化活動普及支援事業

中国・四国ブロック 障害者芸術文化活動広域支援センター
[中国・四国 Artbrut Support Center passerelle]

令和7年度 事業報告書

目次

- 1 はじめに | 岡村忠弘
- 2 エッセイ『切っ掛け』 | 北添紫光

中国・四国ブロックの各支援センターの取り組み

- 4 鳥取県 あいサポート・アートセンター
- 6 島根県 島根県障がい者文化芸術活動支援センター アートスペースしまねいろ
- 8 岡山県 岡山県子ども・福祉部障害福祉課
- 10 広島県 広島県アートサポートセンター
- 14 山口県 山口県障害者芸術文化活動支援センター
- 16 徳島県 徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター
- 18 香川県 香川みんなのアート活動センター KAGAWA MOVES
- 20 愛媛県 愛媛県障がい者アートサポートセンター
- 22 高知県 藁工ミュージアム 分室

主催事業：アート活動を始めようとする事業所のファーストステップに伴走する企画

- 26 「アート活動を始めようとする事業所のファーストステップに伴走する企画」 事業概要
- 27 エッセイ「4年目のファーストステップ」 | 平谷尚大
- 28 岡山県 倉敷市障がい者デイサービスセンター
- 30 岡山県 リエゾン
- 32 島根県 ポレポレ
- 34 山口県 ステップあそかの園
- 36 山口県 けあぼーときゃんぱす
- 38 山口県 チャイルドハウスひなたぼっこ
- 40 ふりかえり座談会
- 47 セカンドステップを通して | 原田幸子（ひなたぼっこ）

主催事業：アートデリバリープロジェクト2025

- 48 事業概要
- 49 ふらっとアート工房 AIR
- 62 あっぱーあーむのアトリエ 〜どげんなもんか一緒にやってみーだわね〜
- 68 アートデリバリープロジェクト2025を終えて | 土谷享

- 69 その他の取り組み
- 70 エピローグ「共に場にいるということ」 | 岡村忠弘

はじめに

中国・四国 Artbrut Support Center passerelle（パスレル）が、障害者芸術文化活動普及支援事業の中国・四国ブロックの広域センターとして活動を開始して、6年を迎えました。今年度も、各地の支援センターおよび行政の皆さまと連携しながら、地域に根ざした多様な取り組みを展開してまいりました。

本誌では、第1章において中国・四国ブロック各支援センターの取り組みを紹介し、第2章では当センター主催事業である「アート活動を始めようとする事業所のファーストステップに伴走する企画」を取り上げています。本企画は継続して実施する中で、今年度も新たにアート活動に取り組む事業所が増え、各地で表現の芽が着実に広がっていることを実感しています。そして第3章では、同じく当センター主催事業である「アートデリバリープロジェクト」について詳しくご紹介します。

今年度の「アートデリバリープロジェクト」では、アーティスト・イン・レジデンスを実施し、「越境」をテーマに据えた取り組みを行いました。地域や立場を越えて交わる中で、多様な価値観や表現が交差し、新たな創造の可能性が生まれました。また、もう一つの取り組みとして実施したオープンアトリエでは、誰もが気軽に参加できる開かれた場をつくることで、表現と人、人と地域がつながる機会を創出しました。

これらの取り組みは、いずれも多くの「出会い」と「つながり」を生み出し、芸術文化が持つ力を改めて実感する機会となりました。表現の場をつくること、そしてその場が循環し広がっていくことの重要性を大切にしながら、今後も中国・四国ブロックの皆さまと共に歩みを進めてまいります。

本誌が、本事業への理解を深めていただく一助となるとともに、障害者の芸術文化活動のさらなる普及と発展につながれば幸いです。

中国・四国 Artbrut Support Center passerelle
センター長 岡村忠弘



『切っ掛け』 非日常は必要か？もちろん誰に対しても変化は希望の源泉

私は演奏活動と輸入雑貨販売、そして今年からは音響やイベントの会社に入って商品開発部長を勤めそれらの経験を活かしてパスレル [障がい者芸術文化活動普及支援事業広域センター] にコーディネーターとして参加させていただいております北添と申します。

自分自身で音楽を仕事にし始めて10年以上経ちパスレルに関わるようになって5年以上経ちました。

今回のタイトル「切っ掛け」とは物事を始める手がかりや原因、動機を指す言葉です。歌舞伎の舞台で「見得を切る」という動作を合図に、裏方が「駆け」出す様子から生まれたという説がある通り、何かを切り始める部分、あるいは動作の始まりを意味しています。

今までも感じていた事なのですがアート事業とはまさにこの『切っ掛け』になり得ると思うのです。

福祉の現場でもっとより良いサポートがしたいと思った時

に日常の中で発見できる事での対処は皆さんやられていると思うのです、ではその先はどうするのか？という話です。日々のサポートもブラッシュアップが続いているうちは希望があると思います、しかしある程度もう「わかってしまった」その先です。

アート事業で福祉の現場に行った際振り返りに必ず話題に出るのが「利用者さんの新しい一面を見た」「利用者が出てくること出来ないことを決めつけ過ぎていたかも」です、そして時を置いて継続して聞き取りする中でその新しい一面がサポートに結びついていく事がわかりました。アート事業中に利用者さんの見せた行動からサポートがより最適化されたりブレイクスルーが生まれたりしている、そんな事によく遭遇します。

物をすぐに破いてしまう壊してしまう方が『新聞紙を破くワークショップ』と出会うと、、、ご家族の方から家庭内で

の行動について相談を受けていたが家族参加型のワークショップを受けて実際見てみると、、、など枚挙にいとまがない。

そしてそのどれもがそのワークショップを切っ掛けにサポートが動き出している。

時に熟達熟練の仕方でも人それぞれで日々業務にあたる職員の皆さんも得意な事はそれぞれ違う。しかしほぼ一様に一旦わかった事に対処する事に対しては皆スペシャリストであるように求められそのようになっていると思う。

だとするならば福祉の現場にはもっと利用者の皆さんの日常とは違った一面を引き出しサポートの最適化やブラッシュアップ、ブレイクスルーを見つける『切っ掛け』としてアート事業を導入する事がが必要ではないかと思う。

そして余談だがその福祉施設でのワークショップに外からも人が参加したりして将来福祉施設がそんな楽しい事のプラットフォームの1つになってたりしたら最高だと思う。

障害者芸術文化活動広域支援センターパスレル
舞台芸術部門コーディネーター 北添紫光



鳥取県立バリアフリー美術館の管理運営

2025年4月1日(火)～2026年3月31日(火)

障がいのあるアーティストの作品に特化したオンライン上の美術館の管理運営、企画展の実施、作品の発掘調査。

障がい者アート活動支援事業補助金

2025年4月1日(火)～2026年3月31日(火)

障がいのある方を含むグループ・団体が、作品展への出展や発表会への出演などを目指し、指導者等の指導を受けながら行うアート活動等に対して支援を行う制度。

山陰ご当地フォントプロジェクトの支援

2025年4月1日(火)～2026年3月31日(火)

障がいのある方とデザイナーが協力してフォントとパターンを制作し、収益を生みながら社会とつながる還元するプロジェクトの支援。

フリーペーパー Hugsの発行

2025年7月、12月

障がいと共に生きるアーティスト達とそこにある世界を発信。note、YouTubeも運用。

大阪・関西万博での展示

2025年7月15日(火)～7月21日(月)、

2025年10月8日(水)～10月11日(土) |

関西パビリオン 多目的エリア EXPO ホール

レプリカ作品の展示や、鳥取県立バリアフリー美術館の紹介、ワークショップなど

MeetuP vol.04+

2025年7月19日(土)～8月8日(金) | 鳥取県立美術館県民ギャラリー

「鳥取県立バリアフリー美術館」常設展示室31作品のリアル展示ならびに全国の多様な表現(協力：たんぼぼの家)を展示。

MeetuP vol.05+

2025年9月13日(土)～9月28日(日) |

鳥取県立美術館県コレクションギャラリー4

「鳥取県立バリアフリー美術館」常設展示室20作品のリアル展示ならびに「障害者の文化芸術国際フェスティバル」アール・ブリュット展(主催：全国手をつなぐ育成会連合会、日本芸術文化振興会、文化庁、鳥取県)。

きらめきアート展への協力

2025年10月11日(土)～10月26日(日) |

鳥取市民会館、鳥取市文化センター、わらべ館、城下町とっとり交流館、鳥取城跡仁風閣展示館、やまびこ館

『鳥取県はーとふるアートギャラリー』認定東部3施設(アトスペースからふる・十人十色・鹿野第二かちみ園)の作品を鳥取市内の文化施設に展示(主催：鳥取市教育福祉振興会 共催：鳥取市文化財団、鳥取童話・おもちゃ館)

フクシ×アートフォーラム「素晴らしきアートの世界」

2025年11月9日(日) | わらべ館 いべんとほーる

フクシ×アートWEEKs 2025 連携企画。講師：黒澤 浩美 氏(ヘラルボニー CAO / 元金沢21世紀美術館チーフキュレーター)座談会：三浦努氏(鳥取県立美術館学芸課長)、石田陽介氏(鳥取大学准教授)、妹尾恵依子(あいサポート・アートセンターセンター長)

鳥取県はーとふるアートギャラリー合同展

「はーとをふるわせて5」

2025年11月10日(月)～11月24日(月) | ギャラリー鳥たちのいえ

障がいと共に生きるアーティスト達の作品を気軽に鑑賞できる「鳥取県はーとふるアートギャラリー」の合同展

「鳥取県インクルーシブ・アートシェアリングワークショップ」への協力

2025年12月5日(金) | 青翔開智高校

授業の一環として目の見える人と見えない人の障がい者アートの共同鑑賞を鳥取大学、鳥取県と連携し実施

あいサポート・アートとっとり展の企画運営

2025年12月6日(土)～2026年2月1日 | 米子市美術館、鳥取県立美術館、

鳥取県立博物館

主催鳥取県。鳥取県内の障がいのある人たちを対象に募集したアート作品を一堂に展示する展覧会の運営

アート講座

「障がい者とアートとの関わりについて」

2026年1月23日(金)、1月30日(金) | 鳥取西高校

1年生7クラスを対象に障がいのある方のアート活動について講義。講義後はあいサポート・アートとっとり展を鑑賞

鳥取県物産展出店

2026年2月17日(火) | 明治安田ヴィレージ丸の内

障がい者アート・商品の展示と販売のコーナー



フクシ×アートフォーラム



HugsのYouTube



あいサポート・アートとっとり展



鳥取県はーとふるアートギャラリー合同展



アート講座「障がい者とアートとの関わりについて」

島根県障がい者文化芸術活動支援センター アートベースしまねいろ

アートなじかん 〜スケッチの会・春〜

2025年5月24日(土) | みさと館 町民ホール

春の美郷町を舞台に、自分の感性のままに自由にスケッチを楽しむ会。絵本作家・兒玉季世さんも参加して交流を楽しむ。

主催：美郷町役場 健康福祉課 共催：社会福祉法人わかば会・地域活動支援センターあおぞら 協力：島根県障がい者文化芸術活動支援センター アートベースしまねいろ

あっぱーあーむと行く、見学ツアー

① 2025年6月14日(土) | 「やまなみ工房」<滋賀県甲賀市>

② 2025年6月28日(土) | 「ぬか つくるところ」<岡山県都窪郡>

各々全く別の福祉現場で働く人間が無然にも出会い、同じ思いを持って立ち上げた、有志によるグループ、「あっぱーあーむ」による見学ツアー。

主催：あっぱーあーむ 協力：島根県障がい者文化芸術活動支援センター アートベースしまねいろ

アートなじかん【ひろげる会・夏】

〜あなたの「つくりたい」を広げる時間〜

2025年6月28日(土) | みさと館 町民ホール

スケッチを仕上げる人。好ききだった絵を描く人。作りかけの作品にもう一度手を伸ばす人。新しく何かを作り始める人。「つくりたい」気持ちを受け止めるアートの会。

主催：美郷町役場 健康福祉課 共催：社会福祉法人わかば会・地域活動支援センターあおぞら 協力：島根県障がい者文化芸術活動支援センター アートベースしまねいろ

Dub Dub Drawーダブ・ダブ・ドロー

2025年9月3日(水)ー11月30日(日) | art space co-jin

木村全彦、小林譲治、舟木伸夫の3名による作品展。

主催：art space co-jin(きょうと障害者文化芸術推進機構) 協力：京都市ふしみ学園 アトリエやっぽう!! / 社会福祉法人新明塾 ju: 彩ギャラリー / 社会福祉法人四ツ葉福祉会 四ツ葉園 / 島根県障がい者文化芸術活動支援センター アートベースしまねいろ

みさとと。あーとな わたしたち 2025 美郷町アート展

2025年10月22日(水)ー10月26日(日) | みさと館 町民ホール

期間中、様々な分野のみなさんとの素敵なアート作品の展示。だれでも参加できて、だれもが楽しめるアート展。

主催：美郷町役場健康福祉課 社会福祉法人わかば会・地域活動支援センターあおぞら 協力：島根県障がい者文化芸術活動支援センター アートベースしまねいろ / 美郷町立図書館みさと本の森

第3回 アクアート2025ーしずかでにぎやかなうみー

① 2025.10.28(火)② 2025.11.4(火) | しまね海洋館 アクアス館内

休館日の水族館を満喫しながらリラックスして創作活動を楽しむ会。

主催：島根県障がい者文化芸術活動支援センター アートベースしまねいろ 共催：島根県立しまね海洋館アクアス / 島根県立大学地域政策学部地域づくりコース 村岡ゼミ / Atelier Sunoiro(アトリエ・スノイロ) 後援：浜田市 / 江津市

第3回 アクアート2025ーうみ・いろ・かたち展ー

2025年11月26日(水)ー12月15日(月) | しまね海洋館 アクアス ペンギン館

アクアスでの創作イベント「アクアート2025ーしずかでにぎやかなうみー」で制作された作品展示や、「ミニアクアート」でワークショップを開催。

主催：島根県障がい者文化芸術活動支援センター アートベースしまねいろ 共催：島根県立しまね海洋館アクアス / 島根県立大学 地域政策学部 地域づくりコース 村岡ゼミ / Atelier Sunoiro(アトリエ・スノイロ) 後援：浜田市 / 江津市

R7島根県障がい者アート作品展ブレイベント

第44回社会福祉法人 いわみ福祉会「大収穫祭」

2025年11月23日(日祝) | 浜田市金城総合運動公園ふれあいジム・かなぎ

「令和7年度島根県障がい者アート作品展」のブレイベントとして、アート作品の展示やワークショップ、石見神楽などの舞台公演を開催。

主催：社会福祉法人いわみ福祉会 協力：島根県 / 島根県障がい者文化芸術活動支援センターアートベースしまねいろ / マックスパワーサウンド

「音の行方」上映会 & トーク／

音遊びの会 LIVE「音のグラングラン」

①「音の行方」上映会 & トーク：2025年11月29日(土) |

Shimane Cinema ONOZAWA(小野沢シネマ)

②音遊びの会 LIVE「音のグラングラン」：2025年11月30日(日) |

島根県芸術文化センター「グラントワ」大ホール 舞台上舞台

グラントワダイバーシティいわみ事業として、「音遊びの会」によるドキュメンタリー映画の上映とトーク、ライブ演奏の開催。

主催：文化庁 / 島根県 / 公益財団法人しまね文化振興財団(いわみ芸術劇場) 共催：島根県障がい者文化芸術活動支援センター アートベースしまねいろ / 芸術文化とふれあう協議会 協力：Shimane Cinema Onozawa / くじらの

令和7年度島根県障がい者アート作品展

2025年12月5日(金)ー12月7日(日) | 島根県立美術館ギャラリー

県内の障がいのある方のアート作品展示、支援者向け公開審査会、オープニングセレモニー(表彰式)、鳥取県招待作品の展示、ギャラリートークの開催。

主催：島根県 / 島根県障がい者文化芸術活動支援センター アートベースしまねいろ 協力：社会福祉法人島根県社会福祉協議会 / 島根県知的障害者福祉協会 / 島根県立大学・島根県立大学短期大学部 / あいサポート・アートセンター 後援：公益財団法人しまね文化振興財団 / 島根県障害者社会参加推進センター

にぎやかな神楽 in 松江

2026年1月24日(土) | 島根県民会館大ホール

「2025大阪・関西万博 文化芸術ユニバーサル・ツーリズムプロジェクト」と連携・協働しただれもが楽しむことのできる石見神楽バリアフリー公演の実施。

主催：島根県 / 島根県障がい者文化芸術活動支援センター アートベースしまねいろ 共催：(公財)しまね文化振興財団(島根県民会館) 協力：小林工房 / あっぱーあーむ

あっぱーあーむのアトリエ

〜どげなもんか一緒にやってみーだわね〜

2026年2月14日(土)ー2月15日(日) | 松江市市民活動センター 1F 展示室

子どもから大人まで、障がいの有無を問わず、誰もが自由に表現できるインクルーシブな創作アトリエの実施。

主催：あっぱーあーむ 共催：中国・四国 Artbrut Support Center passerelle(パスレル) / アートテリバリープロジェクト2025 / 島根県障がい者文化芸術活動支援センターアートベースしまねいろ 協力：まつえ白濁賑わい協議会 / (株)江友

令和7年度島根県障がい者アート作品展巡回展 in グラントワ

2026年2月20日(金)ー2月22日(日) |

島根県芸術文化センター「グラントワ」多目的ギャラリー

令和7年度島根県障がい者アート作品展の受賞作品および鳥取県招待作品の展示、栗山千尋さんによるワークショップの実施。

主催：島根県 / 島根県障がい者文化芸術活動支援センター アートベースしまねいろ 協力：鳥取県「あいサポート・アートセンター」



「にぎやかな神楽in松江」ロビーイベント着付け体験



令和7年度島根県障がい者アート作品展



アクアート2025



「にぎやかな神楽in松江」ロビーイベントの交流の様子



令和7年度島根県障がい者アート作品展巡回展inグラントワ

障害のある人のアートギャラリー

2025年4月1日(火)～2026年3月31日(火)※月ごとに作品を入れ替え | 県庁県民室(8、12、2月以外)、岡山空港(8月)、きらめきプラザ(12月)、岡山県生涯学習センター(2月)

福祉施設の利用者が制作した、絵画、切り絵等の平面作品を年間を通じて展示。

ノウフクマルシェ(ステージイベント)

2025年11月29日(土) | 下石井公園

障害のある方やその仲間たちによる、ピアノ演奏、手話歌等を実施。
主催：岡山県 運営事務局：岡山県社会就労センター協議会

ゆうあい福祉展(岡山県知的障害者福祉展開催事業)

2025年12月10日(水)ほか | イオンモール津山ほか

県内の知的障害のある方が、施設や地域で日々生活している様子や、社会自立に向かって努力している姿を、写真及び作品・生産物などで紹介。
主催：岡山県、岡山県知的障害者福祉協会

障害のある人の芸術文化活動に係る人材育成セミナー

2026年3月13日(金) | 岡山県庁

障害者アートの基礎知識や日頃の支援活動での活用方法等、障害者アートの裾野を広げることを目的に、県内の施設・事業所職員を対象としたセミナーを開催。ワークショップとして、当事者を交えたアート制作、対話型鑑賞を実施。対話を通じた事業所間交流の場の提供。
主催：岡山県

情報発信

2025年4月1日(火)～2026年3月31日(火)

県内外の文化芸術に関する情報をホームページを通じて発信。



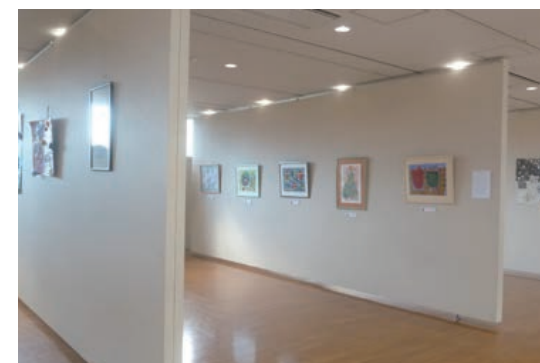
人材育成セミナー



ノウフクマルシェ



ゆうあい文化祭



アートギャラリー

広島

支援センター

広島県アートサポートセンター

はじめてのコンテンポラリーダンス セミナー&ワークショップ
ショップときどきおしゃべり
「ほぐすつながる ひょうげんあそび」

2025年9月15日(月祝)
午前の部 10:00-12:00 午後の部 13:30-15:30 |
広島市心身障害者福祉センター 多目的室

講師：ART COMPLEX HIROSHIMA 代表 玖島 雅子
内容：午前中は活動報告を通してサポートのポイントを学び、午後は、実際に身体をほぐし、多様な方法で対話を楽しんだ。 主催：広島県 運営主体：広島県アートサポートセンター

はじめての音・音楽 ワークショップときどきおしゃべり
「きく・かなでる・つながる 音のじかん1」

2025年10月4日(土) 10:00-12:00 |
広島市安芸区民文化センター音楽室

ファシリテーター：もア太
内容：いろいろな楽器の演奏を鑑賞。リズムに合わせて身体を動かすこと、声を出すこと、合奏する楽しさを体験をした。 主催：広島県 運営主体：広島県アートサポートセンター

はじめての音・音楽 セミナー&ワークショップ ときどきおしゃべり
「きく・かなでる・つながる 音のじかん2」

2025年10月16日(土)
午前の部 10:00-12:00 午後の部 13:30-15:30 |
広島市東区民文化センター音楽室

講師：MUSIC POWER for ALL. 代表 狩谷 美穂
内容：午前中は音楽療法について学び、午後は心地よい音やリズムを見つけ、他者と音を通して対話する楽しさを学んだ。 主催：広島県 運営主体：広島県アートサポートセンター

はじめての展覧会 セミナー&おしゃべり会
ときどきおしゃべり「アトリエ(居場所)のある作業所」

2025年11月29日(土) 13:00-15:00 |
庄原市交通交流施設(備後庄原駅舎) 地域交流室1

講師：特定非営利活動法人 灯心会 松田 圭一 内容：灯心会の作品鑑賞やアート取り組みなどの話を聞いた後、参加者と対話をしながら、アート活動を行うために大切なポイントを考えた。主催：広島県 運営主体：広島県アートサポートセンター

専門家派遣「社会福祉法人友和の里」

2025年6月13日(金) 9:00-13:00 | 社会福祉法人友和の里

講師：ART COMPLEX HIROSHIMA 代表 玖島 雅子 内容：身体を動かす楽しさを体験した。主催：社会福祉法人友和の里 企画／コーディネート：広島県アートサポートセンター

専門家派遣「NOIE ONOMICHI」

2025年7月14日(月) 10:00-12:00、
2025年8月27日(水) 10:00-12:00 | NOIE ONOMICHI

講師：穂波 正豊 内容：ステレン版画を体験した。主催：NOIE ONOMICHI 企画／コーディネート：広島県アートサポートセンター

専門家派遣「キュアシス富士見町」

2025年12月6日(土) 13:00-16:00 | キュアシス富士見町

講師：細川 泉 内容：「クリスマスをたのしもう!」をテーマに絵の具遊びやオブジェの制作を楽しんだ。主催：キュアシス富士見 企画／コーディネート：広島県アートサポートセンター

専門家派遣「Smile Base」

2026年1月24日(土) 10:00-12:00、
2026年3月19日(木) 10:00-12:00 | Smile Base

講師：向井 陽子 内容：シルクスクリーンの版づくりや上手く刷るコツなどを学んだ。主催：Smile Base 企画／コーディネート：広島県アートサポートセンター

専門家派遣「one's art」

2026年3月13日(金) 13:00-15:00 | ギャラリーカフェ ぶどうの木
講師：橘 篤史 内容：樹脂粘土を使って立体作品作りにチャレンジした。主催：one's art 企画／コーディネート：広島県アートサポートセンター

おしゃべり鑑賞会1

2025年6月15日(日) 10:00-11:00 | 広島県立美術館

ファシリテーター：舞台芸術制作室無色透明 内容：フリートークデイを活用し、対話型鑑賞会を実施した。 共催：アートと共生に関する調査および施策一体型プロジェクト(広島県、広島大学、広島県立美術館、広島県アートサポートセンター)

おしゃべり鑑賞会2

2025年9月27日(土) 10:00-11:30 | 佐東公民館

ファシリテーター：舞台芸術制作室無色透明 内容：美術館紹介動画のシナリオ作りを目的に、スクリーンに映された作品画像を見ながら対話型鑑賞会を実施した。 共催：アートと共生に関する調査および施策一体型プロジェクト(広島県、広島大学、広島県立美術館、広島県アートサポートセンター)

ブルックリン博物館所蔵 特別展 古代エジプト
学芸員による手話通訳付ギャラリートーク

2025年10月24(金) 17:00-19:00 | 広島県立美術館

解説：広島県立美術館 学芸員 福田浩子 内容：企画展のギャラリートークに手話通訳者を配置した。 主催：ブルックリン博物館、広島県立美術館、広島テレビ、イズミテクノ、中国新聞社 共催：アートと共生に関する調査および施策一体型プロジェクト(広島県、広島大学、広島県立美術館、広島県アートサポートセンター)

美術館紹介動画

「美術館鑑賞の楽しみ 対話で作品の世界を味わう」

2025年12月1日(月) 9:00-17:30 | 広島県立美術館

内容：所蔵作品を元にシナリオを作成し、多様で包括的なアクセスビリティに向けての動画を制作した。 企画：アートと共生に関する調査および施策一体型プロジェクト(広島大学、広島県立美術館、認定 NPO 法人ひゅーるぼん、広島県アートサポートセンター)

アートの巣箱助成プログラム

「ボンジョルノ♪ムジカのおくりもの」

2025年12月26日(金) | ふくやま芸術文化ホール・リーデンローズ
助成：令和7年度広島県障害者文化芸術活動支援事業「アートの巣箱」、国立青少年教育振興機構「子どもゆめ基金助成活動」

内容：音楽の力を体験できるコンサートの助成を行なった。 主催：有限会社ムジカ(ムジカ音楽学園、ワークスペースムジカ) 助成：令和7年度広島県障害者文化芸術活動支援事業「アートの巣箱」、令和7年度地域交流支援事業

アートの巣箱プログラム「和えるダンス」

2026年1月10日(土)ー1月12日(月祝) |
広島市東区民文化センターロビーギャラリー

内容：クリエイションダンスワークショップと発表会の助成を行なった。 主催：ART COMPLEX HIROSHIMA 協力：KAZOO ナミノセボネ 助成：令和7年度広島県障害者文化芸術活動支援事業「アートの巣箱」



「おしゃべり鑑賞会」の実施



「きく・かなでる・つながる 音のじかん1」



アートセミナー「アトリエ(居場所)のある作業所」



「きく・かなでる・つながる 音のじかん2」



「ほぐす つながる ひょうげんあそび」

アートの巣箱プログラム

「音楽療法士によるファミリーコンサート」

2026年1月18日(日)|東広島芸術文化ホール くら小ホール

内容:子どもも大人も、障がいの有無や年齢をこえて一緒に楽しめるコンサートの助成を行なった。

主催:音楽療法サークル「ゆきりと」 助成:令和7年度広島県障害者文化芸術活動支援事業「アートの巣箱」、国立青少年教育振興機構「子どもゆめ基金助成活動」

おきらく劇場ピロシマ演劇クラブと発表会の稽古

2025年6月15日(日)13:00-16:00、

2025年7月20日(日)13:00-16:00、

2025年11月15日(土)13:00-16:00|広島市中央公民館大集会室

2025年10月19日(日)13:00-16:00、

2025年12月14日(日)13:00-16:00|広島市三篠公民館大集会室

2025年11月16日(日)10:00-14:00、

2025年12月19日(金)18:00-21:00|広島市中央公民館ホール

2025年12月13日(土)13:00-16:00

2025年12月20日(土)13:00-16:00|

広島市安佐南区民文化センター大広間

ファンリテーター:坂田 光平、江島 慶俊

内容:演劇の手法を使った表現ゲームや、チームでの演劇作品創作を体験できる場のサポートを行なった。 主催:一般社団法人舞台芸術制作室無色透明 協力:認定NPO法人ひゅーるぼん、アートサポートセンターひゅるる

おきらく劇場ピロシマ演劇クラブ発表会

2025年12月21日(日)10:00-16:00|

広島市まちづくり市民交流プラザ マルチメディアスタジオ

内容:演劇クラブで集まった仲間たちによる発表会のサポートを行なった。 主催:一般社団法人舞台芸術制作室無色透明 協力:認定NPO法人ひゅーるぼん、アートサポートセンターひゅるる

New World -アートと障害の接面から世界を見る-

2025年6月24日(火)-29日(日)|渋谷ヒカリエ8/CUBE

内容:日韓の障がいのあるアーティストの展覧会に実施協力した。

主催:東京学芸大学(笠原広一研究室)、広島大学(池田史志研究室) 共催:HEAD Lab 協力:社会福祉法人三矢会太田川学園、認定NPO法人ひゅーるぼん、広島県アートサポートセンター、iboda、Springshine、一般社団法人アートネットワークス

あいサポートアート展

2025年10月28日(火)-11月2日(日)、

2025年12月23日(火)-12月27日(土)|

広島県立美術館、ふくやま美術館

内容:広島県内に在住する障がいのある方の作品を展示する展覧会のサポートを行なった。 主催:広島県主催/広島県※福山会場は福山市

広島市ピースアートプログラムアート・ルネッサンス HPAR2025

2026年1月31日(土)-2月8日(日)|

合人社ウエンディひと・まちプラザ北棟4階ギャラリー

内容:障がいのある方々の公募作品展の運営と関連イベントのサポートをした。 主催:広島市/認定NPO法人ひゅーるぼん/アートサポーター 共催:(公財)広島市文化財団まちづくり市民交流プラザ 協力:アートギャラリーミヤウチ

遠隔ロボットを使った鑑賞サポート

2026年1月31日(土)-2月8日(日)|

合人社ウエンディひと・まちプラザ ギャラリー

内容:アート・ルネッサンス会場にて、遠隔ロボットを使って鑑賞とイベント参加のサポートを行なった。 主催:NPO法人ひゅーるぼん、広島県アートサポートセンター 協力:広島大学

NEW WORLD-アート×福祉×街の交歓-

2026年2月16日(月)-3月16日(月)|広島市西区横川商店街

内容:日韓の障がいのあるアーティストの展覧会の実施協力をした。

主催:広島大学池田史志研究室 共催:社会福祉法人山矢会 太田川学園 協力:認定NPO法人ひゅーるぼん、HEAD Lab、広島県アートサポートセンター、横川商店街振興組合、横川商店街連合会、横川エリアマネジメント連絡協議会、横川まちの芸術祭、NEW法人広島横川スポーツ・カルチャークラブ、東京学芸大学笠原広一研究室、一般社団法人アートネットワークス

「NEW WORLD アート×福祉×街の交歓」

スポットイベント「オープンアトリエ」

2026年2月21日(土) 2026年3月6日(金)|ボレボレファクトリー

内容:出展アーティストと創作する時間を共有できる場づくりのサポートを行なった。 主催:広島大学池田史志研究室 共催:社会福祉法人山矢会 太田川学園・ボレボレファクトリー 協力:認定NPO法人ひゅーるぼん、HEAD Lab、広島県アートサポートセンター、横川商店街振興組合、横川商店街連合会、横川エリアマネジメント連絡協議会、横川まちの芸術祭、NEW法人広島横川スポーツ・カルチャークラブ、東京学芸大学笠原広一研究室、一般社団法人アートネットワークス

「NEW WORLD アート×福祉×街の交歓」

スポットイベント「みんなで楽しむためにトーク」

2026年2月28日(土)15:00-17:00|YOKOGAWA BASE

内容:展覧会の趣旨、開催までの経緯、作品への想い、横川の街とアートなどそれぞれの立場から発表し、参加者と意見交換を行った。 主催:広島大学池田史志研究室 共催:社会福祉法人山矢会 太田川学園 協力:認定NPO法人ひゅーるぼん、HEAD Lab、広島県アートサポートセンター、横川商店街振興組合、横川商店街連合会、横川エリアマネジメント連絡協議会、横川まちの芸術祭、NEW法人広島横川スポーツ・カルチャークラブ、東京学芸大学笠原広一研究室、一般社団法人アートネットワークス

「NEW WORLD アート×福祉×街の交歓」

スポットイベント「ダンス&花パレード:さをり織りをまっ

とって」

2026年3月15日(日)15:00-17:00|フレスタステージ

内容:展覧会の会期中に織りあげた「さをり織り」をまとってのダンスパレードのサポートを行なった。 主催:広島大学池田史志研究室 共催:社会福祉法人山矢会 太田川学園・ボレボレファクトリー 協力:認定NPO法人ひゅーるぼん、HEAD Lab、広島県アートサポートセンター、横川商店街振興組合、横川商店街連合会、横川エリアマネジメント連絡協議会、横川まちの芸術祭、NEW法人広島横川スポーツ・カルチャークラブ、東京学芸大学笠原広一研究室、一般社団法人アートネットワークス

YouTubeチャンネル「ひゅるりんば」の配信

2025年7月19日、9月8日、9月20日、11月18日、2月3日(2本)配信

広島県アートサポートセンター YouTubeチャンネル

内容:広島県内のアート情報の発信と様々な表現(アート)を楽しむ広めることを目的にしたYouTube番組を制作、配信した。

YouTubeチャンネル

「アーティストに会いにいってみた」撮影・配信

2025年4月4日(金)、5月17日(土)、8月2日(土)、11月8日(土)配信、

2026年3月10日(火)、3月11日(水)、3月15日(日)撮影|

広島県アートサポートセンター YouTubeチャンネル

内容:障がいのある方の表現活動の魅力や楽しさを知っていただくきっかけになることを目的にした動画を制作、配信した。

相談対応

通年|広島県内

電話、メール、FAX、SNS等のメッセージ、来館等さまざまな方法で相談を受け付け、相談対応を実施した。

情報発信

通年|ホームページ・SNSによる情報発信

県内外の障がいのある方の文化芸術活動に関する情報を発信した。



日韓交流展NEW WORLD -アート×福祉×街の交歓-花パレード



アーティストに会いにいってみた:斉藤亮さん



YouTube番組ひゅるりんば

山口県障害者芸術文化活動支援センター

アートが旅する巡回展

- ① 2025年5月5日(月) | 宇部市役所前常盤通り in YAMAGUCHI《ダイバーシティ駅伝》
- ② 2025.5.23(金) - 2025.6.1(日) | 旧山口市役所《さようなら旧市庁舎プロジェクト ハシヲワタス》
- ③ 2025年6月29日(日) | イオンタウン周南《周南ふれあいフェスティバル》
- ④ 2025年7月13日(日) - 2025年7月20日(日) | J:COMアリーナ下関《J-STAR プロジェクト(パラリンピック競技)》
- ⑤ 2025年9月13日(土) - 2025年9月21日(日) | クリエイティブ・スペース赤れんがホールI 《まにまにのかたちアール・ブリュット展(山口会場)》
- ⑥ 2025年9月26日(金) - 2025年9月30日(火) | 岩国市民文化会館《まにまにのかたちアール・ブリュット展(岩国会場)》
- ⑦ 2025年10月24日(金) 2025年10月26日(日) | 菓子乃季本社・総本店《第27回柳井お菓子まつり》
- ⑧ 2025年10月29日(水) | サンビームやない《第75回山口県総合社会福祉大会》
- ⑨ 2025年11月25日(火) - 2025年12月4日(木) | 山口県政資料館《第31回山口県障害者芸術文化祭応募作品展》
- ⑩ 2025年12月18日(木) - 2025年12月21日(日) | 植木紙店ギャラリー《まにまにのかたちアール・ブリュット展(下関会場)》

山口県障害者芸術文化祭の出展作品の中から最優秀賞(山口県知事賞)を受賞した各部門6点を受賞後1年間、県内各地に展示し、多くの方に障害者アートの魅力を届けることを目的に開催。

書道・写真講座

2025年6月21日(土) - 2026年1月31日(土) | 県身体障害者福祉センター
書道8回/年、写真3回/年 基本から応用まで個々のレベルや目標に合わせて、個々のペースで取り組みながら、障害者の自立と積極的な社会参加の促進と受講生相互の交流を図ることを目的に開催。【講師】書道：長谷川直子氏 写真：原伸二郎氏

第1回障害者アートセミナー

2025年6月28日(土) | 山口県立大学(ハイブリッド)

障害者の芸術文化活動を支援する人材の育成を目的とし、「すべては幸せを感じるために～自分らしく過ごす日常の中で生まれた僕の色、私のカタチ～」と題して、対面とオンラインでの同時開催(ハイブリット開催)。
講師：山下完和氏 《やまなみ工房 施設長》

まにまにのかたちアール・ブリュット展

- ① 2025.9.13(土) - 2025.9.21(日) | クリエイティブ・スペース 赤れんがホールI
- ② 2025.9.26(金) - 2025.9.30(火) | 岩国市民文化会館
- ③ 2025.12.18(木) - 2025.12.21(日) | 植木紙店1Fギャラリー

山口県から発掘(2018-2022)された3名のつくり手の作品を県内3カ所で展示。共催：山口市、クリエイティブ・スペース赤れんが(指定管理者 認定NPO法人こどもステーション山口) 後援：岩国市、公益財団法人岩国市文化芸術振興財団 監修：中野良寿氏 《美術家、信州大学教授、山口大学名誉教授》 倉田研治氏 《山口県立大学 文化創造学科 准教授》

第2回障害者アートセミナー

2025年10月18日(土) | オンライン

障害者の芸術文化活動を支援する人材の育成を目的とし、「身近な事例から考える障害のある人のアートと著作権」と題して、オンラインにて開催。
講師：後安美紀氏 《一般財団法人たんぼの家》

小中学生対象

撮影・動画編集ワークショップ

2025年11月1日(土) | YMfg 維新セミナーパーク

アート活動に取り組むきっかけづくりの場として、障害のある小中学生を対象にタブレットを貸出し(持参OK)、撮影方法、三脚の使い方、編集アプリを使用した動画編集の体験会を開催。講師：会田大也氏 《山口情報芸術センター学芸普及課長》

第31回山口県障害者芸術文化祭

- ① 応募作品展 2025年11月25日(火) - 2025年12月4日(木) | 山口県政資料館
- ② 式典およびステージ部門 2025.12.6(土) | カリエンテ山口

応募作品(作品数318点)の中から受賞作品32点が選ばれ、全作品を展示する応募作品展、受賞式典、ステージ部門を開催。

デジタルものづくり体験ワークショップ

2026年2月20日(金) - 2026年2月21日(土) | 山口情報芸術センター[YCAM]レストラン・スペース

デジタル工作機器の特徴や使い方を知り、障害福祉施設におけるデジタルものづくりの利用のイメージや可能性について考えるきっかけとなることを目的に開催。共催：福祉×Fab研究プロジェクト(研究代表者：山口大学国際総合科学部 富本浩一郎氏)

UDダンスワークショップ

2026年3月7日(土) J:COMアリーナ下関

UD(手話)ダンスを通じて身体表現に取り組むきっかけづくりや、ダンスを通じた障害のある人となない人の交流を目的に開催。
【講師】北村仁氏 《株式会社ユーディフル》



書道講座



アートセミナー



動画編集ワークショップ



芸術文化祭



UDダンス

徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター

Spring 展

2025年4月1日(火)～4月20日(日) |
徳島県立障がい者交流プラザ ブラザギャラリー

県内障がい者の制作したアート作品の販売。主催：徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター

露口誠二 作品展

2025年5月2日(金)～5月25日(日) |
徳島県立障がい者交流プラザ ブラザギャラリー

露口誠二氏が制作した10点の平面・立体作品の展示と作者紹介ビデオの上映。主催：徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター

第5回全国公募 Tシャツデザイン展

2025年7月11日(金)～9月17日(水) |
徳島県立障がい者交流プラザギャラリー 1階・2階プラザギャラリー

794点の応募作品の展示及び優秀賞受賞者とクリエイターが協働しTシャツを商品化し販売する。また、入賞作品を県内の商業施設、屋外3ヶ所での展示。主催：徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター 協力：松茂町商工会

作品販売

通年 | 徳島県立障がい者交流プラザ ブラザショップ

ブラザショップにおいて、1作家1ヶ月間アート作品を展示し販売の機会とする。主催：徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター

アトリエコーナスの軌跡「アートで開く心の扉」

2025年7月26日(土) | ふらっと KOKUFU

白岩高子氏による講演会 講師：特定非営利活動法人コーナス代表理事 白岩高子氏 主催：徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター

「ふらっとアート工房 AIR」

2025年9月29日(月)～10月1日(水) |
ふらっと KOKUFU ふらっとアート工房

中四国より4名のアーティストを招聘し、作品制作を行った。 主催：ワークアンドデイ ラクリエ、パスレル 協力：徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター

「作品を魅力的に見せるコツ」作品展示を考える

2025年10月7日(火) | 徳島県立障がい者交流プラザ

美術作品を展示する際の基本的な考え方やテクニックを学び、展示を通して、作品と鑑賞者のより良い関係性を築くための基礎を理解します。講師：安達一樹 氏(徳島県立近代美術館 学芸員) 主催：徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター

「しなやかに、自由に、」誰もが楽しめる身体表現

2025年10月15日(水) | 徳島県立二十一世紀館 イベントホール

五感で感じるウォームアップからコミュニケーションを育む身体遊びそして自由に表現するセッション。最後はリラクスタイムで、楽しい時間を過ごします。講師：田村典子 氏(ダンスアーティスト、四国大学名誉教授) 主催：徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター

「知財について知ろう契約大事よね！」法律相談

2025年11月11日(火)、11月28日(金) | 徳島県立障がい者交流プラザ

障がい者支援施設と利用者さんとのアート作品管理契約など、著作権などの権利保護に詳しい弁護士との相談会。講師：戸田順也氏(戸田コンサルティング法律事務所弁護士・税理士・中小企業診断士) 主催：徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター

「構図、光、色、被写体の選び方」写真による表現

2025年11月18日(火) | 徳島県立障がい者交流プラザ

撮影・鑑賞方法から少しの工夫でレベルアップするテクニックまで学びます。講師：上野照文 氏(写真家・徳島県美術家協会理事) 主催：徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター

「コースターを作ってみよう！」
牛革を使用した工芸品の制作

2025年12月2日(火) | 徳島県立障がい者交流プラザ

耐久性に優れ使うほどに味が出てくる素材。牛革を使って楽しく工芸品を制作する。講師：中南弘史氏(造形作家、徳島彫刻集団会員) 主催：徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター

「あなたのアートで彩る2026年」
—2026年カレンダー用イラスト募集—

2025年7月1日(火)～ | 徳島県立障がい者交流プラザ

2026年用カレンダーに掲載するイラストを募集。256点の応募作品を審査、掲載作品12点と佳作17点を表彰。カレンダーは、県内企業・団体等に配布。主催：徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター

みんなの創造フェスター2026とくしま障がい者芸術・文化祭—「障がい者アーティストの卵」発掘展

2026年2月11日(水・祝)～2月15日(日) | あわぎんホール

徳島県内の障がい者の制作したアート作品95点の展示すると共に、審査委員による選考を行い優秀な作品13点を表彰。また、全作品を掲載した作品集を制作・配布。巡回展も開催。 主催：徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター、徳島県文化振興財団

「障がい者アーティストの卵」発掘展受賞作品巡回展

2026年2月20日(金)～3月8日(日) | 徳島県立障がい者交流プラザ

「障がい者アーティストの卵」発掘展受賞作品13点の巡回展示。 主催：徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター

みんなの創造フェスター2026とくしま障がい者芸術・文化祭—「みんなのマスキングテープアート」

2026年2月10日(木)～2月15日(日) | あわぎんホール

マスキングテープアートの展示とワークショップ 主催：徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター、徳島県文化振興財団 協力：徳島大学ホスピタルアートクラブ、Tokudai Hospital Art Labo、認定 NPO 法人コミューナル

みんなの創造フェスター2026とくしま障がい者芸術・文化祭—「みんなのはっぴょうかい」

2026年2月13日(金)～2月15日(日) | あわぎんホール

19組のダンス・楽器演奏・朗読などの舞台発表と、ゲストの森田かず氏のトークとダンス。 主催：徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター、徳島県文化振興財団

みんなの創造フェスター2026とくしま障がい者芸術・文化祭—「みんなのはっぴょうかい」
オープニングコンサート

2026年2月11日(金) | あわぎんホール

徳島聴覚支援学校児童生徒による「ホワイトハンドコーラス」 指導：コロナエリカ(ホワイトハンドコーラス NIPPON) 指揮：山田啓明(鳴門教育大学教授) 演奏・合唱：徳島交響楽団、コーラス9 主催：徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター、徳島県文化振興財団

みんなの創造フェスター2026とくしま障がい者芸術・文化祭—「みんなで楽しくでっかく書こう！」

2026年2月13日(金)～2月15日(日) | あわぎんホール

安田有吾氏の指導で、大きな紙に大きな筆で、一人一文字書くワークショップ。主催：徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター、徳島県文化振興財団

みんなの創造フェスター2026とくしま障がい者芸術・文化祭—awanowa エシカルマルシェ

2026年2月14日(土)～2月15日(日) | あわぎんホール

障がい者支援施設で作られた、食品、雑貨などの販売 主催：徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター、徳島県文化振興財団 協力：とくしま障がい者就労支援協議会

企画委員会の開催

2026年3月11日(水) | 徳島県立障がい者交流プラザ

支援センターの事業について企画委員に報告および意見交換 主催：徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター

訪問調査

通年 | 県内各地

施設・特別支援学校・個人を訪問し、芸術活動の現状等について調査。主催：徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター

ホームページ・SNSによる情報発信

通年 | 徳島県障がい者芸術・文化活動支援センターホームページ・Instagram等

主催の行事や作品・出演者募集ついて、また県内外のイベント情報の発信。運営：徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター

相談記録簿の作成

通年

創作活動についてや、発表などに関する相談を随時受付と情報提供。運営：徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター

プラザギャラリー貸出業務

通年

プラザギャラリーの貸出調整および、展示アドバイス。 管理：徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター



みんなの創造フェスター2026とくしま障がい者芸術・文化祭—「みんなのはっぴょうかい」



ふらっとアート工房AIR



工芸品の制作WS

香川みんなのアート活動センターKAGAWA MOVES

香川県障害者芸術祭2025 ～キラリ☆と光る芸術祭～

2025年10月13日(月・祝)～14日(火) | サンポート高松

作品等を発表する場を確保することや作品等を通じて障害者理解が進むこと、また、障害者が文化芸術に取り組む契機となることなどを目的に開催。瀬戸内国際芸術祭と連携して、3年に1度開催している。

- ・作品展(平面作品・書・立体作品・手芸)
 - ・特別支援学校と英明高等学校による大型共同作品の展示
 - ・ステージイベント
(バンド演奏、ダンス、さをり織りファッションショー)
 - ・アートワークショップ「キラリ☆バッグを作ろう!」
 - ・さをり織りワークショップ・さをり織り反物展示
 - ・障害者施設等で制作したパンや小物等の販売
- ※支援センターは、実行委員会事務局として参加

アートボランティア養成講座

2025年8月3日(日) | かがわ総合リハビリテーション福祉センター

障害者の文化芸術活動に関する講座の実施

リズムワークショップ

2025年5月2日(金) | ZENキューブ

元ザ・ブルーハーツのドラマー梶原徹也氏を講師に迎え、ガムテープ太鼓を使用したリズムワークショップを実施

ZENキューブでつなごう展

2025年10月24日(金)～11月3日(月) | ZENキューブ

展覧会開催場所の善通寺市で芸術活動に熱心に取り組む障害福祉サービス事業所善通寺希望の家の利用者が制作した作品と、香川県障害者芸術祭2025作品展で展示した作品の一部を展示。(平面作品・立体作品の展示)

メイクエキシビション ～みんなで作る展覧会～

2025年11月27日(木)～12月10日(水) | 瓦町 FLAG

高松琴平電気鉄道(株)と連携し、関連する2事業所1団体の作品と、香川県障害者芸術祭2025作品展で展示した作品の一部を展示。(平面作品・立体作品の展示)

マリンウェーブでつなごう展

2026年2月9日(月)～2月19日(木) | 三豊市文化会館マリンウェーブ

香川県障害者芸術祭2025作品展で展示した作品の一部を展示。
(平面作品・立体作品の展示)

音楽鑑賞会(ピアノ・ヴォーカル・バイオリン)

2026年2月2日(月) | 三豊市市民交流センター

ピアニスト梅田玲奈氏とヴォーカリストの河西那都氏、バイオリニスト青柳妃姫氏を迎え、ピアノ、ヴォーカルとバイオリンによる演奏会を開催。

ブルース・ヒューバナー尺八コンサート

2026年3月26日(木) | スマイルハートあすみ

ブルース・ヒューバナー氏による日本の伝統楽器の尺八と、ギタリスト諏訪光風氏によるセッションを楽しむ鑑賞会を開催。

活動視察

- ① 2025年11月13日(木) | 支援センターまるやま 生活介護事業所
 - ② 2025年11月30日(日) | 児童発達支援・放課後等デイサービスいろは
- 県内事業所が実施する創作活動の様子を視察

香川みんなのアートギャラリー

通年 | KAGAWA MOVES ホームページ内特設ページ

KAGAWA MOVES ホームページ内に、常設展示型のギャラリーを公開中

イラスト入りエコバッグの制作・販売

通年 | 香川県社会就労センター協議会

香川県障害者芸術祭2022に出展された作品の中から3作品を選びエコバッグを制作・販売(※センターは企画・販売に協力)企画・販売: 香川県社会就労センター協議会(前年度から継続して販売)

運営委員会の開催

- ① 2025年4月23日(水) | かがわ総合リハビリテーション福祉センター
- ② 2026年3月18日(水) | かがわ総合リハビリテーション福祉センター

支援センターの活動状況の報告等

相談事業

通年

文化芸術活動に関する相談を随時受付

情報発信

通年

県内外のイベント情報等をホームページを通じて発信



香川県障害者芸術祭2025 (ステージイベント)



ZENキューブでつなごう展



マリンウェーブでつなごう展



リズムワークショップ



音楽鑑賞会(ピアノ・ヴォーカル・バイオリン)

障がい者芸術文化祭

～バラアートえひめ2025 アート展～

<展示会>

2025年12月4日(木)～12月14日(日)|
愛媛県美術館(巡回展については県内6会場で実施)

【入賞作品巡回展】

・テクスポート今治(今治市):2025年12月24日(水)～2026年1月12日(月)
・IYO夢みらい館(伊予市):2026年1月16日(金)～1月25日(日)
・あかねミュージアム(新居浜市):2026年1月29日(木)～2月5日(木)
・西予市役所(西予市):2026年2月2日(月)～2月16日(月)
・宇和島市役所(宇和島市):2026年2月18日(水)～2月25日(水)
・愛媛県身体障がい者福祉センター(松山市):
2026年2月27日(金)～3月10日(火)

主催:愛媛県

運営:愛媛県障がい者アートサポートセンター

<展示会>

【募集内容】

平面作品:(絵画(油彩、水彩、アクリル、貼り絵、版画、デザインなど)、
書(毛筆))、

立体作品:陶芸、その他(彫刻、工芸、手芸)など

<ワークショップ>

①2025年4月12日(土)

「大石涼さんとストラップを作ろう」講師:大石涼

②2025年7月5日(土)

「対話を通してアートを味わおう!対話型鑑賞会」

③2025年11月15日(土)

「思いっ切り色を塗って!段ボールで大きな木を作ってみよう!」

講師:富久千愛里

④2026年2月7日(土)|愛媛県身体障がい者福祉センター

「ART CLASSES 富久さんのワークショップ

～日頃の日中活動をアートを介して豊かにしよう!～」講師:富久千愛里

障がい者芸術文化祭

～バラアートえひめ2025 舞台芸術～

オーディション:2025年7月12日(土)

ワークショップ:2025年7月26日(土)～2026年1月10日(土)の間に30
回程度|愛媛県身体障がい者福祉センター他

公開ワークショップ:

①2025年10月4日(土)|中予会場(愛媛県障がい者福祉センター)

②2025年10月11日(土)|東予会場(今治市中央公民館)

③2025年10月13日(月/祝)|南予会場(パフィオうわじま)

成果発表会リハーサル:2026年1月17日(土) 成果発表会「音楽劇プレー
メンの音楽隊」:2026年1月18日(日)午前・午後2回公演 主催:愛媛
県 運営:愛媛県障がい者アートサポートセンター委託事業者:有限会社中
村ファミリーセンター 対象:障がいの有無にかかわらず、県内在住の舞台
芸術に関心のある方が参加。初めて参加する方を「出演者」として、これま
で出演経験のある方を「ピアサポーター」として募集。令和7年度障がい者芸術文化活動における
ネットワーク会議第1回:2025年6月10日(火) 第2回:2026年2月13日(金)|愛媛県
身体障がい者福祉センター

主催:愛媛県 運営:愛媛県障がい者アートサポートセンター

参加者:愛媛県内の市町担当者、事業所等、当事者団体、専門家等

令和7年度芸術文化活動を支援する人材の育成研修会
及び個別の法律相談研修会:2025年9月2日(火) 個別の法律相談:9月2日(水)、9月2日(水)、
11月10日(月)|愛媛県身体障がい者福祉センター

「アートにまつわる権利のきほん Part 4」

研修会講師:三浦 友美氏

令和7年度障がい者芸術文化活動
外部指導者派遣事業

2025年8月～2026年2月|各事業所

舞台分野:1事業所

講師:浜辺仁美氏 内容:歌唱指導

美術分野:3事業所

講師:西田真帆氏 内容:工芸(染物)

講師:富久千愛里氏 内容:絵画制作

講師:富久千愛里氏 内容:作品制作



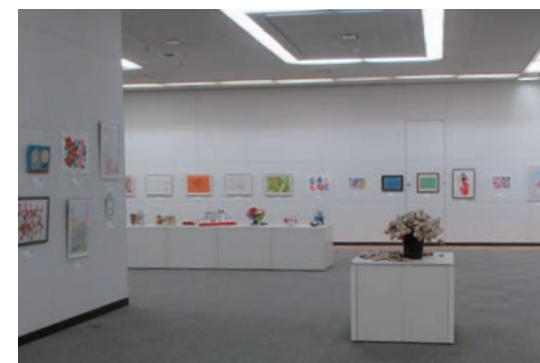
障がい者芸術文化祭～バラアートえひめ2025舞台芸術～



富久さんのワークショップ



障がい者芸術文化祭～バラアートえひめ2025舞台芸術～



障がい者芸術文化祭～バラアートえひめ2025アート展～



芸術文化活動を支援する人材の育成研修会及び個別の法律相談

「風のカレンダー2026」制作への協力

協力期間：2025年4月～2026年1月
カレンダーづくり：2025年6月26日(木)
委託販売：薬工ミュージアム
カレンダーづくり：わらこう Sou Sou 室(薬工ミュージアム内)

県内12箇所の文化施設と12箇所の障害者福祉施設がコラボレーションしてカレンダーを制作する企画への協力。参加施設の提案やカレンダーづくりへの参加他、カレンダーの委託販売を行った。

主催：合同会社風

「EXPO2025 DANCE DRAMA Breakthrough Journey」への参加

2025年10月7日(火)～10月8日(水) | EXPOホール(シャインハット)

2020年10月～2021年1月にかけてクリエイションを行い、2021年1月末に大阪にて上演、2022年10月に東京にて再演した、国籍、文化、障がいの有無を問わない多様なダンサーが共創したダンス公演の再々演への参加。
主催：国際障害者交流センター ビッグ・アイ/独立行政法人日本芸術文化振興会/文化庁 連携：大阪府 協力：ダンススタジオ ONEMOVE/SOCIAL WORKEERZ/公益財団法人まね文化振興財団/M☆Stars/NPO 蛸蔵・薬工ミュージアム/DANCE CREAM/Normalization Dance crew LIBERTY/Dua Space Dance Theatre (Malaysia)/ART:DIS (Singapore) Ltd./香港展能藝術會 (Hong Kong)/林靖嵐 聽障舞蹈團 (Taiwan)/CINEMA Chupki TABATA

「共生社会の実現に向けた舞台芸術創造事業 多田淳之介演出『真夏の夜の夢』」への協力

2025年7月～10月 | 高知市文化プラザかるぼーと

多田淳之介氏を演出に招き、公募出演者と共に古典戯曲をノンバーバルで表現する演劇作品を創作し、上演する事業に協力し、障害のある方が参加するための環境整備やサポートを行った。 主催：公益財団法人高知市文化振興事業団 助成：一般財団法人地域創造 協力：高知市文化プラザ共同企業体/薬工ミュージアム・NPO 蛸蔵

『真夏の夜の夢』 衣装づくりワークショップの実施協力

2025年8月22日(金) | 放課後等デイサービスばすてる

舞台で使用する衣装の素材をつくるワークショップ。 主催：公益財団法人高知市文化振興事業団 助成：一般財団法人地域創造 協力：薬工ミュージアム・NPO 蛸蔵

ノンバーバル演劇公演『真夏の夜の夢』 鑑賞支援サービス

2025年10月26日(日) | 高知市文化プラザかるぼーと 四国銀行ホール

上演時の鑑賞支援サービスを、「鑑賞サポート研究会」の実地研修の場も兼ねて行った。 主催：公益財団法人高知市文化振興事業団 助成：一般財団法人地域創造 協力：高知市文化プラザ共同企業体/薬工ミュージアム・NPO 蛸蔵

劇団 GALA 第8回公演 ミュージカル「鬼退治!2025」への協力

2025年11月8日(土) | 高知県立美術館ホール

市民文化団体によるミュージカル公演での鑑賞支援サービス(日本語字幕)実施に協力し、字幕に関するアドバイスをを行うとともに、公演当日の運営をサポートした。 主催：劇団 GALA 鑑賞支援協力：薬工ミュージアム・NPO 蛸蔵

ワークショップ「声をつかわないゲームで遊ぼう!!」

2025年12月21日(日) | 長浜ふれあいセンター3階

図書館プログラムとして実施するワークショップのサポート。誰でも参加できるよう環境整備を図った。 主催：高知市立長浜市民図書館 協力：薬工ミュージアム・NPO 蛸蔵

よさこい高知文化祭2026プレイベント

「障害者アート展示」への協力

2026年1月18日(日) | イオンモール高知(南コート)

2026年10月から開催される「よさこい高知文化祭2026」のプレイベントにて「障害者アート展示」の企画コーディネートを行う。昨年の高知県障害者美術展(スピリットアート)の入賞作品の中から特に目を引く作品を中心に紹介した。 主催：よさこい高知文化祭2026高知県実行委員会

高知地域連携インクルーシブアートプロジェクト デフ・パペットシアター・ひとみ『人形劇 河の童』への協力

2026年2月7日(土) | 高知県立県民文化ホール グリーンホール

鑑賞時のルールやマナーなどを体験しながら学び、舞台芸術に触れてもらう公演の開催に協力し、事前研修会にて講師を務めるとともに、当日運営にも協力した。 主催：高知県立県民文化ホール(高知県立県民文化ホール共同企業体)/高知地域連携インクルーシブアートプロジェクト実行委員会 協力：高知県文化施設協議会

「4JC Meet-up3」への協力

2026年2月15日(日) | 山一木材 KUMALABO

「ジャグリングと発達・支援を考える」というテーマのディスカッションにパネラーとして登壇し、事例などを紹介。四国におけるソーシャル・サーカスの可能性などについて意見交換した。 主催：4JC(四国ジャグリングコミュニティ) 協力：瀬戸内サーカスファクトリー

「海のギャラリーの建築鑑賞プログラムをつくろう!」ワークショップへの協力

2026年3月29日(日) | 土佐清水市立竜串貝類展示館 海のギャラリー

視覚に障がいのある方もない方も楽しむことができる建築鑑賞プログラムを参加者みんなで考えるため、ワークショップサポーターとしてアシスタントを行った。 主催：一般社団法人海ギャラ CHILL OUT

障害者アートを価値化する 知財セミナー in こうち 2025

2025年8月23日(土)～10月18日(土) | アートセンター画案

「アートセンター画案」を運営する有限会社ファクトリーが担当した事業。障がいのある方の創り出した作品を使用し商品化する際に必要な権利保護に関する様々な知識を、ワークショップなどの体験も交えながら学び、障がいのある方の作品を活用できる人材を育成。オンラインも活用したほか、講師と受講者が交流する機会を作り、ネットワーク構築を図った。 主催：高知県障害者美術展実行委員会/高知県

鑑賞支援サービス(音声ガイド・字幕)人材育成事業 「鑑賞サポート研究会」

2025年5月24日(土)～2026年3月 | 蛸蔵、オンライン 他

音声ガイドと字幕による鑑賞支援サービスを提供できる人材の育成を図る事業。座学による講座受講だけでなく、字幕や音声ガイド付き公演鑑賞といった体験講座も交え、公演での実務といった実践によって人材を育成した。 主催：薬工ミュージアム・NPO 蛸蔵 協力：一般社団法人日本障害者舞台芸術協働機構/公益財団法人高知市文化振興事業団

展覧会「ちいさな蔵の展覧会 2025」

2025年3月31日(日)～2025年6月29日(日) |

薬工ミュージアム エントランス

1期：2025年3月31日(日)～2025年4月20日(日)

2期：2025年4月27日(日)～5月18日(日)

3期：2025年6月8日(日)～6月29日(日)

高知県在住の方を中心とした障がいのあるアーティストや作り手による作品を紹介する展覧会シリーズの第6回目。30年以上にわたり描き続けた茨木隆敏のドローイングを3期に分けて紹介した。 主催：薬工ミュージアム・NPO 蛸蔵 協力：海辺の杜ホスピタル/山中雅史



ちいさな蔵の展覧会2025



鑑賞サポート研究会



EXPO2025 DANCE DRAMA Breakthrough Journey

撮影:富田了平



「風のカレンダー2026」づくり



よさこい高知文化祭2026プレイベント「障害者アート展示」

創作ワークショップ わらこう Sou Sou 室 Presents

「描きかきちょキチョキペッタベタ」

2025年4月20日(日)／5月10日(土)／6月15日(日)／7月26日(土)／7月27日(日)／8月18日(月)／8月23日(土)／8月24日(日)／8月25日(月)／9月7日(日)／10月11日(土)／11月2日(日)／12月6日(土)／2026年1月25日(日)／2月21日(土)／3月15日(日) | わらこう Sou Sou 室(薬工ミュージアム内)

登録制の「わらこう Sou Sou 室」を気軽に体験してもらうためのプログラム。室内にあるいろいろな材料を好きなように使って創作を楽しんでもらった。主催：薬工ミュージアム・NPO 蛸蔵

創作ワークショップ わらこう Sou Sou 室 Presents

「みえ先生、まるちゃんとつくってみよう！」

みえ先生の日：2026年2月8日(日)

まるちゃんの日：2026年2月14日(土) | 薬工ミュージアム エントランス

2人の講師が用意したテーマで創作を楽しむワークショップ。みえ先生の日は「だいじをかざろう! (好きなものをいっしょに織ろう)」を、まるちゃんの日はい「いろんなものをぬってみよう!」をテーマに、織ることや縫うことに親しみながら創作を楽しんだ。 主催：薬工ミュージアム・NPO 蛸蔵

展覧会「底無し沼の創作力!!! 小原征一のてしごと展」

2025年7月26日(土)~11月3日(月・祝) | 薬工ミュージアム

絵画や立体、陶芸など、逝去直前まで精力的に創作を続けた小原征一の作品を紹介する展覧会。小原征一の創作活動を近で見守り続けてきた関係者のお話を伺うトークイベントも会期中に実施した。

展覧会「底無し沼の創作力!!! 小原征一のてしごと展」

関連イベント “美術館×遊び場” 演劇をつくってみよう！

創作期間：2025年8月15日(金)~17(日)／8月28日(木)~30(土)

発表公演：2025年8月30日(土) | 薬工ミュージアム

「底無し沼の創作力!!! 小原征一のてしごと展」の展覧会場を舞台に、観る人も一緒に楽しめる演劇をつくり発表するワークショップ。アシスタントとして舞台劇関係者の人材育成も図った。 主催：薬工ミュージアム・NPO 蛸蔵 協力：社会医療法人仁生会 細木病院 こころのセンター、北村剛

演劇公演「12人の怒れる土佐人たち」

鑑賞支援サービス

① 2025年8月10日(日) | 室戸市保健福祉センターやすらぎ夢ひろば

② 2025年8月28日(木) | 高知県立県民文化ホール オレンジホール

2024年度に大好評を博した市民による演劇公演の再演において、字幕や音声ガイド、舞台説明の鑑賞支援サービスを提供。「鑑賞サポート研究会」の実地研修の場も兼ねた。主催：①室戸市教育委員会、室戸市文化協会／②高知県立県民文化ホール(高知県立県民文化ホール共同企業体) 後援：①安芸郡市文化協会 協力：高知市文化プラザ共同企業体／シアターランボン／薬工ミュージアム・NPO 蛸蔵

「第5回薬工アンパン アートバザール」

2025年11月14日(金)~12月7日(日) | 薬工ミュージアム

設営期間：2025年11月14日(金)~11月20日(木)

鑑賞期間：2025年11月14日(金)~12月7日(日)

販売期間：2025年11月22日(土)~12月7日(日)

作品引取期間：2025年12月9日(水)~12月14日(日)

「アートだ!」と思う作品なら、誰でも販売することができる展覧会。作品購入以外の形でアーティストを支援する「アーティスト応援 BOX」を作品展示場所近くに設置。BOXにはコメントも投稿できるようにした。主催：薬工ミュージアム・NPO 蛸蔵 共催：アートセンター画楽

「第5回薬工アンパン アートバザール」

会場下見・相談会

2025年10月20日(金)／27日(月)／

11月1日(土)~11月4日(月・祝) | 薬工ミュージアム

アートバザールの会場下見ができる、作品の展示方法や展示・販売に必要な準備物、作品の販売価格の設定等展示と販売に関する悩みや困りごとの相談会。主催：薬工ミュージアム・NPO 蛸蔵 共催：アートセンター画楽

「第5回薬工アンパン アートバザール」交流会

2025年11月23日(日) | 蛸蔵

アートバザール出展者、来場者(来場予定含む)、関係者による交流会。主催：薬工ミュージアム・NPO 蛸蔵 共催：アートセンター画楽

「第5回薬工アンパン アートバザール」

投げ銭パフォーマンスステージ

2025年11月23日(日) | 蛸蔵

「アートだ!」と思うパフォーマンスであれば、ジャンルを問わず誰でも参加できる事前申込制のステージイベント。 主催：薬工ミュージアム・NPO 蛸蔵 共催：アートセンター画楽

「第5回薬工アンパン アートバザール」

作品鑑賞ナイトツアー

2025年11月23日(日) | 薬工ミュージアム

アートバザール出展者、来場者(来場予定含む)、関係者らと交流しながら作品鑑賞をするナイトツアー。 主催：薬工ミュージアム・NPO 蛸蔵 共催：アートセンター画楽

「第5回薬工アンパン アートバザール」振り返り会

2025年12月8日(月) | 薬工ミュージアム

次年度の企画に活かすためのヒアリングを行い、アーティストやその支援者の交流を図るための振り返り会。

主催：薬工ミュージアム・NPO 蛸蔵 共催：アートセンター画楽

展覧会「Guest Curator Exhibition Series Vol.1

Artist：窪内陽之」

2026年3月1日(日)ー5月1日(日) | 薬工ミュージアム エントランス 外部キュレーターによる展覧会シリーズの第1回目。インクルーシブな絵画教室を主催する画家・西悟氏をキュレーターに迎え、今後の活躍が期待される18歳の窪内陽之を紹介。会期中に公開制作も行った。

主催：薬工ミュージアム・NPO 蛸蔵 キュレーション：西悟 協力：アートスタジオセイゴ

わらこう Sou Sou 室

通年(希望に合わせて適宜開催) |

わらこう Sou Sou 室(薬工ミュージアム内)

「想像」と「創造」を楽しむことを目的にした誰でも創作活動を行うことができる登録制アトリエ。さまざまな材料や道具を取り揃え、好きなように創作活動を行うことができる環境を整備し、常駐スタッフが、必要に応じて創作活動の相談に応じ、創作へのアドバイスや活動のサポートを行った。

【主催】薬工ミュージアム・NPO 蛸蔵

相談事業

通年 | 薬工ミュージアム他適宜

電話、メール、FAX、SNS等のメッセージ、来館等さまざまな方法で相談を受け付け、相談内容に応じた対応を適宜行った。

関係者のネットワークづくり

通年 | 適宜

県内の博物館施設等が参加する「こうちミュージアムネットワーク」や県内の劇場等が参加する「高知県文化施設協議会」、地域の協議会などに参加し、分野や領域を超えてさまざまな関係者とネットワークを築いた。

作家・作品調査

通年 | 個人宅、福祉施設、文化施設等

作家・作品の調査。主に、県内在住もしくは出身の方や県内を拠点に活動する施設等を訪問して行った。

情報収集

通年 | 個人宅、福祉施設、文化施設等

障がいのある方の文化芸術活動に関する情報収集。主に県内で情報収集を行った。



“美術館×遊び場”2025 演劇をつくってみよう!



みえ先生、まるちゃんとつくってみよう!



演劇公演「12人の怒れる土佐人たち」鑑賞支援サービス



第5回薬工アンパン アートバザール



Guest Curator Exhibition Series Vol.1 Artist:窪内陽之

4年目のファーストステップ

平谷尚大 芸術文化活動支援コーディネーター

四年前、パスレルの主催企画として始まった「アート活動をこれから始めようとする事業所への伴走」は、事業所のアート活動実践についての最初の一步に寄り添う取り組みです。何から始めていいかわからない、環境や人手が足りない、そんな声に応えながら、小さな試行錯誤を重ねてきました。その歩みは決して派手ではありませんが、現場の中で静かに根を張るように広がってきたように思います。

今年度、その伴走の中で一つの出来事がありました。生活介護事業所において、藍染体験を実施することができたのです。言葉にすればそれだけのこともかもしれませんが、ここに至るまでには時間がかかっています。というのも、過去に二度、同様の企画は検討されながらも、事業所内への藍染に関わる材料や道具の持ち込みが難しいという理由で、実施を断念してきた経緯があったからです。

「できない理由」は、現場にはいくつもあります。安全面への配慮、設備の制約、日々の業務との兼ね合い。どれも正当であり、簡単に乗り越えられるものではありません。だからこそ、その都度立ち止まり、別の方法を模索し、時には諦めるという選択もしてきました。

それでも今年、実施に至ったのはなぜでしょうか。特別な条件が整ったわけではありません。ただ、「やりたい」という思いを持った人がいて、それに応えようとする人がいて、少しずつ条件を整えていった結果なのだと思います。さらに、偶然の出会いによって藍染を実践するアーティストとつながることができたことも、大きなきっかけとなりました。アーティストと事業所とで丁寧に対話を重ね、無理のない形を探り続けた先に、ようやく実現の形が見えてきました。

思いがあれば、すぐに実現するわけではありません。時間も手間もかかります。それでも、思いを持ち続け、関わる人たちとともに工夫を重ねていけば、道はひらけていきます。今回の藍染体験は、そのことを静かに教えてくれました。実現しなかった過去もまた、今につながっています。そう考えれば、どんな試みも無駄ではないのだと思います。思いがあれば、実現しないことはありません。

藍染体験に加え、今年度も新たに6事業所がアート活動に取り組み第一歩を踏み出しました。多様なかたちで広がるファーストステップの実践をぜひご覧ください。

企画概要

支援センターを対象に実施したアンケートにおいて、「中国・四国ブロック内で連携を取るとしたら、一体どのような部分での連携を望みますか?」との質問に対して、全ての支援センターが「福祉・芸術分野の人脈づくり」と回答しました。その結果を受けて、広域センター・パスレルとして協議を重ねた結果、支援センター、福祉分野、芸術分野における新たなネットワークづくりを主目的として本企画は誕生し本年度で4回目の実施となりました。

本企画は、障害のある方およびその方々に関わる事業所とアーティストとのコラボレーションによる創作活動の『体験』にスポットを当て、これまでアート活動に関わったことのない事業所や障害のある方にアート活動を体験する機会を持っていただくことを目的としたプロジェクトです。

また、派遣するアーティストの人選、体験する内容を含め、当センターと連携しながら探索するプロセスを経験していただくことで、事業所や障害のある方が事業終了後も継続してアート活動を行なっていくことができるようになることを目指しています。

実施対象

以下に挙げるいずれかに該当する団体等を対象に実施。
就労移行支援事業所、就労継続支援 A 型事業所、就労継続支援 B 型事業所、共同生活援助事業所、放課後等デイサービス事業所、福祉型障害児入所施設、医療型障害者入所施設



アート活動を始めようとする事業所のファーストステップに伴走する企画
チラシ（表面）

活動内容

- 手順に沿って当センターと連携しながら、アーティストとどのような活動を体験するか（美術分野・舞台芸術分野、他）、派遣依頼するアーティストの選定、訪問支援日および体験内容の計画を行う。
- 計画を元に、アーティスト派遣による活動の体験（1回）を実施する。体験終了後必要書類を提出し、全体終了後には全参加事業所が一堂に介して座談会（振り返り会）を開催する。



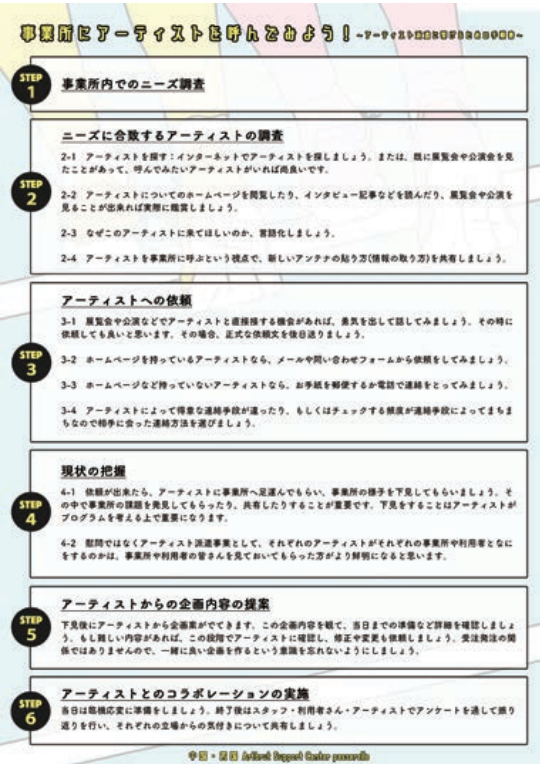
アート活動を始めようとする事業所のファーストステップに伴走する企画
チラシ（裏面）

活動場所

原則として、普段活動の拠点としている場所での活動とする。

募集団体数

各県1事業所（最大9事業所）



事業所にアーティストと呼んでみよう
～アーティスト派遣に繋げるための手順書

岡山

倉敷市障がい者 デイサービスセンター

岡山県倉敷市／生活介護事業所

招聘作家

Theo HAZE (テオヘイズ) さん

三味線演奏またギターによる弾き語りの鑑賞をしながら、テオヘイズさんのオリジナルの絵に対して利用者さんが色を塗ったり、色紙を貼ったりして自分仕様の作品を作り上げました。

応募の動機

アート活動には以前から興味があり、当施設でもやってみようとは思っていましたが、なかなかアーティストの方をお呼びしてのアート活動となるとハードルが高く、またどういった方をお呼びすればよいかかわからず、手が付けられていなかった現状がありました。今回この事業を見つけ一緒に伴奏してくれる方がいてくださるのならば、やれるかもしれないと思い今回応募させていただきました。また当センターでのレクリエーション活動についてもマンネリ化も否めず、センターでの活動の幅も広げたいと思っていたこと、そしてなにかしら新しいことを始めてみたいと思う気持ちもあり応募させていただきました。



招聘したアーティストの Theo HAZE さん

事業所の紹介

岡山県倉敷市にある生活介護事業所です。倉敷駅より車で20分ほどの場所にあり立地は比較的良好、お店も多く利便性も高いです。またくらしき健康福祉プラザ内の一角にデイサービスが部屋数も多く広めです。プラザの施設の中に200名ほど入れるホールやプール、調理室や視聴覚室があり、外には公園もあるので市民の憩いの場所としても活用されています。定員は20名で現在1日12～18名程度の利用者がおられます。重症心身障がい者の方が5割程度おられます。(人工呼吸器や胃ろう、気管切開などの医療的ケアが必要な方を含む)自分で動ける方は1から2割程度。自力で動ける方が少ないため職員は多めで職種も看護師、介護士、作業療法士など専門職の職員が従事しています。

参加者の様子

三味線演奏を聴くことは、職員はじめ利用者のほとんどの方にとって初めての経験ではなかったかと思います。またとても優しいギターの生演奏の弾き語りの中での作品作りはとても贅沢なひと時でした。テオヘイズさんオリジナルの鬼のイラストへの塗り絵やちぎり絵は何か特別感があり、同じものを塗っても一人一人の個性が生まれ、とても良い作品になったと思います。作品が出来上がってからは当センターの廊下に掲示しておりますが、来訪者の方が自然とそこに足を止め見入っている姿をたくさん見かけます。特に子供さんが見ていることが多く、何かしら引き付ける力があるんだなと感じております。利用者さんからも楽しかったな、おもしろかった、またやりたい、三味線さくのはじめてで聞けてよかったなど言ってくださる方も多くおられました。



職員の方の支援を受けながら作品制作の様子



重度障害のある方に対しては声掛けに対する反応を頼りに色や素材を選択した



利用者さんと一緒に色選びをする様子

実施しての感想

こちら側からしたら少しハードルが高いと思う講師の方でも今回のように快く受け入れてくださったことにやや拍子抜けのような気持ちもありました。また当センターの重度の障害をもっておられる方への理解をしてくださったことに、とてもうれしくそしてありがたい、意外にも障害者の方に対しての一般の方の理解が進んでいることにやや驚きもありました。ひとのつながりを大切にしてい中でこれからもいろいろなことへチャレンジできるような気がしています。

今後の展望

職員の発想だけでなく、アーティストさんの質の高いものづくりや芸術に触れる機会を増やしていきたい。機会を増やすことでスタッフの質の向上にも取り組んでいきたい。また当センターとほかの事業所とのコラボ事業などにも挑戦していきたい。

岡山

リエゾン

岡山県備前市／放課後等デイサービス事業所

招聘作家

戸川由美子さん (アトリエ ピピ)

【活動内容：グラスアート体験】

初めてのイベント企画でしたので敢えて通常営業日ではなく、保護者の方も一緒に参加しやすい日曜の開催にしてみました。アクリル板に特殊フィルムと鉛線を貼ってスタンドグラスの雰囲気そのままに、短時間で安全に作品が出来るグラスアートの先生をお招きしました。低学年の子などには少し難しい工程がありましたが、保護者や先生・職員と一緒に進め全員が時間内に完成させることが出来ました。記念・記録用に完成後は用意した撮影ブースでの撮影を行い、プリントアウト・ラミネート加工して参加者に配布しました。

応募の動機

デザイン科出身の職員が複数居り、ダンボール工作・木工・プラ板・アイロンビーズなどの創作的な活動は日常的に行なっていました。しかし専門性の高いアーティストの方に講師をして頂くイベントなどを開催する機会は今までなく、本物に触れたり目にしたりする事で子どもたちに更なる創造性や発想力・感受性が育てれば、と思い応募させていただきました。



招聘したアーティスト戸川由美子さんの説明を聞く様子



楽しみながらグラスアートの作品を制作する様子



完成したグラスアート作品



子どもたちだけで制作するのが難しい場面では先生の手を借り保護者の方も一緒に作品制作に取り組んだ

事業所の紹介

岡山県東部の山間地域にある旧小学校の跡地を利用し、平成31年に開設した放課後等デイサービスです。子どもたち一人ひとりの特性を大切に、そして地域で生きるための社会性の育成をめざし小学生から高校生までの幅広い年代が触れ合える機会を提供しています。山間部の旧小学校という立地を生かし、広い空間と豊かな自然の中でのびのびと過ごせる施設です。地域の方のご厚意でイチゴ狩りや桃の袋掛け・収穫の体験、敷地内での花壇づくり、職員によるキャンプ体験（焚き火によるカレー作りやテント設営など）や竹を使った流し素麺など、様々な経験を通して自然と触れ合いながら共同作業の大切さを学んでもらっています。

参加者の様子

始まる前から参加してくれた子どもたちからは「今日はすごく楽しみにしてた!」と笑顔が見られ、製作中もいつもとは違う顔を見せてくれました。フォトスタンドかペン立てを申し込み時に選んでもらっていたので、当日は用意された柄やカラーフィルムの中から選んでもらい、それぞれの個性がとて良く出た作品が完成していました。加えて親子の触れ合いや保護者どうしの触れ合いの場にもなり、新しい繋がりが生まれていた事も良かったです。作品を持って写真撮影する子供達の満足そうな笑顔がとても印象的でした。

実施しての感想

率直な感想は、やってよかった!です。当日に参加した保護者の方々にアンケートをお願いし、結果と併せて実施後に職員間で良かった点・反省点の話し合いをすると多くの積極的な意見や改善点が出てきました。開催したことにより子どもたちの新たな面も見られたので、今後の支援に繋がるヒントも見付けることが出来ました。アンケートでは「良かった」との声が多く、今後もイベントを企画したら参加したいか?の問いにも全員から参加したい、と回答を頂けました。参加者からの評価を頂き次の目標も少し見えてきたと感じています。

今後の展望

無事に開催終了した報告を理事長に行なった際、このような良い取り組みは今後とも定期的に継続していきましょう。との意見もあったので来年度以降も年1回ほどのペースで続けていきたいと考えています。職員から改善点も多く挙がったので、手探りになると思いますが新しいリエゾンの目玉イベントとなるよう新しい挑戦をしていきたいと思っています。

島根

ポレポレ

島根県松江市／生活介護事業所

招聘作家

天野尚(天野紺屋)

応募の動機

ポレポレの利用者様は紙をハサミで切ったり、筆やペンを使って文字や絵をかくことはよくされていますが、手や服が何かの色に染まる程の体験をされることは少ないのかもしれないと感じていました。今回の企画を知り、利用者様は勿論のこと職員も含めこんな体験もあるんだ！事業所でも出来るんだ！と、気づききっかけになると良いなと思い応募しました。



招聘したアーティストの天野尚さん(写真右下)と完成した作品を手に記念撮影

事業所の紹介

ポレポレ生活介護は、松江市乃木福富町の静かで落ち着いた場所にあります。「ポレポレ」は、スワヒリ語で「ゆっくりのんびり」という意味です。ポレポレという名のとおり、ひとりひとりのペースに合わせた活動を通じて、表現の喜びや達成感を感じる時間を大切にしている事業所です。

参加者の様子

緊張の表情からのスタートでしたがアーティストの方が興味を引く話を最初にくださったこともあり、参加者の皆さんの緊張はすぐに解れました。自分の作りたい模様や柄になるよう分からないことや教えてほしいことがあると、積極的に声をかけていらっしやる様子が伺えました。染めの工程では、アーティストの掛け声に合わせて「どぼーん！」と、大きな声で布を染料に浸され顔や手に染料が付着しても気になることなく、夢中になって取り組まれている姿が印象的でした。



藍で染めたバンダナをすすぐ様子



バスレルスタッフも参加させていただき、みんなで一緒にバンダナの藍染め体験を行った



アーティストの天野さんによる丁寧な指導を受けながら作品を制作する様子

実施しての感想

企画は藍染のアーティストをお招きして、藍染体験を楽しみました。参加された皆さんは完成した自分の作品をお披露目(自慢)をしたのですが、他の参加者さんから拍手や「素敵!」という言葉をかけてもらい、照れるような嬉しいような表情をされていたことが忘れられません。運営については、事業所が主体となって段取りを組んでいくことに対し、最初は不安でした。アーティスト探し・打診・打合せ等初めての取り組みで戸惑うことも多々ありましたが、都度バスレル様に相談できたことで不安も拭えましたし、今後自分たちでアーティストを招聘する際、とても役立つ経験になりました。

今後の展望

地元の伝統文化に触れ、アーティストの方にもこんな事業所があると知っていただけたことは、大きな収穫になりました。このつながりを大切にしながら、更に地元の文化や体験に触れられる機会を増やせるよう活動を続けて行きたいです。

山口

ステップあそかの園

山口県山口市／放課後等デイサービス、多機能型障害福祉サービス

招聘作家

山千代航さん

(VIVISTOPYAMAGUCHI・・・クラフトツールやデジタル機器などがそろった街のアイデアスタジオ)

【活動内容：グラスアート体験】

・新聞紙であそぼう

①新聞紙を長くしてみない？

②長くなったら、この部屋の好きなところに貼って長さを確かめてみない？

このたった二つの提案と、たった二つの物（新聞紙とセロハンテープ）から始まる、自由な発想の拡がりを楽しむワークです。「いいね!」「カッコいい!」「何ができているの?」などと言葉かけをしながら、おもいつきとおもいつきの変化やおもいつきの交流によるワクワク感が生まれます。

応募の動機

私たちはみんな、楽しみや面白み、笑いや喜びがある日々を送りたいと思っています。

当園でも、特別なことがある楽しみの日として、バイオリニストさん、シャンソン歌手の方、シンガーソングライターさん等々にお越しいただき、コンサートを開催しています。毎回、ポスターや応援グッズを作成しながら開催当日を心待ちにしたり、開催日には、一緒に歌ったり踊ったり合いの手を入れたりと一体感のあるコンサートです。

今回は、「やったことないけど、できるかな?」「上手にできるかな?」と不安を感じながらも、自らが主体的に、「新しい体験をする」「新たなことに関心を持つ」「ドキドキワクワクを感じる」ことに、気楽に挑戦してみたいと思い、応募しました。



招聘したアーティストの山千代航さん(写真右)とイベント実施後に振り返りをする様子

事業所の紹介

法人理念「人みな同朋(はらから)」子どもや大人、高齢者や障がい者など関係なく、人はみんな等しく同じで、かけがえのない命を持っていると考えています。私たちは全ての人の尊厳を大切にしながら、一人ひとりの幸せを願っています。その実現のため、各々が「やさしい心」「ふれあう心」「あたたかい心」を大切にします。ステップあそかの園は、放課後等デイサービス、多機能型障害福祉サービス(生活介護・就労継続支援B型・就労移行支援・就労定着支援)を通じて、利用者さん一人ひとりのライフステージ・ニーズに応じたサポートを行っています。

参加者の様子

今回の、ワークでは①新聞紙を長くしてみない?②長くなったら、部屋の好きな所に貼って長さを確かめてみない?の提案でワークが始まりました、用意した物も2つ新聞紙とセロハンテープです。何か見本があるわけでもなく、利用者の皆さんはそれぞれに新聞紙をちぎり始めました。その過程の中で作る物が変わったり加えられたり、周囲の方の影響を受けたり、合体したり(物も心も)。今回のワークでは、沢山のコミュニケーションや創造的な空間が生まれていく過程がとても新鮮でした。各々が自由気ままに参加しながらも、皆でやっている共同を感じられる時間となりました。



自由な発想で部屋中に貼り付けられた新聞紙



高いところには脚立を使って新聞紙を貼り付けた



当日は職員も一緒にワークショップに参加し、制作活動を楽しんだ

実施しての感想

アート活動と聞いてまず何かを作る事を思い浮かべました。利用者さんの得意な事をたくさん見つけながら、成果物である作品を作っていけるのだろうか?不安に感じていた時、山千代さんに出会い「アート」を創作する途中課程が大切であるとの新たな概念を知る事が出来ました。その、概念を知った上で今回のワークに取り組んだ事で私たちも、利用者さんの新たな一面に沢山出会う事が出来ました。今回の経験を今後のアート活動にしっかりと活かしていきたいと考えています。

今後の展望

今回のワークによって生まれたコミュニケーション。それは、「いいね」「そうだね」と共感や好意、感謝の気持ちを伝え合うことが多かったのではないかと振り返ります。普段は流されてしまいがちな、奇抜な発想、突飛な発想、奇想天外な発想が認められ、それが、どんどん膨らみより魅力的な物や関係性が創造されていく。そんな場面や環境を皆で作って行きたいと考えています。その為には、今回のように場面を設定しての意識的な取り組みや、日常の場面でも、柔軟な前向きな視点で考えることを重視し、「～したい」を増やし、他者に伝え、できる方法を考え、希望が叶う☆という経験を重ねていきたいと思っています。

山口

デイサービスセンター けあぽーときゃんぱす

山口県周南市／生活介護事業所

招聘作家

山本容資さん (スタジオジョジョ主宰)

陶芸ワークショップ。

当初は粘土細工の簡単な造形創作を考えていましたが、講師との事前打ち合わせで、触感を楽しむ傾向にある利用者さんのことや、なぜ粘土での造形を考えているのか説明した際に、講師からの提案で陶芸にチャレンジすることになりました。

ただ、陶芸は、成形→乾燥→焼成で、完成まで数日かかるので、講師によるワークショップは成型までとし、乾燥・焼成までは講師にお願いし、その後、事業所で焼物用マーカーで色付けをし、完成としました。

応募の動機

昨年、地域のイベントで作品展示をさせて頂き、表現活動（アート活動）が利用者の社会参加につながることを経験しました。現在、アートを支援ツールとして絵画など平面作品創作をメインに活動しています。ただ、絵画などに興味が湧かない利用者さんもあり、「色々な表現活動を通して、できるだけ利用者全員がそれぞれに興味を持って取り組み、継続できる活動ができるようにしたい」と思いつつも、スタッフだけでは限界を感じていたところに本企画を知り、「表現活動の幅を広げるチャンス!」と応募させて頂きました。



招聘したアーティストの山本容資さん

事業所の紹介

けあぽーときゃんぱすは、山口県周南市にある生活介護事業所です。利用者一人ひとりの「できること」「好きなこと」を大切に、安心して過ごせる生活支援と、表現の力を育むアート活動を柱にした事業所です。毎日ゆったりと過ごせる環境の中で、個別のペースに合わせたアート活動を中心に、安心と表現の楽しさを育む居場所づくりを行っています。利用者一人ひとりの世界が、作品を通して輝く場所になるよう、週5日の継続した創作時間、利用者の感性を尊重した個別支援、そして「表現（作品）」を地域へ届ける取り組みにチャレンジしています。

参加者の様子

予想通り最初は緊張気味でしたが、とてもあたたかく、「静かな活気」がある時間でした。陶芸用粘土を目の前にして、最初はみなさん”様子見”でしたが、粘土に触れた瞬間から表情がほぐれ、指先で確かめるように感触を楽しんでいました。職員と共に思い思いの形をつくりはじめると自然と集中モードに入り、静かな時間が流れていました。普段は言葉での表現が難しい方も、作品づくりの中では自分らしさがはっきりとあらわれ、職員も新鮮な発見が多かったようです。職員の不安を良い意味で裏切るような、「緊張よりも“やってみたい”が勝った」、そんな前向きな空気に満ちたワークショップでした。



作品制作の様子



完成した作品を手に取って記念撮影



実用性にとらわれず、自由な発想で多彩な作品づくりを楽しんだ

実施しての感想

土（陶芸用粘土）に触れ、形を作る工程は、普段のアート活動とは異なる表現の広がりを感じさせ、利用者の新たな一面を発見する機会となりました。また、福祉業界以外の外部講師によるワークショップの進め方や指導法に触れ、これまでとは異なる視点から支援を見つめ直すことができました。アート活動に取り組みにくい、あるいは興味を持ちにくい利用者にも表現の場を提供したいと考えていましたが、事業所だけでは限界があります。今回の企画への参加により、その思いを形にできただけでなく、パスレルさんの助言をきっかけに県の支援センターとの連携や交流も生まれ、大変貴重な経験となりました。

今後の展望

今回の陶芸ワークショップをきっかけに、改めて事業所としてアート活動の取り組みを形づくり、深めていく方向が見えてきました。まずは、利用者一人ひとりが「興味を持ち、自分のペースで続けられるアート」を探せるよう、いろんな素材や表現方法にも少しずつ触れる機会を広げていきたいと考えています。また、制作の様子や作品を職員間で共有し、支援の視点をそろえることで、アート（表現）活動を支援の一部として根づかせていくことも目標です。将来的には、事業所単体での小さな展示会や、地域とつながるアート企画にも挑戦し、利用者さんが「表現する場」「伝わる喜び」を感じられる環境づくりを進めていこうと考えています。

山口

チャイルドハウス ひなたぼっこ

山口県光市／放課後等デイサービス事業所

招聘作家

会田 大也さん

『ダンボールで楽しく遊ぼう』

～親子で可愛いお家や秘密基地などを作ってみよう！～
ひなたぼっこの子どもたちは創作活動が大好きで、想像力も豊かです。一人ひとりの力も素晴らしいですが、みんなで協力するとさらに大きな力を発揮します。そこで、日頃から活動で活用しているダンボールをふんだんに使い、思い切り楽しんでもらいたいと考え、このテーマを設定しました。やまぐち支援センターの方に会田さんをご紹介いただき、事前の打ち合わせを経て、子どもチーム（自分の住める家づくり）、大人チーム（滑り台づくり）、スタッフ・子ども混合チーム（迷路づくり）の3つの活動に分かれて実施しました。



招聘したアーティストの会田大也さん（写真左）から説明を受ける様子

事業所の紹介

チャイルドハウスひなたぼっこは、障がいや不登校およびその周辺の困難を抱える当事者とその家族、支援者を対象に必要なサポート事業を行い、地域社会への啓発事業に取り組みながら、障がい児（心のケアを必要とする不登校児童を含む）とその家族が安心して生活できる地域社会を創ることに寄与することを目的としています。「みんなが笑顔になれる新しい社会的価値を創り、地域と共生する」という理念のもと、「みんなちがってみんないい」という金子みすゞの言葉を常に念頭に置き、今回の改定にある新たな5領域を含む支援プログラムに沿って様々な活動を取り入れています。子どもたちに多様な体験や経験の機会を提供し、「障がいがあるからできない」のではなく、「障がいがあってもできる」「特性を活かせば素晴らしい能力が発揮できる」ということを体験から学べるよう支援しています。そして、自信を持って社会へ自立していくための力を育む事業所です。

応募の動機

人間は誰しも一人ひとり豊かな個性と社会を活性化する力を持っていると考えています。私たちは日々、障がいのある子どもたちと関わる中で、その個性や能力を活かし、子どもたちが自分自身と社会のために新しい価値を創造し、地域の中で共に生きていけるような支援を目指しています。そのためにも、子どもが持つ力を開花させ、地域の人々と連携して価値の連鎖を生み出し、スタッフ自身も専門性を高めながら支援の質を向上させていく必要があります。私たちはそのような児童福祉の拠点となることを目指しています。しかしながら、地域における障がい児への理解はまだ十分とは言えません。今回で2度目の挑戦となりますが、事業所の拡充を機に、地域の方々にも子どもたちや保護者の頑張る姿を見ていただきたいと考え応募いたしました。すぐに変化が生まれるものではありませんが、少しずつ理解が深まり、子どもたちに寄り添い温かく見守っていただける地域になること、さらには将来的に交流活動が広がっていくことを願っています。

参加者の様子

参加者は大量の段ボールを前に、期待と緊張で目を輝かせながら説明を聞いていました。会田さんはその様子を感じ取り、簡潔な説明の後すぐに活動を開始されました。特に大人チームは完成形が見えない中でも、指示に従いながら集中して作業に取り組んでおられました。単なる作業ではなく、完成への期待を楽しんでいる様子が印象的で、童心に返ったように笑顔で取り組まれていました。子どもチームは午前中のうちに4軒の家を完成させ、誇らしげに保護者やスタッフを招待していました。迷路チームではスタッフも加わり、多様なアイデアを取り入れたトンネル型の迷路が完成しました。大人チームの滑り台は最後まで土台作りに苦労しましたが、全員で協力して完成させました。完成後、何度も滑って喜ぶ子どもたちと、それを温かく見守る保護者の笑顔がとても印象的で、本企画の成果を象徴する光景でした。全員で協力して完成させました。完成後、何度も滑って喜ぶ子どもたちと、それを温かく見守る保護者の笑顔がとても印象的で、本企画の成果を象徴する光景でした。



手作りの段ボールハウスから元気な笑顔がのぞく



子どもたちに大人気で、完成した滑り台には長い列ができた



昼食は参加者全員で手作りのカレーライスを食べました

実施しての感想

今回は、親子で楽しい時間を共有していただくこと、また保護者の方々にも子どもの頃の感覚に戻って楽しんでいただくことを目的として企画しました。平日や通常開所日の土曜日では参加が難しいことも考慮し、あえて閉所日の土曜日に実施したところ、日頃からダンボール工作を好むお子さんご家族にご参加いただくことができました。また、「お父さんにも活動の様子を見てほしい」という保護者の声もあり、今回の機会を通じて親子のふれあいの時間を持っていたことは大変有意義でした。保護者同士の交流も生まれ、子どもたちとスタッフの関係性を見ていただく良い機会になったと感じています。一方で、近隣住民の方々にもチラシ配布や昼食提供の案内を行いました。参加は自治会長のみでした。地域の理解を得るには、今後も継続した取り組みが必要であると改めて感じました。

今後の展望

チャイルドハウスひなたぼっこは、高齢者の多い地域と新しい住宅が混在する地域に立地しています。これまで、自治会への参加や清掃活動などを通じて地域との関係づくりに取り組んできました。一時的な活動には理解や協力をいただける場面もありますが、長期休業中など子どもたちの声が増える時期には苦情として表れることもあり、地域との共生の難しさを感じています。現在、新施設や2号館の開設準備を進めていますが、地域と一体となった活動の実現には課題が残っています。その中でも自治会長ご夫婦の温かい支援は大きな励みとなっています。今後も、今回のような親子参加型や地域開放型のイベントを継続的に企画し、地域の方々にも参加していただきながら、共に楽しめる場づくりを進めていきたいと考えています。

ふりかえり座談会

【参加者】

大隈進 ステップあそかの園
武永佳世 ステップあそかの園
岡本剛 リエゾン
岩成聡子 ポレボレ

【聞き手】

平谷尚大
 中国・四国 artbrut support center passerelle
北添紫光
 中国・四国 artbrut support center passerelle

取り組み内容の紹介：

招聘アーティストと実施内容について

平谷 今回、「アート活動を始めようとする事業所のファーストステップに伴走する企画」で行った取り組みの紹介をしていただきたいと思います。依頼したアーティストと実施した内容、当日の取り組みとその様子について、順番に報告をお願いします。まずは山口県の高機能事業所ステップあそかの園の武永さん、大隈さんからお願いします。

武永 今回お越しいただいたアーティストは「VIVISTOP YAMAGUCHI」で活動されている山千代航さんです。山千代さんは山口市内で「ものづくりを通じてまちなかを盛り上げよう!」というコンセプトで子どもたちと一緒に「好き」を発見しよう! 「好き」を探索しよう! という趣旨の様々な活動に取り組まれています。個々人の想いを活かして自由にものを作るというところを重視されておられる山千代さんにお越しいただきました。実施した内容は、「新聞紙で遊ぼう」と題したワークショップです。山千代さんから「新聞紙を長くしてみない?」ということと、「長くなったらこの部屋の好きなところに貼って長さを確かめてみない?」という2つの提案をいただきました。私たちは「肯定的な言葉がけ」をしようという心合わせをしてスタート。あとは利用者さんたちが自由に広げていくことで楽しい時間を過ごすことができたワークショップでした。利用者さんは、新聞紙を長くちぎって貼っていく方もいらっしゃる、だんだん服みたにして身につける方、小さく固めてボールみたいなものを作る方、たくさんの新聞紙を使われる方、最初から最後まで一枚の新聞紙をちぎり続ける方、じっと一箇所に座って活動される方、室内を自由に動き回られる方など、本当に様々でした。失敗を恐れていらっしゃる方は一人もおられず、皆さんののびのびと活動されていました。

大隈 その活動の中で「いいね」といった肯定的な言葉がけが自然と出てきたのが、印象に残っているところです。

平谷 当日、僕も北添も参加させてもらったんですけど、楽しかったですね。

北添 めちゃくちゃ楽しかったですね、ありがとうございました。

平谷 最初どんな風になるんだろうと、タイトルを聞いただけではなかなか想像がつかなかったです。ですが、今言われたみたいにただ長くするだけじゃなくて、被ってみたい色々な形でアレンジして。ワークショップの時間はだいたい2時間ぐらいでしたかね。



ステップあそかの園での新聞紙を使ったワークショップの様子

武永 最初は主に生活介護の利用者さんが参加されていて、徐々に放課後等デイサービスの子どもたちも加わってこられました。あとは大学生のボランティアの方もお越しいただいたので、利用者さんたちは皆さんとお話をしながら自由気ままに取り組むことがすごく楽しかったみたいです。ワークショップ開催前に、山千代さんより、途中過程の関わり方として、あまり手を出しすぎないようにしようという意識の共有がありました。こちらが促しをして制作をするのではなく、本当に自由に、何も不正解がないような状態でワークショップができたので、それもすごく良かったなと思います。ありがとうございました。

平谷 それでは次に岡山県の放課後等デイサービス事業所リエゾンの岡本さんから報告をお願いします。

岡本 当日は、倉敷市の真備町から先生に来ていただきました。数年前に災害があった場所ですが、僕らのリエゾンがある岡山県の東側からはほぼ反対側で、だいぶ遠いところからお越しいただきました。リエゾンでは、グラスアートというステンドグラスのようなものが簡単に作れるアート活動をされている先生にお願いしました。当日は子どもが8人で、保護者の方も一緒に参加していただきました。いつもは子どもたちだけが利用されていますが、当日は保護者の方と一緒にいるところを初めて長時間見させていただきました。実際に行った時も、いつもとは違う子どもたちの顔が見られたりして、日頃では見えない「こういう支援も必要なのかな」という部分が見えたりと、職員も新しい面が見えた感じがしました。内容としては、テンプレートがある中で模様を選んでいただき、フォトスタンドやペン立



リエゾンでのグラスアートワークショップの様子

てを作るというものです。意外と難しいところがあって、小さい子にはちょっと大変だったかなという面もありましたが、みんな楽しそうに一生懸命作っていました。スタッフも少し手助けをしたりという感じで進めましたが、率直な感想として「本当にやって良かったな」ということに尽きます。終わった後に活動に参加した職員全員で反省会を行い、良かった点や改善点を書き出すと A4用紙いっぱいになりました。また、保護者の方にもアンケートを取り、集計した結果、今後もこういう活動があれば参加したいという言葉をいただきました。定期的に続けていく良いきっかけになったと思います。

北添 振り返りシートと反省会、いいですね。ありがとうございます。

平谷 僕も北添も当日は残念ながら事業所には伺えませんでした。作品の制作はどのように行ったのですか？

岡本 下絵というか形のパターンが十何種類かあって、そこから事前に絵柄を選んでいただきました。色付きのフェルト（半透明のシート）をなぞって切り、透明なアクリル板に両面テープで貼ります。その上から、境界線を作るように銅の線（リード線）を貼って行って、ステンドグラスみたいに仕上げる「グラスアート」というものです。

北添 フェルトをアクリル板で挟むわけですね。

岡本 このフェルトは半透明のシートで、アクリル板に貼った上からリード線を重ねて貼ります。細かいカーブを指でギュッと押さえなが

ら曲げる作業が割と大変だったみたいで、アンケートでも半分くらいの方が「ちょっと難しかった」とおっしゃっていました。低学年の子には難しかったかなと反省しています。

北添 ちょっと難しいくらいの方が、利用者さんの経験としてもいいかもしれませんね。

岡本 そうですね、時間的にもちょうど良かったですし、完成した後の達成感というか、子どもたちの「できた!」という笑顔がすごく印象的でした。

北添 作品はお持ち帰りですか？

岡本 はい、お持ち帰りいただきました。当日、写真の撮影ブースを作ってデジタル一眼レフで撮影したので、その写真も後日お渡しする形にしています。

平谷 続いて、島根県の生活介護事業所ポレボレの岩成さんお願いします。

岩成 ご依頼したアーティストは「天野紺屋」の天野尚さんという安来市広瀬町において156年に渡り伝統的な藍染を守り続けている方で、今回はバンダナの藍染め体験を行いました。皆さん最初はすごく緊張されていたのですが、天野さんがとてもユーモアのある方で、興味を引かせるように分かりやすくお話をしていただいたおかげで、和やかな雰囲気が進めることができました。そして、やっていく



ボレボレで行った藍染ワークショップの様子

うちに利用者さんの緊張もだんだん解けて、自分の作りたい模様になるように「これどうしたらいいですか」と自発的な働きがみられ、意欲の高さを感じることができました。皆さん、染料の独特な香りに対して特に気にする様子もなく、「ドボーン」という天野さんの掛け声に合わせて自分の布を染料に浸し、その布がだんだん藍色に変わっていく様子を楽しんでおられました。私はその姿を見て、自分の作品を良いものにしようという思いが伝わってきました。顔や手に染料がついても夢中で取り組んでいて、完成した作品を披露した際は、みんなで拍手し、「素敵」と声をかけ合い、披露した方は、照れているようでいてすごく嬉しそうで、とても楽しい取り組みになったと思います。

北添 当日、めちゃめちゃ楽しかったですね。天野さんはスペースさえあればトパーッと来て構えてくれる感じでしたね。

岩成 そうなんです。ろう学校などでの活動実績もあるようで、今回初めてのことでしたが、とてもスムーズに進みました。ブルーシートやカッパ、手袋など、汚れないための装備もほとんど準備していただきました。外国人の方への対応経験も豊富な方ようで、言葉に頼らない豊かな表情でコミュニケーションをされており、利用者さんもニコニコ過ごせたなと感じています。みんな「また来てほしい!」と言っています。

北添 費用面についてですが、パスレルからの上限4万円の範囲で実施は可能でしたか？

岩成 はい、実施可能でした。今、後ろに飾ってあるのが皆さんが作っ

た藍染めの作品です。布の縛り方や染料の中に漬ける回数を多くすると色が濃くなり、回数を少なくすると薄くなるので、出来上がりにその人らしさが出ていてすごく良かったです。ちなみに、これは北添さんが染めて下さったものです。

那須 私たちも藍染めには興味があるのですが、自分たちでやるのは難しいですか？

岩成 はじめは講師に来ていただいた方が良いでしょう。一度体験すれば、「ゴムで縛る」などの簡単な工程なら自分たちでもできるかなと思います。講師の方に一度来ていただくと、やりやすいと感じました。

平谷 過去にもこの事業で藍染めをやりたいという事業所はいくつかありましたが、天野さんのように完璧な装備を持ってきてくださる方はなかなかなくて、実現できたのは初めてでしたね。ご報告ありがとうございました。

それでは続いて、岡山県の倉敷市障害者デイサービスセンターの那須さん、お願いします。

那須 今回依頼したアーティストは、三味線と現代アートの分野で活動されているテオ・ヘイズさんです。私の主人の兄が横浜に住んでいるのですが、その知り合いで神戸にお住まいのテオ・ヘイズさんを紹介していただきました。内容は、三味線の演奏やギターの弾き語りを聞いた後に、テオ・ヘイズさんが描いた鬼のキャラクターの塗り絵や、塗り絵が難しい人は貼り絵をして、自分の好きなものを使って制作を楽しみました。



倉敷市障害者デイサービスセンターの様子

北添 テオ・ヘイズさん、すごかったですよね。ステージ慣れしていて、三味線をやってから塗り絵、休憩にギターの弾き語りを入れるなど、進行も慣れていらっしかったです。重度の方も多いので、職員の皆さんが一人一人の意思を確認しながら進めておられたのも印象的でした。

那須 うちの職員が10名以上いて人数がいるので、1対1に近い形で利用者さんの支援にあたることができます。人工呼吸器をつけている重症な方も、職員が意見を聞きながら「これでいい?」とお手伝いすることで参加できました。普段からやっていることなので、自然と対応できたのが素晴らしいかなと思います。

平谷 ひとつひとつの過程を言葉で確認してその言葉に対する利用者さんの反応を見て例えば使う色を選ばれていましたね。スタッフの方の能力の高さを参加させていただいてすごく感じました。続いて、山口県のけあぼーときゃんぱすの松下さん、お願いします。

松下 今回依頼したのは、「スタジオ jyojyo」というアートスタジオの山本容資さんです。最初は、パスレルさんに講師を探していただけたという甘い考えがあったのですが(笑)、なかなか自分たちでは見つからず、平谷さんから県のサポートセンターを紹介していただいて繋がることができました。

これまでけあぼーときゃんぱすで制作した作品は平面の作品ばかりだったので、指で触れるのが好きな方が多いことから粘土細工を企画しました。講師の方が陶芸家だったので、本格的な陶芸にチャレンジしました。最初は職員も戸惑いましたが、講師の方の進め方がとても上手で、みんなが前のめりになりました。普段はクレヨンを砕いて巻き散らすような方が、粘土だとかなりの塊を作ったり、飽きるかと思っていた人が何個も作品を作ったりと、新しい発見がありました。

平谷 粘土に穴をあけ続けた方がいらっしかったです、その方の作品が印象的でしたね。1時間半ずっとペンで穴を開け続けていて、すごく楽しそうでした。スタッフの方も止めずに、制作の様子を見守っている光景がすごく良かったです。

北添 山本さんは「どういう形でもいいから」とずっと言われていて、皆さんやりやすそうでしたね。材料費や謝金の問題で陶芸は大変ですが、頼むところ次第でできるんだなと実感しました。



けあぼーときゃんぱすの陶芸ワークショップで完成した作品

松下 準備も講師の方がほとんどしてくださり、ワークショップの後に乾燥させて焼く工程まで引き受けていただけたので、すごく良かったです。アトリエという別の建物で活動しているのですが、ここに来ると「よしやろう」という気持ちになれるような空間にしています。

大変だったこと、苦労したこと、芸術文化活動の課題

平谷 今回の企画を実施していく中で、大変だったことや苦労したこと、芸術文化活動を行っていく上での課題について、ステップあそかの園さんからお話を伺ってきたいと思います。

大隈 まず、芸術活動をするときに自分たちが芸術活動について何も知らなかったというところが大きかったです。イメージができない中から始めて、今回は成果物を作るのではなく途中の過程を大事にするものでしたが、そこを楽しめたのが良かったです。「きちんとしたものを作らなければ」という不安もありました。子どもたちも重度の方が多く、果たしてアートの的なことができるのかと思っていましたが、やってみると全然そんなことはなくて楽しかったです。作ったものを壊すことも肯定的に捉えたりして、気苦労はありましたが、何かを作ることだけでなく過程が大切なんだと改めて実感しました。

北添 物理的な大変さよりも、精神的な不安の方が大きかったですか？

大隈 そっちの方が大きかったですね。「楽しんでもらえるかな」、「その場で何かが起こらないかな」と、こちらが気を回しすぎて心配していました。

北添 予期せぬ事態が起こった時のために、何か対策はされていましたか？

大隈 何かあったときにいつでもクールダウンできるよう、隣の部屋に落ち着ける場所を確保したり、集団の中で過ごすことが難しくなった場合は自分の行きたいところに行ってもらおう、といった打ち合わせは事前にしていました。

平谷 アーティストの山千代さんの企画は、正解もないし優秀もつかないもので、アートとは何かを考える上ですごく良い企画でした。山

千代さんと出会うまでの過程で苦労されたことはありますか。

武永 なかなかアーティストさんに出会えなかったというのがありますね。最初、私たちはアート活動といえば「成果物を作って終わるもの」というイメージが強かったので、そこを伝えすぎてしまい、実際にできるかどうかのイメージが持ちにくかった部分があったと反省しています。話し合っていくうちに私たちのイメージも変わっていきました。山千代さんも最初はロボットを作る提案をしてくださっていましたが、話し合いの中で今回実施した新聞紙のワークショップに落ち着きました。

大隈 利用者さんのことを知っていただき、私たちの不安も共有した上で、最後にいい提案をしてくださいました。実際に現場に来て様子を見てもらってアイデアを出すといった、事前の話し合いや共有が、その事業所に合った活動につながったのだと思います。

武永 最初はロボット制作を少人数でやろうかとも考えていましたが、やっぱり大勢の方に関わってもらいたいと考え、新聞紙のワークになりました。利用者さんの中には、自然と退出される方がいたり、また参加しに來られたりと、自由が許されている環境が居心地よかったです。実は当日、気分が高揚して不安定な方もいらっしゃったんです。日頃は個別スペースで支援者とマンツーマンで過ごし、人との混じり合いを苦手とする方なのですが、あの場で長い時間過ごせて、大きなトラブルもなく退出できたのはすごく良い経験だったんじゃないかなと。

大隈 特性上静かな場所を好む子もいましたが、ざわついた環境でもしっかり皆と楽しむことができていました。やってみないと分からなかったことです。私たち職員が「やっていなかっただけ」という可能性を考えさせられました。

北添 ずっと見ている職員さんだからこそ分かることですね。客観的に見ると「しんどかったのかな?」という印象でも、「ここにこれだけいられるのはすごいことなんだ」と分かると、場の捉え方が全然変わりますね。

平谷 続いてリエゾンの岡本さんお願いします。

岡本 一番苦労したのは、来ていただくアーティストの選定です。最初の段階で職員と話し合って方向性を決めるところまでは順調だったのですが、各アーティストの方と日程調整やお願いをする段階でなかなか合わなくて苦労しました。第一候補はレゴのアーティストさんだったのですが、レゴランドとの契約の関係で難しいと言われ、僕が直接レゴランド・ジャパンに電話して交渉したりもしたのですが、結局日程が合いませんでした。他にも樹脂粘土の先生などにも当たりましたが、年末の展示会と重なったりで1ヶ月近く調整にかかりました。最終的にガラスアートの先生が決まって良かったです。将来的にはレゴのアーティストさんにもまたアプローチしたいと思っています。レゴが好きなお子も多いです。当日は、営業日ではない日曜日に保護者と一緒に参加してもらう形にしました。席の配置などの細々した問題もありましたし、小さい子には難しすぎたという意見もありました。ただ、お母さん同士の横のつながりができたのは良かったです。違う学区の方同士

が顔を合わせる機会になったので。自己紹介の時間をもっと作ればよかったという反省点がありますが、大変ながらも楽しみながら進められました。

平谷 アーティストの方に依頼する過程で、断られるケースは多いですよ。ステップあそかの園さんアーティストの方が決まるまで三転三転しましたよね。

大隈 2回断られて、3回目で決定しました。最初は、法人でメタバースを始めていますので、その流れでデジタルアートの話が出ていたのですが、お断りがあって。

平谷 とても苦労されていたのをよく覚えています。お話を進めていく中で、残念ながら断られてしまった要因は何でしたか？

岡本 時間的な要因が大きかったです。年度内で実施する事業なので期間が限られていますし、先方の都合も当然あります。長期的なビジョンで、1年先とか2年先の話として進めたほうがいいのかもありません。

大隈 最初のアーティストさんは「少し自信がない」とおっしゃっていました。障害のある方や施設に対するイメージが湧かず、不安があったのかもしれない。そのあたりの共有を上手くやっていく必要があると感じました。

北添 僕も打楽器奏者として活動していますが、求められるワークショップが自分のプログラムで対応できるのか、障害という特性に合わせられるのかは別のチャンネルだったりします。準備期間がもっと欲しくなることもありますね。

平谷 時間的要因、そして施設に行くことへの不安。金銭的な面についてはどうですか？

岡本 4万円という予算があり参加無料にもできましたが、今回は敢えて参加費をいただく形にしました。継続を視野に入れ材料費や出張料を含めた費用が発生することを保護者の方々へお伝えしました。「お金がいるの?」という声もありましたが、今後の活動を考えると、この形が良かったと思っています。

平谷 ありがとうございます。続いてボレボレの岩成さんお願いします。

岩成 苦労したことは特になかったのですが、事業所が主体となってアーティスト探しや打ち合わせ、交渉をゼロから進めていくのは初めてだったので、戸惑いや不安は大きかったです。経費の精算も、細かい内訳になるとどうしたらいいか不安でしたが、その都度パスレルさんに相談できたので、今後の取り組みに役立つ経験になったと思います。

平谷 この企画は、決まったアーティストを派遣するのではなく、ゼロベースで経験していただくことで次年度以降も継続してほしいというコンセプトで実施しています。ただ、実際には馬力がいらすし、金銭面や業務との兼ね合いで大変なところですよ。

北添 コロナ禍以降、やらなくていいことはやらないという動きの中で、あえてアート活動に踏み出すハードルは上がっていますよね。職員の皆さんが楽しんでくださること、その中に継続性を見出せるかどうかを大切にしています。

那須 私も最初は、例えばパスレルさんが用意してくれたアーティスト一覧の中から選んで「このアーティストの派遣をお願いします!」というような感じのラッキーな企画だと思っていたのですが、自分たちでやるんだと分かって驚きました(笑)。でも、ゼロから自分で探して交渉することで「自分たちもできるんだ」という自信に繋がりました。一番大変だったのは講師探しです。倉敷のマスキングテープの会社などに相談しても「やっていません」と断られたり、どこに人がいるのか皆目見当もつかない状態が一番苦労しました。

平谷 これまでこの企画を実施した事業所でも、3〜4件目でやっとOKが出たという所が多かったです。数ヶ月後のスケジュールは埋まっているアーティストが多いですからね。けあばーときゃんぱすさんはいかがですか。

松下 うちは山口県の支援センターの紹介ですぐアーティストの方と繋がれたので、講師探しはそこまで苦労しませんでした。ただ、外部の講師が来てうまく創作に向かえるかという不安はありました。個人的には、最初のZoomミーティングまでに「何をやりたいか」を絞り込むのが難しかったです。職員の意見を集約していく過程は大変でしたが、決まった後はアドバイスをいただきながらスムーズに進みました。

平谷 自分たちでやるの?という反応は毎年聞かれますね。チラシには書いてあるのですが(笑)。ただ、アプローチして失敗したとしても、熱意を持ってアプローチすることで個人や事業所の経験として残っていくと思います。ぜひ積極的にアプローチしてみたいです。

実施後の変化：職員や利用者への影響

平谷 企画の実施前後で、職員や利用者さんに何か変化はありましたか？

武永 反省点としては、もっと細かく趣旨や進め方を職員間で共有する時間があれば良かったなと感じています。当日は、山千代さんの「肯定的に言葉をかけをする」「危険がない限り止めなくていい」というアドバイスを全員で意識して取り組みました。これは日頃の支援にも通じることですが、改めて念頭に置いて取り組めたことが良かったです。利用者さんの意外な一面も知れました。セロハンテープを上手に使用されることを知ったり、大雑把だと思っていた方が細かくちぎっておられたり。雰囲気を楽しむことが好きだと思っていた方が一箇所に座って黙々とちぎり続けておられたり。職員もすごく楽しそうでした。

平谷 企画を推進していく担当者の方と現場職員の温度差をどう埋めるかは一つの課題ですね。岡本さんはいかがですか。

岡本 リエゾンでも似たところがあって、初めてのことでワークショップの作業内容や順序を職員全員で共有することができておらず、子どもや保護者に聞かれても答えられない場面がありました。これは反省点であり改善点です。良かったのは、保護者と一緒にいる時の子どもたちのいつもとは違う一面が見れたことです。支援の仕方の新しいヒントが見えてきた気がします。

北添 「いつもと違う一面が見られる」というのは共通していますね。その一面が見られたことが、この先どのように作用しそうですか？

大隈 今までは行動をなんとなく流して見ていた部分があったかもしれませんが。でも「面白そうなことをやっているね」という気づきを記録に残すことが次につながると感じました。決めつけで制御するのではなく、行動から出てくるものを大事にしたいです。

武永 環境面でも気づきがありました。日頃は危ないものを片付けたり、必要なだけ提示したりと、環境を整えすぎて制限してしまっていたかもしれません。自分で必要な量を選んだり、いらぬものは返したりといった「日常では当たり前」のことができて、個性を発揮する材料になったと感じます。

平谷 支援者の視点だと「安全第一」になりがちですが、そこを飛び越えるきっかけになりますよね。

岡本 一つ例を挙げると、お母さんに依存して嫉妬しやすいと聞いていた子が、お母さんが他の方と話しているときに「こっち来て」と甘える姿を何度も目にしました。保護者が長時間同じ空間に居る中での状態・状況を直に見れたことで、新しい支援の方向性が見えてきました。

平谷 ありがとうございます。その他いかがですか？

岩成 これまでは紙やハサミ、ペンなどを使う活動が中心でしたが、今回のように「服も何もかも染まっちゃう」という体験は初めてでした。汚れや色の付着を恐れずに取り組めたことは、今後の活動でも新しいことに挑戦する姿勢に変わったのではないかと感じています。

那須 前もって職員や利用者さんに詳しく伝えていなかったのが当日どうなるかと思いましたが、皆さん見ず知らずの人が来てても上手に対応し、しっかり受け入れられていました。また、制作した作品を「ブラザ祭り」に掲示したところ、普段の作品は素通りされることが多いのですが、テオ・ヘイズさんの作品の前には一般の方や子供たちが足を止めて見ていました。引きつける力の凄さを感じましたし、利用者さんにもその響きが伝わったのではないかと感じています。

松下 利用者さんに劇的な変化はすぐには見られませんが、新しい提案に対して戸惑いなく始められる人が出てきました。一番の変化は職員の取り組み方です。これまでは「アートは難しい」と構えていましたが、講師の山本さんの「何でもいいから」という言葉で職員の間でも考え方が緩くなり、前向きに「あれをやってみよう」という声が出るようになったのが大きな収穫です。

全体を通した感想

平谷 最後に、一言ずつ感想をお願いします。

大隈 何かをやることで発見することが本当に多かったです。普段の生活の中にも芸術のネタは隠れている。アートは特別なものではないと感じたので、今後の支援に活かしたいです。

武永 アートの概念が広がりました。今回のワークには参加してられないのですが、最近、物を投げたり服などを破ってしまわれる利用者さんがいらっやって、このワークの後に「どんどん破ってもOK」という個別活動を組んでみたんです。新聞紙や発泡スチロールのトレイ、風船へと広げて。支援に悩んでいた方の活動の組み立てに、この視点がすごく役立っています。

平谷 素晴らしいですね。岡本さん、お願いします。

岡本 他の参加事業所のみなさんの話を聞いて、もっと自由な発想で、発散できるようなやり方もあったなと感じました。今までの工作活動が少し「固い」ところに行っていたかもしれないという反省も含め、今後に活かしたいです。

岩成 今回の藍染体験がきっかけで、地元の素敵なアーティストと繋がることが出来ました。この活動を更に、広めて地域の文化や体験に触れる機会を増やしていきたいです。

那須 新しいことにチャレンジすることは大変ではありましたが、これまでの風土を変え、外部のアーティストや学生など新しい視点を入れることで生み出されるワクワク感を、みんなで味わえた企画でした。ありがとうございました。

松下 ゼロベースでやっていくことが、継続的な活動に繋がると感じました。スタッフが楽しそうに、前向きに取り組めるようになったのが本当に嬉しいです。

高本 本物のアーティストに直接触れ、その姿勢や取り組み方を学べたことはとても参考になりました。ありがとうございました。



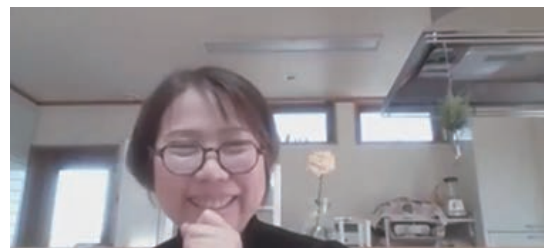
ステップあそかの園の大隈さん（左）と武永さん（右）



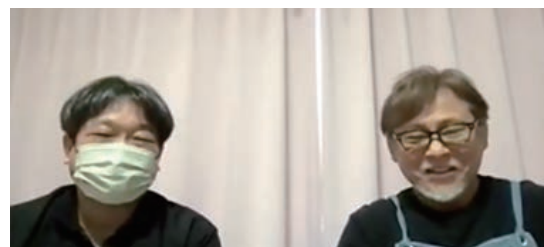
リエゾンの岡本さん



ボレボレの岩成さん（右）と利用者さんたち



倉敷市障害者デイサービスセンターの那須さん



けあぼーときゃんばすの高本さん（左）と松下さん（右）

セカンドステップを通して

原田幸子 チャイルドハウスひなたぼっこ

今年度の本企画では、令和5年度に引き続き、山口県のチャイルドハウスひなたぼっこを採択し、2回目の実施となった。初回の取り組みを経て、事業所内におけるアート活動への理解や関心は着実に深まり、日々の支援の中に表現活動を取り入れる土壌が少しずつ育まれてきている。今回は、そのような積み重ねの延長線上にある実践として、前回とは異なる視点や工夫が随所に見られた点が特徴である。本コラムでは、継続的な関わりの中で見えてきた変化や手応え、そして今後の展望について、現場の視点から振り返っていただいた。

アート活動導入前後での変化 (子どもたち、職員、場の雰囲気など)

チャイルドハウスひなたぼっこでは、日頃の活動の中に創作活動と称してアート活動を組み入れ、段ボール工作や基地づくり等を入れているため、活動の前後での変化はあまり感じませんが、外部からの専門的な方が来られたり、大人と一緒に創作(スタッフは別)したりすることは、人懐っこい特性からか、大喜びで日頃以上に意欲が増したような気がします。保護者の方々も親子活動は年2回行いますが、今回のような大人チームに分かれてという減多にない機会からか、皆さん童心に帰られたように楽しませていました。スタッフも同様です。

活動の中で印象に残っている出来事

段ボールアートということからか、いつもの親子活動よりお父さんの参加が多く、お子さんよりも集中して取り組まれ、楽しい時間を共有されていたように感じました。そんな熱心なお父さんやお母さんを応援するように子ども達も頑張ってお手伝いしていました。中でも一番印象に残ったことは、別館で昼食(カレー)と休憩時間の時に、一人だけご両親が声をかけても、スタッフが声をかけても上がれなかったお子さんがおられます。普段から工作、物づくりが大好きなお子さんです。ひょっとしたら、せっかく創った自分のお家を置いてきたことが嫌だったのかと、「お家に帰って食べる?」と聞くと、大きく頷いて顔をあげてくれたので、そのお子さんと創った家に帰りました。さっきまで目に涙を浮かべていた子が、満面の笑みでピースしてくれた時に、「段ボールで作ってあるとはいえ、子ども達にとっては一生懸命に創った家が自分の居場所であり、自分の大切な物なのだということを思い知らされました。

活動を通して感じたこと、気づきや戸惑い

アート活動には、想像力を働かせ、新しいアイデアを生み出す創造的なプロセスが含まれています。絵を描いたり、音楽を作ったりするなど、自由な表現活動を通じて、子どもは独自の発想やアイデアを膨らませることができます。特に子ども達の創造性は、既存概念にとらわれない柔軟な思考力から創られます。アートは、言葉では表現しきれない、人の感情やアイデアを表現する手段として機能します。絵を描いたり、音楽を演奏したりす

ることで、子ども達は自分の気持ちを表現したり、ストーリーを作ったりする表現力を身につけることができます。表現力が向上することで、他者(今回のような講師の先生や企画をしてくださったバスレルさん、他児の保護者の方達)とコミュニケーション能力も高まってきました。子ども達の表現力や創造力が大きくなればなるほど、やりたい事や夢が膨らみ、それを応えるスタッフの創造力も上げていかなければいけないので日々子ども達との競争です。

今後の活動に向けた展望や課題

アート制作を通して作品を完成させ、評価される体験は、子どもの自己肯定感を高めます。自分の表現が認められることで、自信と達成感が芽生えます。その為に、私たちは何をすべきかを考え、子ども達が見出し、創り上げた作品をたくさんの人に見てもらう場を作っていかなければならないと考えます。自己肯定感が高まると、自分に対する肯定的な態度が生まれ、挑戦意欲が増していくはずで。アート体験は自己表現の機会を提供し、自己理解と自己肯定感を深めていきます。私たちはそのサポートをこれからもしていきたいと考え、子ども達とともにこれからもアート活動を楽しんでいきます。



セカンドステップ



アートデリバリープロジェクト

中国四国巡回型アートプロジェクト2025

事業概要

当企画は厚生労働省障害者芸術文化活動普及支援事業 中国・四国ブロックの合同企画という位置付けで、パスレルが企画の中心を担う形で令和6年度から行っています。発端は、アート活動の活性化と交流や情報交換の促進のために中国・四国ブロックでの合同企画を行いたいという希望が各県の支援センターから多くありました。一方で各県の支援センターの持ち回り制にするのは、費用、時間、アクセスの面等から現実的ではないという意見も同時に多く存在しました。そこで、広域センターであるパスレルが主体となって毎年2〜3県にアートを届ける（デリバリーする）合同企画を実施することになりました。昨年度は主に展覧会というかたちをとりましたが、今年度は徳島県でのアーティストインレジデンス、島根県でのオープンアトリエが実施されました。

アートデリバリープロジェクト（以降 ADPと表記）は、“もの”ではなく“こと”をつくる、あるいはおこす企画です。一般的な文化施設に合うような事業をコーディネートして実施するのではなく、福祉施設などの身近な環境下でのアート実践を、受け入れ先と一緒に考えながら形にしていくことに軸足を置いています。

令和7年度のADPについて

目的：アート活動によって居住地域や県を越えたアーティスト同士の交流、または他者との交流機会を創出する。

目的設定の背景：昨年度のADPでは、主に展覧会という形をとった。各県支援センターからアーティストを推薦いただき、作品を出展してもらうというものだった。展覧会を開催してみると、ご家族や、利用する福祉施設の皆さんと、県を越えて展覧会場に足を運んだアーティストが多数居た。会場で、鳥取県と徳島県のアーティストが出会い交流できたこともあった。この様な事例から、障害のあるアーティストにとって作品の発表機会創出もさることながら、本人同士の移動や交流の機会の創出も大切で、それを望んでいることも見えた。

企画1

ふらっとアート工房 AIR

（開催地：徳島県徳島市）

内容：10月1日に徳島市にある障害者施設「ふらっと KOKUFU」にアートセンター「ふらっとアート工房」が新たに開所した。その開所に合わせて、愛媛県、高知県、広島県、山口県から招聘したアーティストが滞在制作をするアーティストインレジデンス（AIR）を実施した。

企画2

あっぱーあーむのアトリエ

〜どげんなもんか一緒にやってみーだわね〜

（開催地：島根県松江市）

内容：普段は別々の福祉事業所で働く3人のメンバーによって結成されたアート活動グループあっぱーあーむ。彼女たちは福祉事業では取れ漏らしてしまいがちな文化的で緩やかな交流の実践を支援する側される側の関係なく開いていくことを画策している。多様な活動に取り組んでいる中で、一歩を踏み出せていなかったオープンアトリエの実践を2日間限定で行った。

企画1

ふらっとアート工房 AIR

主催：	社会福祉法人 徳島県社会福祉事業団 ふらっと KOKUFU
共催：	中国・四国 Artbrut Support Center passerelle（パスレル）
協力：	徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター
作家推薦協力：	愛媛県障がい者アートサポートセンター、広島県アートサポートセンター、山口県障害者芸術文化活動支援センター、薬工ミュージアム 分室
滞在作家：	窪内 陽之（高知県）、嶋田 浩伸（山口県）、中曾 雄斗（広島県）、利藤 大貴（愛媛県）
内容：	中四国各県から推薦されたアーティストが、ふらっとアート工房で滞在制作する。地域での体験やふらっと KOKUFUの利用者との交流、他県アーティストと、ふらっと KOKUFU利用者の幅広い交流を育む。
目的：	障害があるが故に県を越えたアーティスト同士の交流がとてもしないという課題に対する取り組みである。

目標：	徳島の地域資源に触れ、感じ、いつもと違う環境での制作を体験する。アトリエでの共同制作を通じて、互いに刺激しあう仲間ができる。中国四国地域の中での先進事例として、多くの人たちに可能性を拓く機運を醸成する。
-----	---

滞在制作期間：2025年9月29日（月）～10月1日（水）の2泊3日

AIRとは「アーティスト・イン・レジデンス」の略称で、芸術家が一定期間、特定の場所に滞在し、創作活動を行う取り組みで、世界各地で行われています。普段とは違う環境に身を置くことで、新たなインスピレーションを得たり、地域の人々と交流したりする機会が生まれます。作品制作に集中するだけでなく、地域社会とアートを結びつける役割も果たします。今回の取り組みは、障害のあるアーティストの方々から県を越えたアーティスト同士の交流や徳島ならではの地域資源、いつもと違う人たちとの交流機会を育む目的で企画されました。私どもの様な障害者芸術文化活動普及支援活動では、ほとんど先例の無い新しい取り組みでもあり、今後、障害を持つアーティストにも AIRの機会が広まっていくことを期待しています。

◎1日目ー9月29日（月）

15:00	ふらっと KOKUFU 交流スペースに参加アーティスト集合
15:30～16:30	自己紹介タイム、ガイダンス、おやつを食べながら歓談
16:30～17:30	作品制作の準備、制作
18:00～	宿へ移動



徳島駅でアーティストを待つパスレル平谷



作品を説明する利藤氏と質問する窪内氏

自己紹介で各自が持参した作品の説明をした。



空間に拘り制作準備をする中曾氏

他作家と同居で良いアーティストと、個室を望むアーティストと様々。中曾氏は制作場所も滞在先の宿も個室を希望。この様に、本人からしっかりと希望を伝えてくれるとコーディネーター側も対応しやすいことがわかった。



集合したアーティストと関係者

徳島までの長時間の移動を労いながら、手土産の交換をしたり、作品の話をしたり、すぐに打ち解けた様子。

●2日目ー9月30日(火)

- 9:30 ふらっとアート工房集合
- 10:00 バスツアー出発(ふらっと KOKUFUの利用者の皆さんと一緒に)
- 11:00 見学：渦の道(渦潮見学)
- 12:20 昼食：道の駅くるくるなと レストラン
- 14:15 ふらっとアート工房に到着
- 14:30～16:15 作品制作
- 16:30～18:30 交流会：バーベキュー、ふらっと KOKUFU 庭にて
- 18:30～ 宿へ移動



渦潮見学のアーティストたち

自然環境の条件によって渦潮がはっきり見えたり見えなかったり。それもこれも全部楽しい。



2台のバスでの小旅行に嬉しさがしみ出るバスレル岡村

ふらっと KOKUFU 中のワーク & デイ ラクリエの利用者さんと職員さん全員と一緒にバスの旅。渦の道の駐車場に到着してから入館までも、道を間違えたり、大きなアップダウンの連続だったり、ゆっくりゆっくり楽しみました。



くるくるなとで昼食

道の駅「くるくるなと」で昼食タイム。大人数での昼食で、配膳されていたメニューの取り違えなども発生。人によってはレンチンしないとご飯を食べれない、こだわりの土産を探したいなど、いろいろありすぎてバスレルもテンションが最大に。



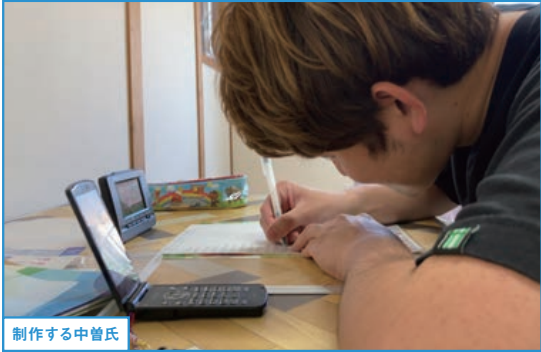
制作する利藤氏

渦の道で見た船だろうか、カラフルな表現で描き始める。



制作する窪内氏

絵の具を流す技法が複雑な潮目を彷彿させる。



制作する中曾氏

歌を口ずさみながら地理や数字をモチーフに緻密な表現に取り組む。



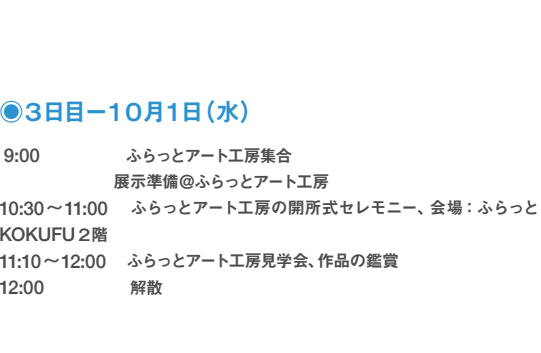
制作する嶋田氏

毛筆をペンに持ち替え実験的な書に挑む。



肉を焼く嶋田氏

バーベキューって結構忙しくて、それがまたいいですね。



制作する窪内氏



ふらっとアート工房開所式で紹介される AIR 参加アーティストたち



ラクリエのアーティストも制作

開所式後の公開制作では、ラクリエのアーティストも一緒に制作しました。



うたを披露する中曾氏

バーベキュー会場で童謡「すうじのうた」を踊りをつけて披露。夜空に手拍子が鳴り響いた。



プレゼンする窪内氏

開所式に出席されていたフォーマルな方々にも全く物怖じせずに解説する高校3年生の窪内さん。

ふらっとアート工房 AIR 報告展

主催： 社会福祉法人 徳島県社会福祉事業団 ふらっと KOKUFU
 共催： 中国・四国 Artbrut Support Center passerelle(パスレル)
 協力： 徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター
 滞在作家： 窪内 陽之(高知県)、嶋田 浩伸(山口県)、中曾 雄斗(広島県)、
 利藤 大貴(愛媛県)



展示風景



報告展チラシ



滞在初日にキャンバスに描いていた「麒麟とかめ」の完成作品



AIR 参加後に広島県で開催された「あいサポートアート展」で銅賞を受賞した作品です。



滞在中に制作した「銀河系」と、自宅アトリエで制作した近作「ハワイの海」です。



滞在中に制作した「我」と、第30回山口県障害者芸術文化祭最優秀賞(山口県知事賞) 受賞作品「誠至」です。

ふらっとアート工房 AIR 参加者 振り返り座談会

〔進行〕	〔参加アーティスト〕	〔参加アーティストご家族〕	〔運営メンバー、センター〕
土谷享 パスレル	窪内陽之 高知県推薦作家 嶋田浩伸 山口県推薦作家 中曾雄斗 広島県推薦作家	窪内智一 中曾ひろみ	岡村忠弘 パスレル 西木正 徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター 武居ひとみ 山口県障害者芸術文化活動支援センター



みんなに質問をする土谷享



少し眠たげな窪内陽之さんと、自宅での制作の様子について話す父の智一さん

土谷 あっという間に2ヶ月が過ぎてしまいましたね。AIR参加の後、最近の皆さんの活動報告をしていただけますか？

窪内智一 うちの方は、相変わらずのほんとと絵画教室に通いながら、時折、家で制作をしている感じです。最近ではポーリングアートといって、流し絵とはちょっと違う技法に取り組んでみました。絵の具を溶いた液体をカップに入れて、その上にキャンバスを置いて、いちにのさんでひっくり返して絵の具を広げていく技法です。

嶋田浩伸 第39回障害者による書道・写真全国コンテストの書道部門で銀賞を受賞しました。あとは、七福 art Award「こだまアートのストリート2026」に出品しています。アートレンタルなどの事業をしているところです。知り合いから出してみないかと勧められて出品しました。

中曾雄斗 僕の好きな『かず・たべもの・とどうふけん・ひらがな・カレンダー』シリーズで銅賞です！

中曾ひろみ 広島県が主催のあいサポートアート展に、徳島のAIRに出かける前に応募しておいたところ、帰宅したら銅賞のお知らせをいただいて、大喜びしました。出品作の内容は大好きな数字と食べ物や都道府県を絡めて描いたものを、利用しているB型作業所の支援者さんに協力してもらいながら屏風状につながる様に仕上げました。

土谷 みなさん元気に活躍されてますね！今回の座談会には出席できなかった利藤大貴さんは、「フラワーアレンジメント」という作品で愛媛県美術会主催の第74回秋季県展版画部門で美術会大賞を受賞されたそうです。西木さん、ふらっとアート工房はその後、どのような活動をされていますか？

西木正 施設利用者を中心に週3回、制作の時間を作っているようです。活動を始めてみて施設の職員さんが驚かされているのが、これまでは全く絵を描いたりすることがなかった利用者が、ふらっとアート工房に来ると、なぜか突然、絵を描き始めるんです。それがまた可愛い猫の絵でして。それをきっかけに、彼女は大きな絵の制作にも取り組んでいます。それは東京に行った時の思い出を、どんどん描き始めて、これもまた、周りのみんなが驚いています。なので、環境や工房の雰囲気が、彼女の創作意欲を引っ張り出したというか、私もその現場に偶然居合わせたのですが、そんなびっくりした出来事がありました。やっぱり場所ってというのは重要だなと感じました。日常を過ごしている空間と、アート工房とのちょっとした移動とかも気持ちの切り替えにつながるのかもしれないですね。

土谷 おー、それは大きな変化ですね。この座談会に出席いただいているみなさんは創作場所とかアトリエとか持っているのかしら？

窪内智一 はい、家の裏に借家で貸していないところがあるので、その一部屋をアトリエがわりにしてます。電気も引っ張っていないので、明るい時間しかできないのですが、作品の保管場所も兼ねたりもしています。そこへ行くと、お絵描きモードになりますね。

嶋田 自室でやってます。自分で準備することも、家族に準備を手伝ってもらうこともあります。書道の先生が土曜日の16：30から家に来てくれるので、その時は書いてますし、自分だけで書く時もあります。

中曾ひろみ あいサポートアート展で入賞した作品が2026年のカレンダーになりました。みなさんみてください。

土谷 はい、みなさんありがとうございます。みなさん制作する場所がある様ですね。では次の質問ですが、今回AIRに参加していかがでしたか？



銀賞受賞作品の説明をする嶋田浩伸さん

窪内陽之 とても楽しかったです。

土谷 いつも家でやっていることと、今回の徳島でやったこととの違いって何？

窪内陽之 いつもと周りが違ってたし、あのアート工房はもともと一軒家だったから。

土谷 もともと一軒家だった建物をアートセンターに改装したという部分に興味があったかな？

窪内陽之 はい

嶋田 いつもと違って色々な人がいる中で制作したので、いつもと感覚が違って良かったです。またこういう機会があったらぜひ参加したいです。

中曽雄斗 楽しかったです。渦潮とか、たとえば、ふらっとアート工房、ふらっと KOKUFU、鳴門海峡、バーベキューも。あとは、JR 徳島のクレメントホテルの個室に泊まれて楽しかったです。

土谷 ゆうとさんは、一人暮らしがしたいんですものね。

中曽雄斗 また会いましょうね！



AIRの可能性と手応えを話す西木正さん



AIRの発展系について妄想する岡村忠弘



パラスポーツのことについて話す武居ひとみさん

土谷 こういった試みを広げていきたいですが、参加してみて、運営側へのアドバイスとかをお願いします。

窪内智一 宿の確保のことがあるので、もう少し早く声掛けがあると良かったなと思います。今回は平日でしたが、これが、週末を挟むと難しいかもしれません。鉄オタなので、朝に歩道橋から眺めて鉄道が走るのを見届けてからふらっとアート工房に行ったりしました。

嶋田 四国は初めてで、徳島駅の周りもすごい都会で、楽しかったです。

土谷 店とか食べ物とかたくさん調べてたよね。

嶋田 葡萄饅頭も買えましたし。葡萄饅頭は知ってましたか？

土谷 浩伸さんに教えてもらうまで、実は僕は知らなかったんですよ。

西木 徳島では有名な饅頭なんですよ。団子みたいなのになんて饅頭なのかとか、面白いですね。

中曽ひろみ AIRはすごく楽しくて、新しい方に会うのも大好きだし、新しいところに行くのも大好きなので、本当に参加して良かったです。帰る道中も帰った後も、ずっと楽しかったね楽しかったねって言って。その後、テレビで四国が映ると今まで以上に気にしていて、次はあそこに行きたいとか、四国を身近に感じているなど思っています。

土谷 県の支援センターにもギリギリのオファーになってしまいましたが、武居さん、アドバイスお願いします。

武居 山口県で1人しか行けないという限られた選択肢で誰を選ぶかっていうのはやっぱり悩みました。時間のない中で、浩伸に打診したらすぐに「いきます」っていつもの感じで返事をくれたので前に進めました。案内が早いにこしたことはないのですが、宿泊や移動のことを考えなければならないので、いずれにせよ、アクセスや宿泊などは悩むと思います。特に中四国は車社会で、駅出た後の移動とか難しいので。今回は、送迎をしていただけたし、至れり尽くせりしてくれたので、準備期間が短かったけどクリアできたなって感じました。もし、山口県で開催できた時には事務局としてどこまでできるかなっていう部分は考えさせられました。

土谷 武居さんはスポーツの大会など、アートの活動以外でも全国飛び回っておられますが、他の分野だとどんな感じで進めていくのでしょうか？ 競技会などの参加のご経験から参考になりそうなことがあれば教えていただきたいです。

武居 やっぱり、アスリートは全責任が自分にあります。もちろん旅費とかも全く出ない。ランキングを積んでレベルが高くなれば違いますが、やっぱり、自分で調べたり、連絡をしたりして、福祉タクシーとか、自分の電動車椅子とかでひたすら足を運んでいくっていうのが大前提になるんですけど、大きい大会に行けば、改札を出るとブラカードを持った人が待っていて、会場とピストン送迎をしてくれる大会もあります。この AIR はすごく親切丁寧でした。スポーツは基本的に放置ですね。



元氣よくみんなに挨拶をする中曽雄斗さんと、見守る母のひろみさん

西木 私から一つ、みなさんにお聞きしたいのですが、今回はホテルに滞在いただきましたが、ふらっとアート工房には、キッチンもシャワーもトイレもありますし、あの建物で寝食を共にできる様な設備はあるのですが、もしあの空間で、ご家族どうして集まって、自炊で2〜3日過ごすっていうことはどうでしょうか？

窪内智一 そうですね、今回はみなさんホテルも別々で、やっぱりそういった意味では皆さんとお話する機会が少なくともあったということはあるので、同じところに宿泊して交流を深めるという意味では良いと思います。ただ食事ってなってくると、それぞれ違ってきたりとか、自炊だと私自身は雑なものしか作れないのでどうかなっていうのはあります。

土谷 はるゆきさんは、ふらっとアート工房でみんなと一緒に過ごすっていうのはどうでしょう？

窪内陽之 あーちょっと、他人のいびきがうるさいからなあ。

土谷 なるほど、いびきが気になるんだ。浩伸さんはみんなと一緒に過ごすのはどう？

浩伸 僕はベットがないと難しいんです。それができれば行ってみたいです。

土谷 ゆうとさんはどう？

中曽雄斗 僕は一人暮らしがしたいです。

土谷 あーなるほどね、今回はホテルも個室だったもんね。

西木 みなさん、いろんな視点からのご意見ありがとうございました。

土谷 西木さん、今後、ふらっとアート工房で AIR をしていこうという機運はありますか？

西木 非常にあります。ふらっとアート工房の運営母体の社会福祉法人も場所の魅力も感じられるし継続してできないかという意見があり、さまざまな条件が整えば、継続に取り組んでいけるかなと思っています。交通とか宿泊とかハードルはいくつかあるんですが、前向きに考えています。

岡村 浩伸さんがさきほど教えてくれた、ベッドがあれば行けるよとか、とても参考になりました。今回は手探りで準備して、合理的配

慮やみなさんへの安全性に配慮して、どうしたらいいか考えた末に、ご家族にも同行いただいたりしました。例えば、私は高知の山奥の村で育ったんですけども、高知市内に出てきたときには最初胸が高鳴ってこんなに楽しいところがあるのかと感じたんですが、そういう高鳴りも回数を重ねるうちに退屈になってきたりすることもあるかなと思うんです。AIRの運営の話に戻すと、最初はご家族と来るベーシックコースで、だんだん回数を重ねるうちに、マスターコースとして1人で移動してくるコースとか、そういった先の展望を支持っても良いのかもしれないですね。

土谷 なるほど、浩伸さんや雄斗さんの様な自立していく気持ちが強いアーティストにとって良い提案ですね。今回の様な AIR 事業の最終目的地としてはアーティストが社会参加できる、自立につながる、という部分はやっぱり大きいのだと思うんです。ご家族も含め支援している側としては心配な部分もあると思いますが、それをどう手離れさせていくかっていうのも大きな課題でもあり、やりがいのある目標だと思うんです。AIRの試みが、そういったことの近道を作っていけるかもしれないです。再び武居さんに聞きたいのですが、スポーツ選手って会場までの移動は1人で来るんですか？

武居 そうですね、ま、障害にもよるんですけども、私がやっているボッチャは、最重度のパラリンピック種目と言われるくらい重度の選手が多いです。その中でも1種1級の最重度の車椅子選手だけでも、ボッチャの中では軽いと思われる選手は1人で来たりします。もちろん言語障害があっても道を聞いたり、助けてもらうために声をかけられる選手は何とか駆使して会場に来ます。衣食住支援が必要という選手も半分くらいいるので、その選手はどうしても誰かついてきたりします。自立のための試みとしては、全旅程ではなくて途中の目的地を決めておいて、そこまでは1人で来て合流して移動するとか、そういう自立を促す様な移動のさせ方は、アスリートになればなるほど、こちらから仕向けるとかあります。飛行機乗るくらいは1人でできるでしょとか。でもやはり、座位が取れない選手とかは命に関わるので1人で行かす様なことはしないとか、そういう感じです。

土谷 なるほど、その匙加減に学ぶべきヒントがたくさんありそうですね。今度、時間をつくって、もっとお話聞かせてください。今回、みなさんのお話を聞いて思ったのは、アーティストインレジデンスの拠点が、中四国の中の複数の地域にあれば、今回の AIR は自分の住んでいる場所から近いから初めてだけ参加してみようとか、今回は遠いけど1人で行ってみようとか、アーティストのチャレンジの多様な深度に応えられそうですね。そういう機運が中四国中心に立ち上がってくるといいですね。

(2025年12月26日 オンラインにて)

オンライン座談会への出席ができなかった 利藤大貴さんとお母様の恵子さんへのアンケート回答

1. 最近の活動と作品づくりについて

座談会では、まず皆さんの近況を報告しました。

Q：[大貴さんへ] 第74回秋季県展での「美術会大賞」受賞、誠にありがとうございます！受賞された時のお気持ちや、最近の制作の様子を教えてください。

A：とても嬉しかったです。先生からもおめでとうと言ってくれました。これからも頑張ります。

Q：[大貴さん・お母様へ] 大賞を受賞された「版画」について、詳しく教えていただけますでしょうか。

A：一年前の県展の移動展に知人からお花（フラワーアレンジメント）を頂き、とっても綺麗なのでこれを版画にしてみようと描き始めました。たくさんの花をいろんな色で大貴のいつもの版画になりました。大貴は蝶々を2匹飛んでいる様子も描きました。生命も入れたみたいです。

Q：どのような技法で、どのような手順で制作されていますか？（彫り、刷りのこだわりなど）

A：一般多色刷り木版画です。下書きを版板に写し、それを彫刻刀で彫って行きます。大貴は細くあまり深くは彫らず細かく細かく仕上げました。次は刷りの工程です。いろんな色で一つ一つ色を重ねて行き満開の花らしく咲かせました。

バックのははじめは明るい色にしてましたが、トーンを落として上部は紺色で下はピンクとイエローに仕上げました。

Q：1つの作品を仕上げるのに、平均してどのくらいの時間がかかりますか？

A：県展に出す作品でしたら版板を彫り上げるまでを家で仕上げます。日曜日など頑張って10日間ぐらいです。色を刷り上げは月4回×3時間半で約4か月。小さな作品なら1か月からです。

Q：[お母様へ] 受賞後の周囲の反響や、大貴さんの最近の制作の様子はいかがでしょう。

A：大貴を知っている人はとても喜んでくれました。お母さんのサポートがあつての受賞だとも言って頂きました。大貴は作品作成にはとても時間がかかります。コツコツと自分のペースで作成していますがこれが大貴の作品の形だと思ってます。性格もあるので見守ってます。

2. 制作の場所・環境について

「場所が変わることで創作意欲に変化があるか」というテーマで話しました。

Q：[大貴さんへ] 普段はどこで作品を作っていますか？（自宅、作業所、自分の部屋など）

A：下書きなどは家のリビングのいつも座っている大貴の場所、後は教室の大貴の机です。

Q：[大貴さんへ]「ここに行くとスイッチが入る」というような、お気に入りの場所や決まったルーティンがありますか？

A：うーん教室の机かなあ（うーん）



利藤大貴さんの制作準備の手伝いをする母の恵子さん

3. 徳島でのAIRに参加してみた

徳島での滞在を振り返って、率直な感想をお聞かせください。

Q：[大貴さんへ] 徳島での制作は楽しかったですか？いつもの場所で作るのと、徳島の「ふらっとアート工房」で作るのとでは、何か違いを感じましたか？

A：楽しかったです。場所が変わったら戸惑いがありました。

Q：[お母様へ] 滞在中の大貴さんのご様子で、印象に残っているエピソードがあれば教えてください。

A：ホテルに泊まり旅行気分でも楽しそうでした。絵の作成はいつもの場所ではないのでどうしたらいいか不安そうでしたが、マーカーで描き始めたら一気に描き上げたのにはビックリしました。

4. 運営へのアドバイスと今後の展望

より良いAIR事業にしていくなめのご意見を募集しています。

Q：[お母様へ] スケジュールの案内時期や、移動・宿泊のサポートについて、改善してほしい点や「もっと早く知っていれば調整しやすかった」と思うことはありますか？

A：ホテルの件ですが、何処に予約を入れたらいいか分からなくてクレメントにしましたが、後で聞いて夜こんな事したりとか？と考えがあつたみたいなので、初めから分かっていたらみんな夜もお話しが出来たと思います。移動はお世話になりました。

Q：[お二人へ] 今回はホテル宿泊でしたが、もし「ふらっとアート工房」のような設備（キッチン・シャワー完備）のある施設で、他の家族と自炊しながら数日間共同生活をするとしたら、参加してみたいと思いますか？（不安な点や、必要な条件があれば教えてください）

A：参加出来るとは思いますが、少し家族だけになれる時間も欲しいです。

Q：[お母様へ] 将来的に、ご家族の付き添いなしで、大貴さんがより自立した形で参加できるようなプログラム（移動の一部を本人が担うなど）について、どう思われますか？

A：家族から離れる事がほとんどない状態ですが、家族に頼る事なく担当の方に聞きながらできる事の参加をお願いしたいです。

アーティスト・イン・レジデンス事業の振り返りと展望

【進行】

土谷 享	バスレル	松岡陽子	ワーク&ディ	ラクリエ	管理者兼サービス管理責任者
		西木正	徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター	統括専門企画員	
		岡村忠弘	バスレル	センター長	
		北添紫光	バスレル	コーディネーター	
		平谷尚大	バスレル	コーディネーター	

イントロダクションと事業の費用規模

土谷 本日は、ふらっとアート工房 AIR 報告展の最終日ですね。ふらっとアート工房の柿落としに合わせてAIRを実施したわけですが、あれから3ヶ月半ほど経ちましたが、アートセンターとしてとても素敵な場になってます。さて、今回の座談会は運営側のスタッフによる、運営についての振り返り座談会です。この座談会の目指すところは、もちろん徳島県で今後もアーティストインレジデンスが続いていくと嬉しいという部分と、中国・四国エリアで、私たちもやってみたい、やってみようと思ってくれる人が出てくるといいですね。今回の事業は、主催がふらっと KOKUFU、共催がバスレルと徳島県のセンターでした。アーティストインレジデンスの主な費用負担はバスレルが担っておりましたが、まずは、松岡さんが気にかけている事業にかかった経費についても共有しておきましょう。今回の規模でいうと、アーティスト3名と同行者を含めた計6名で、交通費が約15万円、宿泊費が約10万円。これに制作費、日帰り旅行の入館料や茶菓子代、歓迎会の予備費、報告展の作品の運送費などを含めると、全体で30万から35万円ほどあれば実施できる計算です。徳島はまだ宿泊費がそれほど高くないので予算を抑えられますが、これが東京や他の都市だと難しくなりますね。宿泊先については、お遍路の宿なども検討しましたが、トイレの仕様や電子レンジの有無など、障害のあるアーティスト側の細かなニーズに合わせて調整する必要があります。まあ、40万円ほどの予算があれば、今回の規模のアーティストインレジデンスが実施できるんじゃないでしょうか。

アーティストの選定方法

西木 予算のことはわかりました。今後、大きなネックになってくるのはどのようにアーティストを選考して招くか、ということだと思っています。

岡村 今回のアーティストインレジデンスでは、当初は3名のアーティストを呼ぼうと考えていましたが、中四国の各支援センターに声掛けしたら4名の推薦が来たので、予定よりプラス1名でも予算的にも労力的にも問題ないのではないかとということで4名のアーティストを招聘しました。

土谷 アーティストの呼び方については、二つのスタンダードなやり方があります。一つは「オープンコール(公募)」です。主催者側が



ふらっとアート工房での制作後のアーティストたち

純粋に興味深いアーティストを選ぶのでも良いし、目的があっても良いです。目的がある場合、例えば地域資源の発掘や地元産業とのコラボなどを提示し、応募者の中から審査で選ぶ。もう一つは、主催者がアーティストを選んで直接声をかける形式です。これは主催者がこの事業で何を達成したいかという明確な目的がある場合に有効です。今回は中国四国ブロック支援センターのバスレルが音頭を取って中四国内各県の支援センターを通じて推薦を受けましたが、これはこの事業が中国・四国ブロックの共同企画事業という性格によるもので、バスレルが中間支援組織なので今回のような方法になったわけです。目的は、障害があるが故にこれまでなかなかできなかった県を越えた障がいのあるアーティスト同士の交流と、一緒に制作をすることです。これをまずは中四国で実現したかった。

岡村 でも次年度に徳島で西木さんたちが続けていこうとするならば、声かけするアーティストを中四国に拠点を置いていることを限定する必要もないですし、全国とか、あるいは、海外から招聘でも全然いいと思うんです。

西木 徳島県のセンターとして実施していく際には、県内の受け入れ先の施設も必要になってくるので、次からはセンターが単に仲介するだけでなく、受け入れ先になる事業者さんが自ら手を挙げて、どういう条件で選考していくか、その条件の合うアーティストを呼ぶという2段階、3段階のフィルターが必要になってくるかもしれません。なので、選考委員会が必要になると思っています。

安心感の提供

岡村 主催者側がアーティストを目的に沿ってどのように選ぶか、ま

たそのプロセスをどうするか、ということの重要さも大切なのはわかるんですが、障害のある方をレジデンスで受け入れる際、今回はコーディネートを土谷さんが間に入ってやってくれました。参加するアーティストのお母さんが不安で事前に徳島まで下見に来たという方もいらっしゃいましたし、また他のアーティストには、電子レンジもあるし洋式トイレもあるから大丈夫だよ、と、その要望に応えたりするとか、細やかに安心感を担保してくれたことが、来るアーティストも受け入れる施設にとってもハッピーな状況を作る成功の大きな要因でもあったと思うんです。そのコーディネート有谁が行うのかも重要です。そのあたりの難しさってありますか？

土谷 難しいっていうか、アーティストインレジデンスという文化がないと、アーティストにも受け入れ側にもこのようなコーディネートの文化もないので、お互いにそのわからない部分からくる不安があったと思いますね。さらに、県から選ばれちゃったよという緊張感とか、負荷に感じる要因はあったと思いますよね。私の役目としては、そこをそんなに構えなくていいよとか、そんなに緊張しなくていいよとか、こっちからの姿勢でそれらを解いていく必要はあったと思いますよね。事前に私が直接連絡を取り合ったアーティストは4名のうち3名で、山口県の場合は山口県支援センターの武居さんが間に入ってやり取りしてくれました。障がいの傾向や特性を充分把握していた武居さんがそのようにしてくれたわけです。

松岡 最初は、ふらっとアート工房の近くの遍路宿で大丈夫だろうと思っていましたが、実際にはトイレや電子レンジ、ベッドの有無など、身体的な障がい特性や、その方にとって無くては困るものがあって、当初に思ってもいなかったことがいっぱい出てきましたね。

他の職員への共有の難しさ

土谷 それから、アーティストとの連絡や意思の確認、要望のキャッチアップなどのやり取りについては、山口県の方以外はご家族が間に入って来てました。アーティストご本人は障がい特性によっては直接のやり取りが難しかったからです。また、日中は就労支援事業所を利用していたり、親御さんもお勤めの方が多いので、やり取りがどうしても夜間や休日になりがちでした。なので、現場職員の勤務時間との兼ね合いが難しいのではないかとという課題も見えました。今回実施してみてわかったことも多いので、たとえばメールのやり取りなどは、すぐに返信するのではなく、返信は翌日の勤務時間帯以降になりますとか、次回からは事前に伝えておけば良いことかもしれないので、今回はとにかくやってみようという姿勢でしたが、ここで見えてきたことは次回に生かしていきたいですよ。

松岡 どうしても勤務時間外の対応が増えますよね。報告展も10日くらい実施するのに土日は施設の営業日ではありませんでしたが、より多くの方に見てもらいたいと思ったから、開けました。私はやりたいと思ったからかまわないのですけれど、こういうことを他のスタッフに受け渡すときにどのようにしていったら良いのか悩むところになりますね。今回の報告展くらいの規模であれば、私一人でも接客などの対応が可能でしたが、今後規模が大きくなると複数のスタッフで対応していかなければいけないので、今後の課題にはなってきますね。



報告展では、ラクリエの利用者の方々の作品も展示

平谷 報告展にはどんなお客さんがいらっしゃいましたか？

松岡 報告展に来場されたのは、福祉関係者の方、ご家族、アート好きの方が中心でした。アート工房周辺のご近所さんにもチラシとかポスティングはしましたが、あまり来られなかったですね。

西木 私が受付していた時に、福祉施設の文化芸術担当支援員の方が、今回の展覧会について掲載された新聞記事を片手にいらっしゃって、「今うちの事業ではこういったことに困っていて」とか、展覧会を覗にくるというだけでなく、いろいろな悩みを共有したくて来てくれた人もいました。施設内では孤立しがちになってしまっていて、先ほどの松岡さんのお話にもあったような、他の職員との共有とかにやはり悩んでおられて、「こちらではどのようにされてますか？」とか30分くらいずつ悩みを聞いたりして対応しました。皆さんも、悩みや情報を共有したいって思っていて、そういう方が何人かいらっしゃいました。福祉の現場から見ていると、表現というのは「完成された作品」を展示することだけではないと感じます。誰かがそこに居ること、何かに触れること、その過程そのものが文化なんですよ。

現場の職員が「知っている」だけでなく「心が動く」経験をどう作るか

岡村 さきほど松岡さんがおっしゃっていた「私はやりたいからいいんだけど」という気持ちのことですが、それを法人全体で考えたときにはみんながそういう気持ちを持っているわけではないし、勤務の問題もありますよね。今年度、もう一つのアートデリバリープロジェクトで関わっている島根県松江市を拠点としている任意活動団体の「あっぱーあーむ」さんをみると、全然そんなことなく、メンバーの3人がそれぞれ同じ方向も向いてないし、やりたいことがとっ散らかってるし、でも向いている大きな方向は一緒というか、特に強い想いがあるわけでもなくて「あ〜なんか、こんなあったらいいよね〜」くらいの浅はかな感じで、彼女たちを見ていて気がついたんですが、僕は今まで法人全体が同じ方向を向いていなければならないとか、一枚岩でなければならないって思っていた部分もあるんですけど、全然そうじゃなくていいんだって最近考えてます。普段からみんながバチっと同じ方向を向いているわけではなくて意見も全然まとまらないんですけど、現場に入るとバババっと進み出すというか、そんな感じでいいんだって、常に方向性が一緒じゃなくても全然いいんだって思うんですよ。こうあ

るべきだとか、みんながそれに対して思いを注がなければならないということではなくて、でも、あっぱーあーむさんのメンバーはみんな施設の利用者さんや障がい当事者の方々のことは大事に考えていて、そこは揺るがないんです。そこは揺るがないんだけど、たとえば山登りに例えると、「こっちのルートの方が楽しいよね」って1人が言い出すと、他の人もあーほんとだほんとだってバーって動き出す、みたいな感じで、バラバラでもバラバラの良さがあるなって最近思ってます。

平谷 でも法人の中で1人ですと難しいから、2人か3人くらいはいい方がいんですよ。あっぱーさんみたいに何人か引っ張る人がいて、その下にバーってついてくる。1人ではしんどいですよ、だから徳島県支援センターとしての西木さんいますしね。

土谷 利用者さんと職員という関係性だけではなくて、ふらっとアート工房もできたことで、地域に向けた文化講座やギャラリー展示を定期的に開催し、町の中に理解者を増やしていくことも法人の大切な役割です。実際、地域の方向けの講座には福祉関係者以外の方も多く集まりますし、こうした活動が社会移行への一歩に繋がるはず。その中から一緒に活動する仲間も見出せるかもしれませんし、地域の中に障がいのある方への理解者を増やしていくという活動も法人の役目としては今後必要になってきますよね。月一回とかでもよいので、地域の方々も参加可能な講座を夜間とか地域の人も来やすい時間帯に開催していくとか、法人内ではそういうことを勤務時間として位置付けてもらったりする動きもあるといいですよ。

松岡 インスタなど SNS も活用していきたいですよ。

西木 ふらっとアート工房というアートセンターは、ふらっと KOKUFU の中でも主にワーク&デイ ラクリエの生活介護事業で活用していますが、今回、展覧会も開催したことで、法人の中の他の施設、たとえば放課後等デイサービスの職員さんが子供たちを連れてきてくれたりとか就労 B の職員さんがみんなと来てくれたりとか、普段、交流のない人たちも来てくれたりとか、まずはこのように来てくれることによって、アートセンターってこういうことしているんだって改めて理解できるし、認識も深まりますよね。

岡村 なるほど、ふらっと KOKUFU の様な規模の大きい施設ではそういう事もあるんですね。福祉施設のルーチンに近い業務の中で新しいことやろうって思う方が難しく、私の場合は外に出て刺



施設全員参加で渦潮を見学

激をうけて何か発想が出てきたりしますが、アーティストインレジデンスでは、外からのアーティストを迎え入れる形で刺激や新しい経験が起こる。慣れ親しんだ自分の施設の利用者さんへの合理的配慮ではなくて、迎え入れる障がいのあるアーティストさんへ想像力を駆使して配慮していくこともとてもよくて、難易度はとても高かったですけど、今回のアーティストインレジデンスでは達成感がありました。今後、様々な事業所とも繋がるといいですね。

平谷 職員の方がアート事業をやってるっていうことを情報として知ることだけではなくて、感動したり心が動かないと乗ってこないと思うんです。私たちの法人に照らしたときに、私や岡村は外に出て刺激を受ける機会も多いのでアイデアもどんどん出るんですけど、私と岡村が外に出ているときに事業所を守ってくれている他の職員は、知っている外の状況はあるけど、心が動く経験が少ないので、新規の取り組みなどについてはなかなか乗ってこない部分もあると思うんです。だから、障害福祉の事業でも何か仕掛けとしてやっていかないといけないというのは思います。机上の研修とかではダメなんですよ。

岡村 だからアートとかが合理的だと思うんです。アーティストインレジデンスにアーティストに来てもらって、みんな達成感を味わえる仕掛けを作るといいですよ。でも、もしかしたら、青い空（パスレルを運営する事業所）でこの事業をやったら、私と平谷がどんどん動いちゃうと思うんですが、それじゃダメなんですよ。一頻り終わって私が他の職員に「めっちゃ良かったよ〜!」って言ったってしらせるし逆効果ですよ。本人が感動してなければ、それは単なる「良かったよハラスメント」になってしまいますから。

西木 よかはら！初めて聞きましたよ〜！

岡村 良かったよ〜ハラスメントになるので、そこをアップデートしていくには、県が福祉施設の研修にアーティストインレジデンスを入れるとか、最終的なゴールとしてはそこまで巻き込みたいなと思っています。そのくらい、私は今回、感動しました。

西木 アートデリバリーっていう、この発想自体がアーティストインレジデンスとすぐつながっていると思うんですよ。たとえば B 型の事業所を利用されている方々に、このような機会ってほとんど無いと思うんです。自分が仕事している場にアートやアーティストがデリバリーされて、利用者さんのみならず職員さんも、すぐそこで体験や経験ができるっていう、すごいお得な企画だと思います。

ご家族の関わり方やマインドセットについて

平谷 あと、ご家族の方の関わり方で介入というか、コーディネートした方が良いかなと思いました。例えば今回の滞在アーティストでも制作するときに、ご家族の方が全部の紙やキャンバスを用意したり、描き終わったら取り替えてとか、色も選んでいたとか、普段からそのようにやっているからそれで良いんでしょうけど、でも本人も出来ないこともないでしょうし、どこまで言って良いのか私もわからなかったし、こういったことのマインドセットを事前にご家族にも説明できてたら、どの水準でとか、どこまでとか、そういうルー

ルを決めておいても良かったなと思いました。どうですか？

土谷 大切なことだと思うけど、その合意形成やマインドセットを受け止れるマインドかどうか、ということになってきますよね。また、当事者の人たちも自分自身の権利に気がついてないということもありますよね。つまり、間違えたり、失敗したり、考えたりするという事もそこには含まれます。

西木 以前、山口県支援センターの武居さんが以前お話しされましたが、彼女が関わられている障害者スポーツの方ではこんなに手厚くないと。大会会場まで自分の力で行って、プレイして、自分だけで帰宅するのも当たり前だそうですね。そういうところの差ってなんですかね。

岡村 ”私たちは県から選ばれてお声がけいただいて、呼んでいただいてありがとうございます。うちの子が迷惑かけたらいけない！”っていうマインドセットで1日目に集まってましたよね、明らかに。主役は皆さんのお子さんたちなのに、そういうところから感じたのは、そうじゃなくて、迷惑かけても良いよって最初に言ってあげれば良かった。障害福祉でもよくあるんですけど、福祉を使う、のではなくて、お世話になってる、とか、そのように考えてる人もいて、そこまで立ち返って変える必要があるとも思いました。平等なんだよって言いたかったです。

土谷 やっぱり自律っていうことに関わるよね。障害者芸術文化活動によって自律を促していくような活動にしていけることも大切なんだと思うけど、周囲との関係性、周囲からの振る舞いかた、また、自分自身からそういう振る舞い方を求めちゃったりすることもあるとか、そういった関係性の再構築にもっていくようなデザインも必要ですね。

岡村 広島県の中曾さんのお母さんは、その関係性にたいする向き合い方が結構進んでいて、何も手出ししなくて良い感じでしたよね。でもその他の作家さんたちのことを考えると、私たちが設定したタイムスケジュールとか、もう少しゆったりとてあげれば、もう少し自律を養えたのかなと。もしかしたら忙しすぎて状況を把握できないまま過ぎていつちゃったアーティストもいたかもしれないなあと思いました。

平谷 アーティストとご家族や支援者の関係とか、丁寧に解いていくような時間に、このアーティストインレジデンスがなったら良いですよ。そうすると自律のきっかけも出てくるかもしれません。

土谷 アーティストインレジデンスに参加するモチベーションというか姿勢について、岡村さんが以前言っていましたが、ある程度ランクがあってもいいですね。第一段階はご家族や支援者が同伴、第二段階は家からレジデンスまで1人で来てみる、第三段階は何でしたっけ？

岡村 第三段階は、恋人同伴ですね。それともう一つ、私が思ったのは、3日目の別れ際に、お母さん同士でめちゃくちゃ LINE 交換とかしてたじゃないですか、あの様子

を見たときに、お母さん同士もこのような交流を求めてたのかもなと思ったんですね。お母さん同士だけの座談会も設定すれば良かったなあと、今思いました。こんなに繋がりを求めてたんだなあと。いろんな悩み事を話したりして、あるお母さんがあるお母さんに「そんなのほっといたら良いんですよー」みたいな声掛けとか、お母さん同士だからできるかなって。

北添 これって今まで記録や記述されていなかった領域ですね。当事者のお母さん同士の交流に意味があるって気がついて記録しようっていう研究とかあるのでしょうか。

岡村 そしたら、次回はお母さんたちの LINE をチェックさせてもらいましょうか。

西木 それはセクハラですよ。

岡村 でもやっぱり、最後の別れ際にお母さんたちが LINE 交換しているシーンはここに残るくらい良かったですよ。この良さ伝わるかなあ。

事業として続けていくために

土谷 このままではこの座談会全体が ”よかったハラスメント” になってしまいそうなので、もう少し実践的な話に戻そうと思います。松岡さんが抱えている悩みの本質っていうのは、このアーティストインレジデンスを法人内でどうやって事業化していくかということだったと思うんです。

岡村 事業化していくには、やはり予算取りは大変なことなのかな。4人招聘で40万円を予算化することです。その40万円を毎年事業化できる法人で、なかなかないと思います。主たる事業を回しながらこの事業もとなると、人員も必要です。障害者福祉の文脈で言うと、そんな余裕無いですというのが普通だと思います。松岡さん、施設の管理者としていかがでしたか。

松岡 アートセンターでの制作の時も、もう少しうちの利用者さんも参加してもらいたかった気持ちはあったのですが、やっぱり人員不足の課題がありましたね。バーベキューの交流会は夜だったので、勤務時間の面でも難しさがありました。職員には自由参加ということで案内したところ3名ほど参加してくれました。渦潮



AIR 参加者に感謝を伝える松岡さん

を見に行った時は、「全員参加にしよう」と思って利用者も職員もみんなで行ったのですが、かなり大変で私自身もいっぱいだった。今振り返ると、もう少し余裕のあるタイムスケジュールにしてあげれば良かったなと思います。昼食のマグロ丼とサーモン丼の取り違えのトラブルもありましたね。誰かをバスに忘れ忘れてしまわないかとハラハラしてました。

岡村 昼食の時の出来事は私にとってはトラブルではないですよ。「私のマグロ返して！」って、むしろ良いイベントでしたよ。松岡さん、ハラハラしていたことが全然あの時はわかりませんでしたよ。顔にも行動にも出ないところがすごいです。

松岡 職員もマグロとサーモンと区別がつかなかったの（笑）それに、実は全員で日帰り旅行に行ったのは初めてだったんですよ。

岡村 こういうイベントをやろうと言う時の現場職員への伝える時の難しさってありますか？

松岡 やはり、「イベントやるよ」と伝えと、現場の職員は「また忙しくなるのかな」と察して無言のプレッシャーのようなものを感じることはあります。ですので、役割分担をきちんと伝えたりすることに気を使います。でも多くの場合は、やってみると、「やって良かった」と感じる人が多いですね。ふらっとアート工房も、完成するまでは多くの職員があまりイメージできていなかった感じがしますが、実際に完成して使い始めると、理解が進みましたね。これまで絵をまったく描かなかった利用者さんが、アート工房に来ることですごく良い絵を描き始めたり、そういう変化も目の当たりにしました。やはり実際に体験してみないとわからない部分は大きいですね。

土谷 県外のアーティストインレジデンスに利用者さんにも参加してもらいたいですか。

松岡 参加してもらいたいですね。先日も、佐賀県で開催された展覧会に選ばれて出展するために利用者さんを連れて行ってきたんです。ふらっと KOKUFU の所属長もぜひ行ってきてと言ってくれるので、上司の理解がある職場だと感じています。

土谷 そういう文化が法人内にあるんですね。例えば、アーティストインレジデンスを法人内で続けていくために事業目的を説明するときに、松岡さんならどう伝えますか？

松岡 理事長には、対外的に法人の知名度が上がるという点を伝えてプレゼンすると思います。現場に向けては、他県で活躍されているアーティストを招くことで新しい知識やアイデアや感性に触れられる機会になると説明すると思います。でも、現場の職員さんは、私の説明だけではなかなか実感しづらくて。実際にやってみて感じてもらわないとわからない部分も大きいのではないかと思います。

岡村 一番は、利用者さんが楽しむための企画である事も忘れてはならないですね。招聘したアーティストも、ふらっと KOKUFU の利用者さんも楽しむ企画であったかどうか、ですよ。今回は、それはできてたと思います。

松岡 制作の様子も公開制作で見てもらえたので、法人内でもあまり交流がない施設同士の交流につながりました。それと、今回のアーティストインレジデンスについては、正直県外から本当に手が上がるとは思っていなかったんです。やりたいという気持ちは強く持っていましたが、実際に4人も来てくださって、本当に実現できて良かったです。

全国にアーティストインレジデンスを

土谷 来年度、高知県で全国障害者文化祭2026が開催されるんですが、バスレルとしてはそこでもアーティストインレジデンスを発表したいと考えていて、この機会に全国にやりたい人たちや施設を増やしていきたいと思ってます。障害のあるアーティストのためのアーティストインレジデンスという事業が今回口火を切れたことはとても大きな一歩だったと思います。そのためには、参入障壁を下げていけるようにしていきたいですよ。

岡村 けど、最初企画したときは大変そうだと正直なところ思ってたけど、やってみたら「できた!」「たのしかった!」ってなりましたよ。

平谷 作品の流通はこれまで全国にいろいろな事業はあったけど、アーティストが動くっていうのは今までなかったと思うので、新しいですよ。作品の移動だけでなく、ご本人たちが県をまたいで自由に行き来できる仕組みを作っていきましょう。

松岡 やっぱり今回は、土谷さんがコーディネートでしっかり入ってくれたから、それは大きかったですよね。

土谷 タスクを整理すれば、できると思いますよ。日帰り旅行やバーベキューなどの大きなイベントは松岡さんが段取りをやってくれたわけだし。最初は「本当にできるのか」という不安もありましたが、やってみたら楽しかったという手応えが何よりの成果です。今回のタスクを整理すれば、参入障壁を下げるためのヒントも見えてきます。松岡さんの方でも、この経験をアドバイザー的な視点でも活かしつつ、また次のステップに向けて動き出しましょう。

西木 今回、アーティストの選定は各県の支援センターからの推薦でしたが、結果的には、県の支援センターの関心や理解の度合いによって逆にフィルターになってしまった部分もあると思います。オープンコールにしたらもっとダイレクトに障害当事者から応募が集まるかもしれないですよ。でも、まだ障害者のアーティストインレジデンス事業の認知も広がっていない中でどのようところで募集を発信していくのが良いのでしょうか。

土谷 まずは、公募展とかと同様に各県の支援センターや文化施設などを通じて広報協力を依頼していくという方法が基本なんじゃないでしょうか。県の支援センターによっては、推薦を辞退するところも、そもそもアーティストインレジデンスに関心が沸かないから協力しない、ということも今回もあったわけです。なので、やる気のあるアーティストに情報が届くように、そして手を上げてもらうように、工夫していかなければなりません。

企画2

あっぱーあーむのアトリエ ～どげんなもんか一緒にやってみーだわね～

主催： あっぱーあーむ
 共催： 中国・四国 Artbrut Support Center passerelle (パスレル) / アートデリバリープロジェクト2025
 協力： 島根県障がい者文化芸術活動支援センターアートベースしまねい
 協賛： まつえ白濁賑わい協議会、(株)江友
 内容： あっぱーあーむが思い描くオープンアトリエの姿を2日間限定で実践してみる
 目的： 松江市を中心とした第3の居場所の活動が立ち上がる
 目標： オープンアトリエ的な手法を実践し、個人や団体などの様々な立場や属性の方々に参加してもらい、認識を広げる
 構成： アトリエの場、展示と対話の場の2つの構成で実施した

あっぱーあーむとは：
 松江市内の福祉施設に勤務する安部、佐藤、高木の3人によって結成。各々全く別の福祉現場で働く人間が偶然にも出会い、同じ思いを持って立ち上げた、有志によるグループである。障害者や生きづらさを抱えている人にとって、自宅や施設以外の第3の居場所になるような活動を制度の枠を超えて立ち上げることを目標にしている。気楽に誰もが自由に立ち寄れるインクルーシブなアトリエ空間を模索中。

アトリエの場 「あっぱーあーむのアトリエ」

概要： 他者の視線を気にせず、アート創作やくつろぐことに没頭するためのスペース
 対象： 障がいのある方、不登校の方、生きづらさを抱えている方など
 時間： 午前の部 10:30～12:00、 午後の部 13:30～15:00
 定員： 各回10名程度
 参加費： 無料

- ・ 付き添いの家族や支援者はなるべく同席せず、別の場所（展示エリア）で待機してもらルールにした。これにより、周囲の介入や先回りや不要な指示のない、本人の自由な表現を引き出そうと試みた。
- ・ 少人数制にすることで、個別に集中できる環境作りを目指した。
- ・ 机や椅子の他に、座敷、ハンモックなども用意し、利用者が落ち着ける環境づくりを目指した。

展示と対話の場 「あっぱーあーむのつづやき展」 「あっぱーあーむカフェ」

概要： あっぱーあーむの「思考・悩み・歴史」を可視化し、周囲と対話する「開かれた」空間を目指した。
 待機と交流： アトリエに参加している当事者の家族や支援者が、お茶を飲みながらリラックスして過ごす場所を目指した。
 相談・対話： 安部（あっぱーあーむ）、岡村（パスレル）が常駐し、家族や支援者の話を聞いたり、展示を通じて「当事者の自主性」について気づきを得るための対話を試みた。
 気づきの場： アトリエで制作中の利用者を持つ家族や支援者が、この展示を見ることで、当事者の思いや新しい関わり方に気づききっかけを提供した。



アトリエサインの完成を喜ぶ安部（あっぱーあーむ）と土谷（パスレル）



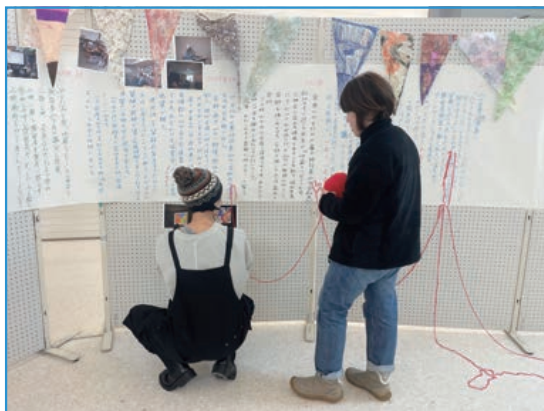
あっぱーあーむのアトリエ



あっぱーあーむのつづやき展



あっぱーあーむがこれまで行ってきたイベントのポスターや、メンバーが関わりのある先進的な施設の事例の紹介や書籍を閲覧できるコーナーを併設した



あっぱーあーむが活動を始めたきっかけから現在に至るまでのタイムラインを展示した

あっぱーあーむカフェ



あっぱーあーむの勉強会



2月14日（土）16:00～18:00、広島県廿日市市を拠点にオープンアトリエ的な活動を展開されている「art201」の日向典子さんを講師にお招きし、「art201」の立ち上げからこれまでの活動の変遷をご紹介いただき、オープンアトリエについて悩み考える時間を持った

あっぱーあーむ振り返り座談会

【座談会参加者】

安部可愛	あっぱーあーむ	渉 秀之	アートベースしまねいろ
佐藤亘子	あっぱーあーむ	岡村忠弘	パスレル
日向典子	art201	土谷 享	パスレル

参加者の変化

土谷 あっぱーあーむのアトリエ振り返り座談会を始めます。2月に開催したアトリエから1ヶ月半ほど経ち、客観的に振り返られるタイミングだと思います。当初いろいろとやりたいことが沢山あった中から絞って開催した今回のアトリエの活動でした。まずは参加された方の反応などを、あっぱーあーむさんから共有いただけますか。

佐藤 印象的だったのは、大柄な Aさんという男性のエピソードです。彼は私が働く施設の利用者さんの1人なのですが、長年「一人暮らしをしたい」と言いつつ、言い訳を作って動けない時期が続いていましたが、最近グループホームに入居して、ちょっといいかもというご本人の気持ちが上向いてるタイミングで今回のアトリエに来られました。

普段私たちは支援者として厳しく接することもあります、アトリエでは色々な人に作品を褒めてもらったことが「ご褒美」のような良い体験になったようです。その後、通所日数を増やす意欲が出てきたり、白黒の左右対称な絵しか描けなかったのが色を使うようになったりと、表現にも変化が見られ、生活や、そのモチベーションの土台作りの中に、絵を描くことを通じて自信に繋がっていると感じました。

職場の他の職員も、彼がアトリエで描いてきた絵を見て「今までと全然違う、すごいな」と驚いていました。彼が一步踏み出すきっかけになったという手応えがあります。

安部 私は今回の活動では、アトリエでの活動というより、カフェエリアで参加者の皆さんとお茶を飲みながらお話する機会を、多く持ちました。

そこで知り合った方が Instagram をフォローしてくださるなど、SNSでの繋がりが目に見えて増えています。この活動に共感してくださった方の中には、不登校支援をされている元教員の方などもいらっしゃいました。「一緒に何かやりましょう」「もっとお話ししたいですね」といった前向きな言葉を多くいただいたので、そうした新しい繋がりが持てたことは、本当に良かったと感じています。今回は「アトリエエリア」と「カフェエリア」を分けたのですが、この作戦が正解でした。親子で来られた際、お母さんと離れてお子さんが制作に没頭でき、お母さんもその間カフェで一息ついたり、外に出られることもあったり「親支援」のような形にもなれたかな。他には、放課後等デイサービスの方々支援者とお子さんなどで来てましたが、事業所では「あれもダメ、これもダメ」と言われがちな行動も、あの場では「こんなんでいいんだよ」と許容される、そんな空気感を出せたおかげで、その施設長さんからも「みんな良い顔で帰ってきました」というメールをいただきました。



アトリエで制作しているお子様等待つ時間の他に、福祉関係者なども立ち寄り、意見交換や今後の協力についての話などが行われ、活発な対話の場となった

もう一つ感動したのは、私が普段仕事している施設の利用者さんでもあるバスマニアの Bさんが、帰り道が不安な Aさんをバス停まで案内してあげたことです。Bさんは非常に緊張しやすく、初対面の人と話すのが苦手だと私は思っていたのですが、二人で雑談をしながら少し距離のあるバス停に向かって歩いている姿を見て、事業所の中だけでは生まれない「化学変化」のような繋がりを感じて嬉しくなりました。これは福祉事業所だけの活動ではなかなか得られない経験だし、楽しいことだと気付かされました。

運営視点での振り返りと「オープンアトリエ」の意義

渉 あっぱーあーむの3人の雰囲気がとても穏やかで、どんな状況も受け入れてくれる安心感がありました。参加者が本来の自分らしさを素直に解放できた日だったのではないかと感じます。

岡村 創作することだけが目的ではなく、コーヒーを飲んだり、誰かと話をしたりする場所そのものに価値があると感じました。障害のあるなしに関わらず、そこに来ただけで安心感を得て帰れる。アトリエとカフェで場所を分けたことで、対話の大切さが際立ったオープンアトリエでした。

日向 私は「自分も制作をしよう」と思って参加しましたが、ハサミが一つしかなかったことで、子供たちと貸し借りが発生し、そこからコミュニケーションが生まれました。「ない」からこそ生まれる温かい交流があるなと思いました。あとは、米袋など、普段私たちが使わない材料も沢山あって、これらを選んだりセッティングする



アトリエでの制作で、手のひら全体を使って元気に制作していた子、この後、トイレの水道で手を洗うことを拒み、シンクや壁面も思い切り塗り始めたのでした



裏方の工夫も、その大変さもわかるからこそ、慮ることができました。いつもの私たち art201の活動では成人対象ですけど、アート201の活動と見比べてみるとオープンアトリエっていうものについては、私たちが常に悩んでいるし、私たちが普段やっていることと比べることができて楽しかったです。

土谷 日向さんをお招きして勉強会も実施しましたが、その中で「福祉のことは福祉に任せて、それ以外のことをやる」という話がありました。アッパーアームとして、どこまでボランティアで継続できるか、目的をどう設定するかが今後のポイントになりそうですね。

安部 正直、資金面は厳しいです。今回は松江市市民活動協議会に入ったことで会場費が半額になるなど、この企画があったからこそ調べ、繋がれたことが大きかったです。材料の移動や保管場所（現在は実家に置いている）も課題ですね。今すぐに拠点が持てるかという、それは現実的ではないので自分たちでできる範囲内でしばらくやっていきたいと考えています。また、参加費の設定も悩みどころです。ワンコイン（500円）程度で安く参加できる仕組みを作りたいですが、自分たちのモチベーションを維持するためにボランティアのままでいいのかという葛藤もあります。

土谷 率直に、日向さんの発言を借りると、今回のあっぱーあーむの活動にはまだ福祉でできることも入っていると思うんです。活動の目的をもっと研いでいくことは何か考えてますか？

佐藤 今後は自分たちだけで全てを抱えず、他の団体と協力して空間を作っていくのも一つの手かなと考えています。例えば、スティックピルの漫画ブースを作っている人たちなどと連携できれば面白いかもしれません。色んな団体と協力することで良い空間になるんじゃないかなと思っています。

安部 2025年度に実施した中で好評だった「県外の施設見学ツアー」をまた進めたいと思っています。しまねいろさんのバスの協力もいただけたそうなので、次回は鳥取の「十人十色」さんを訪ねる

予定です。この見学では地域に根ざした活動を学び、松江でどう活かせるか考えたい。アート201の日向さんのお話にもあったように私も福祉事業ではできないことをしたいという想いからあっぱーあーむの活動を始めたわけなので、自分の頭を柔らかくして、障害者アートにこだわらず色々な人と繋がっていきたいです。

【期待】との向き合い方

岡村 日向さんの「福祉のことは福祉に任せておく」という言葉は響きました。自分の普段の支援業務に照らし合わせたりすると、支援員はアートを通じて「良くなってほしい」「成長してほしい」と勝手に期待をして相手に押し付け、枠にはめようとしてしまう傾向も強く出てしまうこともあると思うんです。

でもオープンアトリエでは、そういった「期待してしまうこと」を捨てて「そのままでいいじゃん」と言える場でありたい、と今回思ったんですね、私自身が。福祉の文脈ではなく、オープンアトリエではフラットな仲間として関わることが強みなんだと感じました。今後、安部さんと佐藤さんたちの活動が続いていく中で、例えばもし僕がそのメンバーの中にいたら、普段の支援員としての思考の癖みたいなのが出てきて『この人をもっと良くしてあげたい』とか『活動の質をもっと上げてほしい』という思いが湧いてきてしまう瞬間があると思うんです。言葉は難しいですが、無意識に相手を『普通の枠』にはめようとする自分が出てきてしまうんじゃないかなと。そんな時に、『いや、そんなことしないでいいじゃん。自由でいいじゃん』と言い合える仲間がいること。それこそが、オープンアトリエを続けていくためのエネルギーになる気がしています。もし、アートを通じて『問題行動をなくす』とか『自立を促す』といったことを目的とするのであれば、それは福祉の世界でやればいい。松江からの帰り道、高知へ向かう車中でパスレルのメンバーとずっとそんな議論をしていたのですが、安部さんと佐藤さんが目指しているオープンアトリエのあり方、『あげなことも、そげなことも、やってごしない(出雲弁)』と思えることの大切さに改めて気づかされました。当事者の方はパワーがありますから、対峙した時に相手のことが好きだからこそ、『もっと良くしてあげたい、そうすればこの人の人

生はもっと良くなるはずだ』という渦に、僕ら自身が引きずり込まれそうになる瞬間があります。でも、その渦に吞まれそうになったら、『いや、それは障害福祉事業の領分だよ』と立ち返り、常に話し合える仲間がいる。それが、活動を楽しみながら継続していくコツなのかなと思います。

そのためには、さっきお話に出たように、いろんな場所へ見学に行って多様なあり方に触れ、『ふと我に返る』ような機会を意識的に持つことも、すごく大事なことだと感じながらお話を伺っていました

日向 私も、職場では「支援者」という役を演じています。でもart201に来る時は、私も利用者さんも「ここではこう振る舞う」という別のチャンネルに切り替えている気がします。自分が来たいからart201に来るというのが絶対条件なんです、みんな切り替えてきていると思うんですね。ここはこんなもんだと思ってくれているのかな。だから、いろんな人が来て通り過ぎていくような感じがいいのかなとは思っているんですけど。でも運営ってことを考えると仲間が欲しいですけどね。

佐藤 先ほど岡村さんが仰っていた『もっと良くしてあげたいという欲が出てくる』というお話、すごく共感します。実は最近、別のアトリエを見学させていただいたのですが、そこでも同じようなお話がありました。そのアトリエでは、最初は『ここは楽しむための場所だから』と納得して通い始めた親御さんでも、時間が経つにつれて、だんだん『目に見える成果物(作品)』を求めるようになってしまうケースがあるそうです。そのアトリエでは、子供たちが自由に表現できるよう、あえて親御さんは現場に入れないようにしています。その代わり、子供たちが活動している時の生き生きとした表情や様子を写真や動画に撮って、LINEでこまめに報告しているそうなんです。これって、日向さんが先の勉強会の時に『みんなの記録をブログに書いている』と仰っていたこととも繋がりますよね。自分自身の『もっと良くしたい』という欲もそうですし、親御さんや周りの人たちが抱く『成果(物)を求める欲』をどう抑えるか。『今のこの瞬間、この表情が大事なんだ』ということ伝える努力、そして自分たちもそれを信じ続ける努力が、運営には不可欠なんだなと。お話を聞きながら、日向さんの活動を思い出して、改めてその大切さを感じました

安部 アトリエって、月謝をいただく形にすると、どうしても『塾』や『習い事』のような側面が出てきてしまいますよね。親御さんからすれば、お金を払って通わせている以上、どうしても見返りを期待してしまう。こちらが募集の際に『子供の想像力を育む』といった文句を書いている、なおさらです。『上手くなる』とは書いていなくても、親はそこに価値を感じてお金を出しているわけですから。そうすると、本来の『オープンアトリエ』という自由な場であるはずが、いつの間にか『期待に応えるための場所(営利目的)』に変質してしまう危うさがあるなと感じています。運営を続けるにはお金が必要ですが、自分たちの理想をどう両立させるかは、本当に難しい問題です。以前、ある経営者の方から『やりたいことをやるために、あえて嫌な仕事をして稼ぎ、その資金で理想を形にする方がやりやすいこともある』という話を聞いたことがあります。実際、運営を考えると、

どうしても福祉的な枠組みに寄っていきがちですね。場所を借りるにしても、福祉的な名目でないとなかなか安く借りられなかったりしますし。運営を安定させるために、例えば資金力のある方にバックアップをお願いするといった『上手なやり方』も、理想ばかり語るのはなく時には必要なかもしれません。ただ、私の根本にあるやりがいは、たとえ規模は小さくても、誰か一人でも『あそこがあるから安心していられる、行けるんだ』と思える場所を作ることなんです。色々な繋がりができると『もっと広められるんじゃないか』『多くの人に届くはずだ』と期待が膨らむこともありますが、そこで足元をすくわれないようにしたい。まずは『たった一人、二人のためでも十分なんだ』という軸をしっかり持つておく。その軸を大切にしながら、塾のような運営スタイルも含めて色々なやり方を学び、自分たちらしい形を模索していければと思っています

日向 私も昔はお金儲けや展覧会を考えましたが、結局つまらなくてやめました。「作品を作らなくていい」としたら、すごく解放されたんです。同じ参加者としてその場を楽しみ、人として喜べる経験こそが重要だと気づきました。art201に行ったら楽しければいいじゃん、て。私がなんか喜んでるっていうか、みんなが同じ参加者としてart201に来て、いっしょに活動していく中での楽しさって、なんかまた福祉の関係性の楽しさとは、すごく違う感覚というか、人として嬉しいんです。「この経験みんな知らんじやろう(広島弁)」みたいな感覚もあるし。それから、福祉の中だけの人のつながりしかないのもすごくつまなくて、やっぱり色々な人と繋がりたいって、そういう意識を持ちながら、art201もこれまで色々なところに研修旅行に行きました。道中で多様な参加者の人たちと色々な話もできるんですね。

渉 お話を聞いていて、今のみなさんの悩みは、これからの『ワクワク感』に向けた、とても前向きな悩みのように感じました。今後どのような活動をしていくにしても、まずは安部さん、佐藤さん、高木さんの3人が、とにかく自分たち自身で楽しんで過ごしてほしいなと思っています。みなさんがなんだかんた言いながらも、楽しそうに活動を続けていけば、そこから自然と良い状況が生まれてくるはずですから。会費をどうするかといった運営上の課題もいろいろあるとは思いますが、それすらも楽しみながら、みんなで悩んでいけば自ずと答えが見えてくるのではないのでしょうか。そんな風に、ふと感じました。

岡村 みなさん障害福祉の現場にいるから分かると思うんですけど、支援の仕事となると、どうしても個別支援計画を書いたり、誰かに進捗を明確に答えなきゃいけないったりと、義務や責任、正直『めんどくさいこと』がすごく多いですね。でも、オープンアトリエっていうのは、そういうのを全部取っ払った場所だと思うんです。例えるなら、友達同士で何かを企画する時の感覚に近い。自分が幹事を引き受けた時に感じるような、心地よい責任感というか。失敗しても『ごめん!』と言えば許してもらえたり、『そんなに言うなら手伝ってよ』と言い合えるような、フラットな関係性。これこそがオープンアトリエの強みではないでしょうか。福祉サービスとして提供しようとする、『絶対に怪我をさせては



座談会でも art201 の日向さんが触れているように、道具や備品の準備や保管は今後の課題にもなる



いけない』といった責任が重くのしかかります。でも、人間には本来『怪我をする権利』というか、自分でリスクを引き受ける権利だってありますよね。僕のいるB型事業所のような場所では、どうしてもそこまで踏み込みきれない、もどかしい部分があるのが正直なところです。だからこそ、こうしたフラットな場があることが本当に勉強になりました。ただ、安部さんも佐藤さんもすごく真面目な方だから、例えば500円の参加費をもらってしまうと、『500円分の対価を返さなきゃ』と、また自分たちを責任の枠にはめてしまう気がするんです。いっそのこと、『私らも500円出すから、みんな条件は一緒やで(土佐弁)』とフラットにしてしまうような工夫があってもいいかもしれません。この活動は、安部さんや佐藤さんの心のリフレッシュにもなるはずです。どうか負担になりすぎないように、お二人が楽しみながら続けていってもらえたら嬉しいなと思います。

あっぱーあーむのこれから

土谷 今後、そして3年後、5年後のあっぱーあーむってどんなふうになってるイメージですか？

佐藤 ええと、そうですね。自分たちのアトリエを月に1回は開催したいな、と言いつつ、まだ具体的な設定や準備が追いついていないのが正直なところです。一方で、昨年もやらせていただいたようなワークショップ形式の活動については、お誘いいただけたり、入り込める場所があったりすれば、ぜひやっていきたいなと思っています。具体的に『いつ』という予定はまだこれからなのですが、他の方が主催されているお祭りやイベントに、ワークショップとしてボツと参加させてもらうような形は、突発的でも動けたらいいなと話しているんです。あ、松江のスティック(市民活動センター)さんのイベントについては、近いうちに日程が決まりそうな感じですね。そういうイベントへの参加とは別に、やはり自分たちの場所として月1回の定期開催もやっていきたいという思いはあります。ただ、

いざ『自由な場所』を作ろうとすると、その設定やルール作りがなかなか難しく、今はまだ模索中……といった感じですね

3年後は……正直よく分かりません(笑)。でも、松江で「あの人たち何かやってるらしいよ」と知られている存在にはなりたいです。固定の場所に縛られず、「旅するアトリエ」のように出雲や浜田など色々な場所へ出向いていくジブシー的な活動も素敵だなと思っています。それもオープンアトリエの魅力というか、移動できるアトリエというのも素敵なんじゃないかとは思ったりします。

土谷 3年後はまだわからないってことですね。あっぱーあーむさんの朗らかな魅力に惹きつけられて、色々な出会いが起こるといいですね。

(2026年4月10日 オンライン)

アートデリバリープロジェクト 2025 を終えて

土谷享 パスレル ADP ディレクター／コーディネーター

2023 年秋に開催した中国・四国ブロックのブロック会議でのこと。パンデミックも落ち着き久しぶりの対面での会議となった。かねてより、各県の支援センターの持ち回りによる中四国ブロック合同企画展を望む声が上がっていて、この会議でその方向性を導き出そうとその議事進行を私が担った。その時の会議のメモを見直してみる。

出席者の現状認識としては次の通りだった。

- ・ 中国四国ブロックは互いのアクセスがしづらい
- ・ 他県からの入場者が見込めない
- ・ 公立施設との連携が薄い、理解が少ない
- ・ 自然が豊かで観光地や世界遺産がある

また、合同企画展に期待する事としては次の通りだった。

- ・ 発表の場が増え、モチベーションにつながる
- ・ 目標となる企画になる
- ・ 県外にもアーティストの友人ができる
- ・ 県外からアーティストを呼び込み、地域の魅力を感じてもらう
- ・ 手軽にアートに触れることができる、日常にアートがある

上記のような前提から次のようなアウトプットの構想が現れた

- ・ 移動美術館、出前アート展、ウーバーアート、回覧板アート、文通アート
- ・ JR などを使ってアートツーリズムやアートツアー
- ・ 大自然の中での屋外展覧会、自然とのコラボ

このようなブレストに対して、下記のような冷静な意見が出た

- ・ 人里離れたところで集客するにはどうするのか、過疎地域での実施となると本当に人が集まらない
- ・ 人が集まるところでしか結局できないのではないか
- ・ 作品の大きさや管理の問題があるし、スタッフが常駐できない

このような議論を経て、各県支援センターが持ち回りにするのではなく広域センターのパスレルが企画を引き取り、毎年2ヶ所程度、合同企画をデリバリーするというアートデリバリープロジェクトがスタートしたのが昨年度の2024年。2024年度は「展覧会」としての形式をとったが、実施した結果、展覧会に出展している多くのアーティストが県を越えて会場まで展覧会を観に来るという実態が見え、それならば、アーティストの移動や創作を通じた交流を重視しようと計画したのが2025年度のアートデリバリーの核の部分だった。

徳島県で実施したアーティストインレジデンスは、この報告書の

座談会テキストにもあるように、大変に手応えのあるものだった。アーティスト同士の交流、鳴門海峡の渦潮への小旅行や受け入れ施設との交流、アートセンター（ふらっとアート工房）の開所式に日程をぶつけたことから、多くの人との交流も生まれた。また、今回新たに見えた事としては家族や支援者同士の交流も大切であるということだった。これは、島根県で実施したオープンアトリエでも見えたことでもある。アトリエとカフェという二つの機能を同居させた結果、参加者が制作している時間は引率してきた方はカフェエリアで過ごすことができた。しかも対話を促す仕掛けのあるカフェだ。

移動、交流、創作、対話、この4つのポイントは、先に書いた2023年の会議メモにある諸課題を正当に更新する内容だろう。広義ではアーティストインレジデンス、狭義ではオープンアトリエ、この二つの活動はアートが出現する機会を底上げするものであり、障害者芸術文化活動の母数を自発性を持って増やすことができる画期的なコンテンツだ。全国各地に障害者のためのアーティストインレジデンスが増えれば、アーティストも得意な事を武器にあちこちで活躍する機会が増える。そして大都市のみに発表機会が集中することなく、田舎であることも魅力につながる。また、地域の中にオープンアトリエがあれば、事業所ではアート活動ができなくても、オープンアトリエに行けば楽しむことができる。しかし座談会での議論にもあるように、社会福祉（倫理）と社会福祉事業（制度）の間にあるクレパスにどうすれば掛橋をつくることができるのだろうか。僥倖のあとにはいつも必ず悩みが訪れる。

その他の取り組み

ブロック会議

- ① 第1回ブロック会議（オンライン開催）
日時：令和7年 5月15日（木）13:00～15:00
参加者：支援センター10名 行政関係者9名
- ② 第2回ブロック会議（オンライン開催）
日時：令和7年 8月25日（月）10:00～11:50
参加者：支援センター9名 行政関係者4名
- ③ 第3回ブロック会議（広島・対面開催）
日時：令和7年12月18日（木）14:00～16:00
参加者：支援センター9名 行政関係者4名
- ④ 第4回ブロック会議（オンライン開催）
日時：令和8年 3月10日（火）13:00～15:00
参加者：支援センター6名 行政関係者2名

ブロック研修会

- ① 第1回ブロック研修会（オンライン開催）
日時：令和7年 8月25日（月）13:00～15:00
テーマ：支援センターファーストステップ
行政説明：「障害者芸術文化活動普及支援事業の概要について」
障害者文化芸術計画推進官 森 真理子 氏
話題提供者：武居 ひとみ 氏（山口県障害者社会参加推進センター）
参加者：支援センター10名 行政関係者9名
- ② 第2回ブロック研修会（対面開催）
日時：令和7年12月19日（金）9:30～11:30
テーマ：支援現場の課題から学ぶ芸術文化支援のこれから
会場：ワークピア広島
広島県広島市南区金屋町4-15
参加者：支援センター9名 行政関係者4名
- ③ 第3回ブロック研修会（オンライン開催）
日時：令和8年 3月10日（火）10:00～11:50
テーマ：支援現場の課題から学ぶ芸術文化支援のこれから 続編
参加者：支援センター6名 行政関係者1名

エビローグ

共に場にいるということ

岡村忠弘 バスレル センター長

今年度、バスレルでは、「ファーストステップ事業」や「アーティスト・イン・レジデンス」など、さまざまな取り組みを行ってきた。その中でも、あっぱーあーむの皆さんとともに取り組んだオープンアトリエの時間は、私にとって、これまでの“支援”という枠組みを再考する機会となった。

あっぱーあーむの皆さんは、日頃、障害福祉サービスの現場で利用者と向き合い、支援者としての役割を担っている。その専門性や経験は、誰かの生活を支えるうえで欠かせないものである。一方で、今回取り組んだオープンアトリエは、そうした「支援の場」とは異なり、誰もが自由に出入りし、それぞれの表現や存在がそのまま尊重される、開かれた共生の場を目指した。

だからこそ、支援者としての視点をどこまで持ち込むべきなのかを考え続けていた。関わりすぎず、しかし無関心でもない。その距離感は、最後まではっきりと言葉にできなかった。

実際の場では、「支援する」・「支援される」という関係だけでは捉えきれない時間が流れていた。支援者としてその場に居ながらも、従来の支援の枠組みだけでは説明できない場面や関係性が生まれていたように思う。その曖昧さそのものが、今回のオープンアトリエという場の特徴だったように思う。そこには、「支援する」「支援される」という一方向の関係ではなく、同じ空間に居合わせる者同士が影響を受け合う、もう少しゆるやかで対等な関係が生まれていたように思う。

オープンアトリエでは、支援者として関わるのではなく、その場に集う一人として参加しながらも、自然と相手のことを思い、気にかけているあっぱーあーむの皆さんがいた。

共に場をひらくとはどういうことか。
共に存在するとはどういうことか。

明確な答えはまだ見えていない。けれども、あっぱーあーむの皆さんと試行錯誤しながら過ごしたこの時間は、これからの障害者芸術文化のあり方、そして支援のあり方を考えるうえで、確かな手応えとして残っている。

この実践を通して感じたことや考えたことを、これからもそれぞれの現場で少しずつ問い続けていきたい。

厚生労働省 令和7年度障害者芸術文化活動普及支援事業

中国・四国ブロック 障害者芸術文化活動広域支援センター

『中国・四国 Artbrut Support Center passerelle』

センター長：岡村忠弘

芸術文化活動支援コーディネーター(障害福祉)：平谷尚大

芸術文化活動支援コーディネーター(舞台、音楽)：北添紫光

芸術文化活動支援コーディネーター(美術)：土谷 享

令和7年度事業報告書『Passerelle Report』

発行：中国・四国 Artbrut Support Center passerelle

デザイン：一般社団法人バンタナル、伊藤健太

イラスト：徳弘希伊

協力：あいサポート・アートセンター、

鳥根県障がい者文化芸術活動支援センターアートベースしまねいろ、

愛媛県障がい者アートサポートセンター、徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター、

岡山県子ども・福祉部障害福祉課、広島県アートサポートセンター、薬工ミュージアム分室、

香川みんなのアート活動センター KAGAWAMOVES、

山口県障害者芸術文化活動支援センター

発行：2026年3月31日

NPO法人脳損傷友の会高知青い空／中国・四国 Artbrut Support Center passerelle

住所：高知県高知市塩屋崎町2丁目12-42 2F

TEL：088-803-4100 FAX：088-803-4420

E-mail：passerelle@blue-sky-kochi.com

<https://asc-passerelle.com/>



